150
43
S

始

# 藤井博士全集 第五卷 第二分冊

# マルキシズム批判

東京

玉川學園出版部

藤井博士筆蹟

150
63

1163

于祿百福子孫千
億穆穆皇皇宜君
宜王不愆不忘率
由舊章（詩大雅假樂第
二章）

藤井博士全集　第五巻・第二分冊

# マルキシズム批判　目次


一　唯物史觀の解剖と其素成分……一
二　唯物史觀の要訣及びそれについての考察……二十
三　唯物史觀と歴史法……六九
四　マルクス主義國家觀の倫理的批判……九一
五　マルクス主義價値論の倫理的批判……一四九
六　階級的闘爭論の倫理的批判……一七九
七　唯物史觀の倫理學的・社會學的・心理學的批判……二〇九

# 一　唯物史觀の解剖と其素成分

唯物史觀と一般的にいふけれども、爰に論ずる所は一般的のものではなく、その最好代表者の一人であるマルクスのそれを解剖するにある。

## 一

爰に唯物史觀といふのは、獨逸語のディ・マテリアリスティッシェ・ゲシヒツアウフファッスンク（Die materialistische Geschichtsauffassung）を譯したものである。若しこの獨逸語を文字通りに直譯すれば、唯物論的歴史觀といふ方が適當であるが、それでは餘り長過ぎて宜しからざるにより、約めて之を唯物史觀としたのである。（先年中央公論誌上に余が此語を用ひて以來、此語は幸に同攻諸賢の承認を經たやうに思はれるが、猶少しく氣遣はしい點があるので、一應爰に斷つて置く次第である。）

此唯物史觀は此他猶種々の語によつて表はされてゐる。或は歴史的唯物論(Der historische Materialismus) 或は經濟的唯物論(Der ökonomische Materialismus)或は歴史の經濟的解釋(Economie Interpretation of History)等それである。語は種々に異るけれども其含蓄する所の意義はすべて同樣であつて、大體同一の歴史觀を表示すべく用ひられてゐる。故に爰には此種々の語を用ひるのをやめて、一の唯物史觀の語を以てすべてを表示せしめることにする。

此唯物史觀乃至之に類する思想は、西洋に於いても、可なり昔からあつた所の思想であつて、第十八世紀の始頃に伊太利のヴィコ(G. B. Vico, 1688－1744)が既に之を唱へて居り、其後も引き續き此方面の思想の開拓に努めたものがあつたので、決してマルクス(K. Marx, 1818－1883) に始つた思想であるとはいはれない。それ故エンゲルス(F. Engels, 1820－1895)が剩餘價値と唯物史觀とはマルクスの創說した二大眞理であるかのやうに說いたのは、社會科學上に於ける親友の功績を餘りに誇大にいひ表はしたものであつて、決して嚴密な事實上の判斷として聽くべきではない。しかしながら從來の唯物史觀乃至それに類似した思想の多くを採つて自家藥籠中のものとなし、猶それに關聯した其他の幾種の自然觀・人間觀を加味して唯物史觀を集成したものはマルクスであるといふことは、吾等はエンゲルスと共に之を容さねばなるまい。此點からいへばエンゲルスの言も甚しい曲說であるとのみいふことは出來ない。しかもマルクス自身の思想系統全體からいへば、如何にもエンゲルスの言つた如く、剩餘價値と唯物史觀との二つの見解が基礎となつて、彼の社會觀・經濟觀の全體系が建設されてゐるのであつて、マルクス自身に取つては、此唯物史觀は甚だ重要な思想である。斯かる次第であるから、マルクスの唯物史觀を解剖することは、一面に於いては、凡そ唯物史觀と稱へられる一般の思想系統を解剖することゝなり、他面に於いては、マルクス自身の社會觀・經濟觀を理解する端緒となるのである。斯かる理由によつて、余は爰にマルクスの唯物史觀を解剖せんとするのである。

## 二

マルクスの唯物史觀は、四つの異る思想體系をその淵源としてゐると認めるこ

とが出來る。その一は獨逸の古典的觀念論、殊にヘーゲル(G. W. F. Hegel, 1770—1831)の辯證哲學であり、その二はフォイエルバッハ(L. Feuerbach, 1804—1872)の人間學的唯物論(Der anthoropologische Materialismus)であり、その三はサン・シモン(C. H. De Saint-Simon, 1760—1825)の歴史の經濟的解釋であり、而して最後の第四はダーキン(Ch. Darwin, 1809—1882)の生物進化の說である。少くともこの四個の思想體系は、マルクスの唯物史觀に顯著な影響を與へてゐる。

ヘーゲルが伯林大學の敎授となつたのは、一千八百十八年であつて、恰度マルクスの生れたその年であつた。而して彼の死んだのは、一千八百三十一年であつて、マルクスの十三歳の時である。故にマルクスがボンや伯林の大學に於いて、法律・哲學などを研究するやうになつた頃には、ヘーゲルは最早此世に生存してゐなかつたので、マルクスは直接ヘーゲルの講筵に參することはなかつたのである。而もマルクスは最初は學者となり、大學の敎授となつて、學究的生活を送らうといふ志を抱いてゐたのであるが、彼の性格と當時の普國の形勢とは彼をしてその志を變ぜしめ、一千八百四十年には二十二歳の若冠を以て「萊因新聞」の編輯長たらしめて、學究的生活を中廢せしめてしまつたのである。それ故にマルクスは如何程廣くヘーゲル哲學を研鑽し、如何程深くそれを理解してゐたかが分明でない。しかしヘーゲル哲學は、當時殆ど全獨逸を風靡した哲學であつて、贊成するにも反對するにも、苟くも哲學壇上に說を立て、論を行らんとするものは、必ずヘーゲル哲學に對して何分かの理解を有たなければならない時代であつた。そこでマルクスは兎も角もヘーゲル哲學を研究したに相違ない。而して研究するに從つて、その辯證法は彼の興味を惹くやうになつて彼自身の方法も之を辯證法であるとなし、自ら「余はヘーゲルの學徒なり」と唱へるやうになつたのである(資本論第二版序文、一千八百九十年オットー・マイスナー出版本第一卷序文一八頁)(以下此版本に依る)。然らば、その所謂辯證法とは何であるか。それは卽ち正・反・合の三剖法をいふのである。爰に有といふ正があれば、それに對して必ず無といふ反がある。併し有と無とは互に矛盾するものであるから、之を統一するものは、有にあらず、無にあらざるものでなければならない。有にあらず、無にあらざるものとは何か。それは轉化である。そこで有といふ正と無といふ反とは、轉化といふ合になつて表はれる。

此正・反・合の三割法的進行は吾人の理性の動く根本法則である。而もヘーゲルに從へば、世界の唯一實在は理性であつて、一切は此唯一理性の顯現であるが故に、この正・反・合は單に吾人の理性が動く根本法則であるばかりでなく、世界一切の動く根本法則である。吾人の精神も歴史も、自然も皆此三割法的進行法で動くものであり、動いてゐるものである。之がヘーゲル哲學の辯證法であり、而して彼の哲學の骨子を形成してゐるものである。要するにカント哲學に於いて、矛盾を包含してゐるものは不可能なものなりとせられたのが、ヘーゲル哲學に於いては、矛盾を包含してゐるものでなければ活動することなく、世界一切を動かす所のものは矛盾なりとせられるやうになつたのである。換言すれば、「爭は一切の父なり」といふヘラクライトスの思想を一層嚴格な論理の形式で表明したものと見ることが出來る。

マルクスは此辯證法を以て、人間の歴史を解釋せんと試みたのである。一千八百四十八年の「共産黨宣言」に於いては、人間の歴史はすべて階級鬪爭から成立するものであると論じて、社會に階級の衝突・鬪爭がなかつたならば、人間の歴史なるものは現はれて來るものではないといふ程に述べてゐる。又一千八百五十九年の「經濟學批判」の序文に於いては、「人間は彼等の生存の社會的生産に於いて、彼等の意思から獨立した從つて一定の必然的な關係中に入り込む。卽ち彼等の物質的生産力の一定の發達段階に相應する所の生産關係に入り込む」(シュトッツガルト・ディーツ・ナハフ出版一千八百九十七年版序文一一頁(以下皆此版本に依る)と說いてゐる。若し人間の歴史が嚴密なる辯證法で發展するものであるならば、それは嚴密に論理的のものであつて、そこに自由意思の働き得る餘地はない譯である。マルクスは其點を認めて右の如く說けるものであらう。一千八百四十七年の「哲學の貧困」に於いては、「文化の始ると同時に、生産は職業・身分・階級間の對立の上に、而して遂には、蓄積せられた勞働と直接の勞働との對立の上に成立せしめられたのである。對立なくして進歩あることは出來ない。これやがて文化が今日まで遵由した法則である」(シュトッツガルト・ディーツ・ナハフ出版一千八百八十五年版三九頁(以下皆此版本に依る)と說いてゐる。これは「共産黨宣言」に見えた所の「從來の歴史はすべて階級鬪爭の歴史である」といふことゝ同一の趣旨を述べ

たものであつて、結局一切を動かすものは矛盾なりといふ辯證法の精神を表はしたものである。斯かる論述はマルクスの著書の到る處に見えてゐる所の思想である。即ちすべて物の運動は必ず何等かの矛盾あるが故に起るものである。從つて社會の變動も亦然らざるを得ないのは當然である。然らばその社會の變動を惹起する所の矛盾は如何なる種類の矛盾かといへば、マルクスはそれは生産の形式に於ける矛盾であると答へるのである。然らばその生産上の形式に於ける矛盾とは如何なることであるかといへば、その點がやがてマルクスの唯物史觀の本領になるのであるから、詳しく之を論述しなければならないのであるが、今は唯ヘーゲル哲學が如何にマルクスの思想に影響したかを論述するのであるから、唯物史觀の本領となるべき部分の論述はしばらく後廻しとする。かくて前述の筋を辿つて更に論を進めて行かう。マルクスに從へば、生産上の形式は之を法律的に言ひ表はせば、財産上の形式である。それ故に社會の變動は生産上の形式の矛盾から起るといふのは、換言すれば、財産上の形式の矛盾から起るといふ意味となるのである。人類社會には始から私有財産制度があつたのではなく、原始社會に



於いては寧ろ共産主義が行はれてゐたのである。それが漸次變じて私有財産の形に進むやうになつて來たのである(資本論第一卷四四頁脚註第三〇參照)。

しかし斯やうに私有財産の制度が確立せられて、爰に斯かる正が出來れば、又それに對する反が起つて、そこに又新たなる三割法的進行が起らざるを得ない。即ちその結果としてあらはれたのは、勞働力の自由賣買といふことであつて、その爲に社會に賃銀勞働者なるものがあらはれ、それが資本的生産となつたのである。換言すれば、私有財産なるものがあれば、その必然の結果として今日見る如き資本主義(リスムス)が起らざるを得ないのである(資本論第一卷五五〇頁)。しかし資本主義が起れば、そこに又新たな三割法的進行があらはれて來て、又別種の社會現象を現ぜざるを得ない。「資本的生産方法から生じた所の資本主義的收得方法は、從つて資本主義的私有財産は、自己自身の勞働に基ける個人的私有財産の第一の否定(ネガチオン)である。然るに資本主義的生産は自然過程の必然を以てそれ自らの否定を生ずる。それがやがて否定の否定(ネガチオン・デル・ネガチオン)である。此否定は私有財産を復興することはせず、別に資本主義時代の獲得物を基礎とする個人的財産を造り出す。即ち協業、土地や勞働共

者によつて生ぜられた生産手段やの公有を基礎とする個人的財産を生ずる」(資本論第一卷七二八―七二九頁)やうになるのである。

右の論述によつて、マルクスは如何に三剖法の辯證法を重用して、氏の社會進行に關する思想體系を建設しようと努めたかゞ解るのである。而して此の三剖法の辯證法はヘーゲル哲學の骨子を形成してゐるものであるとすれば、マルクスの思想は如何に深くヘーゲル哲學に負ふ所あるかゞ了解せられるではないか。しかし此研究法は兩者如何に相接近してゐても、その內容からいへば、ヘーゲルのは飽く迄觀念論であり、マルクスのは何處迄も唯物論であつて、その點に於いては兩者は殆どその兩極端に立つてゐると言つてもいゝのである。而して此兩者の中間に立つて、その懸け橋となつた所のものはルードヰッヒ・フォイエルバッハである。

## 三

フォイエルバッハが一部のヘーゲル學徒に及ぼした影響は非常に素晴らしいものであつて、殊に一千八百四十一年に公にされた氏の「基督教の本質」(ウエーゼン・デス・クリスチントウームス)は實に重大な影響を當時に與へたものである。そのことに就いてエンゲルスは「當時の感動は殆ど一般的であつて、吾等は一時殆どフォイエルバッハ學徒であつたのである」(「ルードヰッヒ・フォイエルバッハ」)と當時の狀況を述べてゐる。然らば斯くの如き廣汎な影響を與へた所のフォイエルバッハの思想は如何なるものであつたであらうか。

ヘーゲル哲學は彼の死後に於いて、彼の學徒の間に二大學派に分裂したのである。ヘーゲルの所謂絕對精神、唯一實在たる絕對精神、卽ち神がヘーゲル哲學の中心核をなしてゐるものである、從つてその側面を更に徹底的に探究するものは、やがてヘーゲル哲學をその進むべき路へ進ましめる所以であると見て、その側面を研究したのが一派となつて、所謂神學派となり、之に反してヘーゲルの絕對精神の發展の抑の基本的出發點は物質的自然であるとの思想を取り、一切實在の基礎が唯一實在は物質であると見るのがヘーゲル哲學の眞相を徹底せしめたものであると論じたのが他の一派となつて、所謂唯物論派となつたのである。前者は之を右黨と稱し、後者は之を左黨と唱へてゐる。斯くの如くヘーゲル哲學は兩極端の

説に岐れたのであるが、フォイエルバッハは唯物論派の左黨に屬してゐた一人である。

フォイエルバッハはその始はヘーゲルの立場からさまで離れてゐなかつたが否「死及び不死についての思想」(一八三〇年)の如きでは殆どヘーゲルの立場に立脚してゐたといつても宜いのであるが、年を經るに從つて次第にヘーゲルの立場から離れるやうになり、一千八百三十八年に「ピール・ベール」を講じた頃になつては、全くヘーゲルの立脚地から離れて、彼自身の唯物論の立脚點が鮮かに讀まれるやうになり、翌一千八百三十九年の「ヘーゲル哲學批判」に於いて露骨に彼の立場を宣明した。ヘーゲルは諸々の哲學・宗教・時代・民族の間に存する彼等の顯著な差異だけを而も唯それ等が向上して行く階程だけを認めて之を叙述した。しかしヘーゲルは、それ等の間に存在する共同的なもの、等一的なもの、同一的なものをば全然背景の中に匿してゐる。ヘーゲルの見解及び方法そのものの形式は、唯非包容的な時間のみであつて、同時に包容的な空間をば逸してゐるものである。從つて彼の體系はただ從屬や繼續のみを示して、同位や同在に就いては何等論じてゐない。成程最後の發展段階は常に他の段階を含む所の全體ではあらうが、しかしその全體そのものは一定の時間存在であり、從つて特殊性を有つてゐるから、他の存在からその獨立の生命の精髄を吸ひ取り、以てそれの完全な自由に於いてのみ有つ所の意味そのものを奪ひ去らなければ、他の存在をば己の中に含むことは出來ない。ヘーゲルの方法は、自然の進行をそのまゝに取り上げたものだと自負してゐる。しかしそれは勿論自然の進行を模倣したものに過ぎない、模寫には、原物の生命が缺けてゐる(フォイエルバッハ全集第二卷一八六頁)と論じて、ヘーゲル哲學からの分離を明にしてゐる。其の後彼は「基督教の本質」(一八四一年)、「將來の哲學の根本法則」(一八四三年)「犧牲祕義」等に於いて漸次に彼の立脚點を明にした。それ等にあらはれた彼の思想は所謂人間學的唯物論といはれてゐるものである。人間學的唯物論とは、物質から形成せられてゐる人間をあらゆるものゝ中心として考へる思想であつて、神もその物質的人間の投射に外ならぬ。而してその物質なるものは、唯一の實在であつて、思惟(デンケン)は存在(ザイン)から來たものであり、決して存在は思惟から生れたものではないと見る思想である。即ちヘーゲル哲學の正反對の思

想なのである。「動物は單純な生活を營み、人間は二重の生活をなしてゐる。動物に於いては、內的生活と外的生活と一つであるけれども、人間の生活はそれとは異つて、內外兩者の生活を有つてゐる。而して人間のその內面の生活といふのが人間といふ種に關する生活であつて、やがて人間の眞髓を形成するものである」(基督教の本質)。この種の本質が宗教の根柢となるもので、神といふ觀念の如きは、此種の本質の如何による。「神は人間が思惟し、感ずる通りにあらはれるものであり、又神の價値は人間の價値のある通りに現はれるものであつて、それ以上のものでもそれ以下のものでもない。……宗教は人間が分れて二つとなつたものであるといつても宜い。卽ち人間は自分に對して神を對立せしめたものである(homo homini deus est)」(基督教の本質)。啻にそればかりではない。凡そ人間は、その攝取する食物の如何によつてその本質が形成せられるものであつて、「神はアムブロジアといふ不死の食物を攝る故に不死であり、人間はパンを食ひ、土地から生じた果物を食ひ、可死の食物を食ふが故に可死のものとなつてゐる。本質は食物によつて定まり、食物は本質によつて決まる。人はすべて自己の個性卽ち本性・年齡・性・位置・職



業・品位等に適合するものを食ふもの。である。而してそれ等を食して益、それになるのである」(犧牲祕義)。フォイエルバッハの此如き論は、一見すれば如何にも滑稽に見えて、或は諧謔を弄してゐるのではないかと思はれるのであるが、しかしそれは決して滑稽でも諧謔でもない。彼は眞面目に之を主張してゐるのである。當時獨逸には、前に述べたヘーゲルから分れた所謂左黨一派の唯物論者の外に、生理學や生物學の研究から來た所のモレショット、ビュヒナー等の別派の唯物論者などあつて、唯物論は大に氣焰を揚げてゐた時代であるから、フォイエルバッハが斯くまで極端に唯物論を主張するやうになつたのも、必ずしも奇怪とするに及ばないことである。

斯かるフォイエルバッハ哲學がマルクスの思想に深刻な影響を與へてゐる事はマルクスの著書・論文の諸處に散見してゐる顯著な事實である。「神聖家族」(一八四五年)の序文に、「獨逸に於ける眞の人本主義は、唯心論若しくは思辨的觀念論程恐ろしい敵を有たない。唯心論又は思辨的觀念論は現實存在する個々人の代りに『自意識』又は『靈魂』なるものを現實存在するものとし、而して福音書の著者

と共に、生命の源をなすものは靈であつて、肉は則ち之に與らずなどゝ說く所の說である云々」（メーリング「獨逸社會民主黨史」第一卷一九三頁に拔萃せられたものに依る）と說いて、所謂唯心論又は思辨的觀念論は、全く本末を顚倒してゐる思想であることを表明してゐる。又「經濟學批判」の中には、「人間の存在を決定するものは意識ではなく、却つて彼等の意識を決定するものは、人間の社會的存在である云々」（「經濟學批判」序文一一頁）と論じて居る。是は曾てフォイエルバッハが、ヘーゲル哲學は全く主客を顚倒してゐる、吾等はヘーゲルの主としたものをば客となし、而して却つて客としたものを主としなければならない、露骨にいへば、存在を主となし、思惟を客としなければならぬ、と論じたと殆ど同樣な筆法である。是から見てもフォイエルバッハの影響が甚だ鮮かであることを見るに足りるであらう。

しかしフォイエルバッハは、人間はあらゆる思想の中心であり、又中心であらねばならぬものであることを論じたのであるが、しかしその人間は如何なる必然の法則に支配されて動くものであるかといふことまでは論究してゐない。その點まで徹底的に推究して、フォイエルバッハの人間學的唯物論を歷史的唯物論（ヴントW. Wundtは之をその「哲學概論」に於いて社會學的唯物論と名づけた）としたのがマルクスである。

## 四

然らばマルクスの史的唯物論は、全然彼の獨創の思想であつて、先哲中に斯かる思想を抱懷してゐたものが全くなかつたのかといへば決してさうではない。彼以前にも多く存したのであつて、サン・シモン、ルイ・ブラン（J. J. Louis Blanc）等はそれ等の人々である。就中、サン・シモンは博學多識、而も自己の思想を系統立てるに於いて他の人々よりも優つてゐたものがあつたので、彼の思想は他に影響を與へたことが多かつたやうに見える。オーギュスト・コント（A. Comte, 1798—1857）の實證哲學も、その淵源は全くサン・シモンの思想中にあるのである。こんな譯であるから、氏の思想はマルクス、エンゲルスの思想にもその影響を與へてゐる。エンゲルスはサン・シモンを賞讃して「佛蘭西革命は結局貴族市民及び貧民間の階級鬪爭に外

ならぬと見たのは一千八百二年に於ける卓見である」(ハンマッヘル「マルクス學の哲學的經濟學的體系」六〇頁)といつてゐるのを見ても、如何に彼等はサン・シモンの思想を重んじてゐたかゞ分る。サン・シモンは一千七百八十九年に大革命が勃發してから一千八百十五年に至る僅か二十六年間に十回以上も憲法が變更されてゐるのを指摘して其理由を明にしてゐる。サン・シモンに從へば、凡そ政治の實權の歸着する所は富である。然るに憲法を制定するに當つて這般の基礎的道理を見逃してなす故に、成立した所の憲法も何等落着を得ることが出來ない。佛蘭西革命は要するに斯かる事情より生ずる階級鬪爭に外ならない、即ち舊階級が漸次に沒落して新階級が興起する所の現象に外ならない。サン・シモンは斯くの如く佛蘭西革命を觀じて、その原因と經過とを時の經濟事情を以て解釋しようとしたのである。ルイ・ブランも此說に贊同して專ら大革命について稍詳細な歷史を書いてゐるが、その根本思想に至つては、サン・シモンの說と大差なく、經濟的欲求は社會の階級鬪爭を起し、階級鬪爭の結果は新しい組織の社會を形成するやうになるといふのである。(バルト「社會學としての歷史哲學」)

斯うしたサン・シモンやルイ・ブランの思想は、直接間接に、又意識的無意識的にマルクスやエンゲルスの思想に影響したのであるが、しかしサン・シモンの思想體系中には尙不徹底な點があつた。即ち彼は一面に於いてこの如く社會變動の原因として經濟的基礎を認めると同時に、又其他の一因として觀念的基礎を認めたのである。即ちその意味に於いて彼は二元論的立場に立つてゐたのである。彼は或る時代の政治組織とその當時の學術とは密接の關係を有つてゐるものであつて、要するに政治組織は學術の基礎の上に立つてゐるものであるといふ。中世紀の封建制度はその當時の神學の基礎の上に立ち、近世の國會制度は形而上學と法律學との上に立ち、而して最近の產業的社會制度は實證科學の上に立つてゐるものである。斯くの如く神學か形而上學か科學かの中の孰れが最も盛んであるかの如何によつて、その當時の政治組織は決定して來るものであると說いてゐる。斯樣にサン・シモンは歷史の發展の解釋に對して、前述の經濟的事情の外に猶斯かる觀念的基礎をも認めてゐたのであつて、その最後の統一に就いては不徹底であつた。彼の後繼者の一人なるコントは寧ろ此觀念的基礎の方面を開拓し、他の一

人ルイ・ブランは重に經濟的基礎の方面を推究した。而してマルクス、エンゲルス等は經濟的方面を重視したのであるから、思想の系統はルイ・ブランの方に近い。併しマルクスの思想は、種々の點に於いて未だ充分精練されてゐない矛盾を含んでゐるけれども、此サン・シモンの二元論に就いても矢張不徹底な意見を有つてゐる。彼自身は此二元論を超越して、經濟的基礎の一元論に躍進したやうに考へてゐるが、事實はそれに反してサン・シモンと同樣に二元論の立場に立つてゐる。よしやサン・シモンの如く言語に表はして此二元論の立場を曝露してゐないにしても、暗默の中には之を認容してゐるのである。此點については後に節を改めて論述する機會がある。

## 五

マルクスの唯物史觀に重大な影響を與へたものであつて最後に擧げるべきはダーキンの生物進化論である。ダーキンの「種の起源」が公にせられたのは一千八百五十九年であつて、マルクスの「經濟學批判」が出たのと恰度同年である。それ故にそれ以前のマルクスの著書にはその影響はないが、それ以後の彼の著書には明にその影響の跡を認知することが出來る。殊に「資本論」の中に於いてその影響の跡が鮮であつて、彼の社會進化論と、ダーキンの生物進化論とは、同一の理論を異つた對象に當嵌めたもので、兩者は之を平行して考察することが出來るものであると述べてゐる。「勞働手段（アルバイツ・ミッテル）は一物若しくは數物の複合から成るものであつて、勞働者は之を自分と勞働對象（アルバイツ・ゲーゲンシュタンド）との間に挿入して、その對象に對する自己の活動を現はさしめるのである。凡そ勞働者は諸物の機械的・物理的・化學的性質をば自己の目的に從つて、他の諸物に作用せしめんが爲に利用する。故に勞働者が直接に占取する所の對象は、――彼の身體の諸器官のみが勞働の手段として役立つやうな場合の出來上つた生活資料例へば果實の如きものの採取などは之を措き、――勞働の對象ではなく、勞働の手段である。かくて自然物そのものが勞働者の活動の器官、卽ち勞働者自身の身體に附け加へられる所の器官となり、――バイブルの敎に反して――勞働者の自然の體格を延長するにいたるのである。土地は一面に於いては人間の本來的糧食庫であり、他面に於いては人間の勞働の手段の

本來的兵器廠である。……のみならず土地そのものが既に勞働の手段である。……勞働の手段を使用し、且つ之を造り出すことは、その萌芽は既に之を動物の中に認めることが出來るとしても、確に人間特有の勞働過程（アルバイツプロツセス）の特色といつて宜い。されば『フランクリンは『人間は道具を作る動物なり』と定義した。既に亡び去つた動物種屬の身體組織を認識するのに遺骨の構造を知ることが肝要であるのとひとしく、勞働手段の遺物を知ることは、既に廢滅し去つた經濟的社會狀態を判斷する上に於いて極めて重要である。經濟上の時代を區別する所のものは、當時に於いて何が造られたかといふのではなく、それが如何にして、如何なる勞働手段によつて造られたかといふことである。故に勞働の手段は人間の勞働力（アルバイツクラフト）の發展を測定する尺度となることが出來るばかりでなく、斯かる勞働がなされた所の社會事情の指示ともなるのである』（『資本論』第一卷一四一——一四二頁）。此等は一面に於いて、ダーキンが生物は生存競爭から自然淘汰や最適者の殘存が起り、次第に諸の機關の發生を見るやうになつて、そこに漸次高等な動物が現はれて來るやうになつたと說いた生物進化の思想をそのまゝに社會の進化に當嵌めて、勞働の手段の進化



につれて生產方法（プロドウクチオンスワイゼ）を變化せしめ、生產方法の變化は社會組織の變化を促して、爰に社會進化は現はれて來るものであると述べたものである。換言すれば、生物學上の機關學（オルガノロギー）は、さながら社會上の勞働の手段を研究する基礎的補助を爲すものであるといふ考である。されば、エンゲルスはマルクスの葬式に於ける追悼演說に於いて、マルクスとダーキンとを比較して、二者は共に學術上偉大なる貢獻をなしたものであると賞揚して次の如くに述べてゐる。「ダーキンは有機的自然界に於ける進化の法則を發見し、マルクスは人間歷史に於ける進化の法則を發見した。人間は政治學問・藝術・宗敎等を追究する前に、先づ以て食はねばならず、飲まねばならず、居らねばならず、着ねばならぬといふ極めて明白な單純な事實も、從來は兎角觀念的思想の雜草に蔽はれて明にされなかつた。從つて直接な物質的生活手段の生產、從つて或る民族若しくは或る時に應じた經濟的發展段階は、その當時の國家の制度・法律思想・藝術乃至は宗敎思想を發展せしめた所の根源をなしてゐること、從つてこの根源から以上の思想を說明しなければならないといふことを知らなかつたのである。否、知らなかつたのではない、從來、生起した事象の理由は、之を冠

履顚倒して考へてゐたのである」(ヲルトマン「史的唯物論」二一三頁拔萃)と。

更に今一つダーキンの思想のマルクスに及ぼした影響と見るべきものがある。「經濟學批判」に於いては、一切の文化はすべて經濟的關係の基礎の上に立つてゐるものであることだけを論述してゐるけれども、その經濟上の發展といふことが、自然の發展と如何に關係してゐるものであるかゞ明瞭ではなかつた。從つて兩者は如何に結び付くべきものであるかゞ明白でなかつた。勿論マルクスの世界觀は唯物論である故に、人間と自然とは實在その者の方面から見れば、一列一體のものであつて、離れた異つた二物でないことは明な譯であるが、併しそれ等の兩者が現象界に現はれたものとして如何に相互に結び付くべきものであるか、それが明瞭でなかつたのであるが、ダーキンの「種の起源」に啓發されて、マルクスは經濟的進化も自然のそれと一列一體のものであつて、兩者は決して離れたものではないと論述して來るやうになつたのである。「勞働は人間と自然との間に於ける過程である。即ち人間が自分の動作を以て自然との間の物質交換を媒介し、調節し、管理する所の過程である。人間は自然資料(ナツール)に對して自然力(ナツールクラフト)である。人間はその身體に屬する所の自然力、即ち腕・脛・頭腦・手等を働かしめて、以て自然資料を彼自身の生活に必要な形態に變化せしめるのである。かくて彼は此如き運動によつて彼以外の自然に作用し、又それを變化せしめると同時に、彼自身の本質をも變化せしめるのである。即ち彼は彼の本質中に眠つてゐる所の潜勢力を開展せしめ、その力を自己自身の支配力の下に置くのである」(「資本論」第一卷一四〇頁)。斯樣にしてマルクスは現象として現はれた人間と自然とを結び付けたのである。斯かる企畫は「經濟學批判」以前には見えなかつたものであつて、著述としては最も明に「資本論」に見えてゐる所の思想である。

マルクスの唯物史觀に重大な影響を與へてゐるものは、以上に論述したヘーゲル、フォイエルバッハ、サン・シモン、ダーキンの四者であるが、しかし詳しくいへば固より此等に止まるものではなく、此等以外にも種々な人々の影響を受けてゐる。しかし大綱からいへば、右の四者の思想をマルクスの唯物史觀の素成分と見るのが妥當の見解であると思ふ。然らばそのマルクスの唯物史觀の實質は如何んなものであるか、又それが歷史及び社會說明として如何程の價値を有つてゐるものであ

るか。是は篇を更めて論述しようと思ふ。（大正三年一月二十三日稿了）

――「日本社會學院年報」第一卷第三册所載――



# 二　唯物史觀の要訣及びそれについての考察

余曾て本院年報（日本社會學院年報）第一卷第三册に於いて、マルクスの唯物史觀の素成分について論じておいた。今、又此一小論文に於いて、その要訣と觀るべき點を論じ、それについての考案を聊か述べようと思ふ。

## 一

マルクス及びその一派の唯物史觀に就いては、從來甚だ多く論議せられた。哲學者も、社會學者も、經濟學者も、法律學者も、宗教學者も、皆熱心に又眞摯に、この見解について討究する所があつた。唯物史觀に關する文獻は、廣義の近世哲學問題についてのそれ等の中で最も多いものゝ一つであらう。然らば何故然く廣く、且つ多く檢覈せられたであらうか。說そのものが非常に深遠で、且つ多意なものがある爲であらうか。必ずしもそれとは思はれない。唯物史觀の世界觀は唯物論で

あり、その社會＝歴史觀は、機械觀・因果觀である。唯物論には深遠な思想が多くない、機械觀・因果觀には、スピノーザのそれのやうな幽玄なのもないではないが、概していへば俗認識（ポプレーレエルケントニッス）に理解され易いものが多い。だから唯物史觀は、カント認識論のやうに、深く、而して多意のものである故に多く考覈されたとは思へない。しかし、さうすれば疑念は猶更增して來る。それ程餘り深くも細かくもない唯物史觀の說が、何故それほどに論議されたかといふ疑が愈〻募つて來る。それは斯ういふことではなからうか。唯物論や、因果觀は、世界觀・人生觀として、それ自らで完全なものではないが、しかし何分か世界・人生の實相を闡明してゐるもので、他日完全なる眞理、卽ち完全な世界觀・人生觀が樹立せられたらん時には、その素成分として、その中へ這入り込んで行くべき契機（モメント）を有つてゐるからではなからうか。若し然らざれば、デモクリトス以來今日に至るまで哲學思想界に生命を保つてゐるべき筈はない。だがそればかりではない。モレショット、ビュヒナー、フォーグト、ヴグナー等の唯物論の論諍が、獨乙の哲學界を賑はしたのは、前世紀の中頃のことで、その末葉には、はや「觀念論の復活」が諸方に反響せられるやうになり、今、二十世紀は、觀念論の時代



乃至宗教の時代なりと豫言せられてゐるに拘はらず、猶唯物史觀が論議せられてゐる所を觀れば、まだ何か遺つてゐる或るものがあるのであらう。

マルクスの唯物史觀は、その餘剩價値と共に彼の社會主義の基礎をなしてゐるものである。（セリグマンは之に對して反對の見解を有つてゐる。唯物史觀は過去の事件の論理であり、社會主義は將來にあるべき筈の理論であつて、兩者は全く異つてゐると論じてゐる。「歴史の經濟的解釋」一〇八頁）。然るに社會主義は、現代の社會問題を考察するものゝ必ず一瞥を與へざるを得ないもので、而してその社會問題は、今日の資本主義的社會組織に聯起して、未だ解決せられずにゐる大問題である。そこでその社會問題を考察しようといふもの、は、勢、唯物史觀にまで溯源せざるを得ない。しかしそれだけではない。前世紀の末頃から、認識論上からして歴史學（ゲシヒツヴイツセンシヤフト）の問題が多くの哲學者によつて論議せられるやうになつた。此唯物史觀もそれ等の爲に新たな興味を惹起したといふこともあらう。兎に角種々の事情からして、唯物史觀は思想界の各方面に於いて、思索の活ける對象となつてゐる。そこで余は、爰にさうした事情の下に於ける唯物史觀は、如何なる圈内に於い

てその妥當性を有し、如何なる邊に行けばそれを失ふものであるか、その價値ある所は如何なる點で、その缺點は如何なる所であるかを論じて見たいと思ふ。

## 二

そこで直に唯物史觀の評論に入るべきであるが、一般讀者の便宜を慮つて、マルクスの唯物史觀とは如何なる見解であるかといふ內容の叙述から始めようと思ふ。（既にその唯物史觀の內容を理解してゐる讀者は、第二節より第四節に至るまでの三節を省略して可なりである）。

唯物史觀の世界觀は言ふまでもなく唯物論である。世界の唯一實在は物質であつて、精神は如何樣かの仕方でそれから派生せられたる第二次的存在である。（「神聖家族」、「經濟學批判」序文一一頁、「哲學の貧困」等に依る）。斯ういふ世界觀であるから、人間を觀、人間の社會を觀、而して彼等の活動と、その中に出現する出來事とを觀るのにもすべてその見地からするのである。マルクスに從へば人間社會の一切の出來事は、言ふまでもなく人間の活動から起るもの、否、人間の活動そのも



のなのであるが、その活動の中で、原本的で、それ自らで存在するものであつて、而して決して他のものから派生せられたものでない所の活動は、如何なる活動であるかといへば、それは物質的生命の維持及び存續の活動に外ならない。それが原本的、自依的のものである（カウツキー「倫理と唯物史觀」第五章參照）。然るに其物質的生命を維持し、之を存續せんとするのは、凡そ生命あるものゝすべてがなす所であつて、生物一般に通じた自然法である。人間も亦その自然法に支配せられて生存活動を爲すのであるが、併しながらその活動は、環界の事情と、その活動の力とに制約せられることを免れることは出來ない。そこで人間の生存活動、――之をマルクスの用語でいへば、生產活動とも、經濟活動ともいへるのであるが――その生存活動は自然外圍の事情に依つて規定せらるゝ機械的のものとならざるを得ない。即ち唯物論的世界觀は、必然に機械論的世界觀となるのである。マルクスは、ブルードンが自由な買手と自由な生產者といふことを考へて、使用價値と交換價値との對立は全く人間の自由意思から生じたものであると主張したのを駁し、「生產者が、分業と、個々物の交換との上に建設せられたる社會に於いて生產する間は、

――而してこれは正しくブルードン氏の豫想なのであるが、――生産者は必ず賣るやうに餘儀なくされるのである。ブルードン氏は、生産者を以て生産用品（プロドゥクチオーンスミッテル）（直譯すれば生産方便又は生産手段といふべきであるが、しかし方便とか手段とかいふと何となく無形の謀計のやうに聞えて面白くなし、且つマルクスのこの語の意味は、Arbeitsmittel などゝ同じやうに、生産に必要なる道具・機械、尙、廣い意味になつた時には、生産の資料、卽ち素材（ロー・マテリアル）等をも含めて意味するのであるから、生産に必要なる品物といふ義で、斯く譯した。）の主人公としてゐるが、而も氏は此等の生産用品の所有は、決して自由意思に依存するものでないことを認容せねばなるまい。加之、此等の生産用品は、大部分生産者が外國から取り入れた產物であつて、近代の生産に於いては、生産者がその欲する量を生産するの自由を有たない。生産力の現在の發達段階に於いては、生産者は何れか一定の段階に於いて生産するの已むを得ざるものがある。又消費者でも同じことで、消費者は生産者よりも自由だとは決していへぬ。消費者の意見は彼の方便と、その需用とに依屬するもので、而してこの兩者は彼の社會的位置によつて決定せられ、社會的位置は一般の社會組織に依存するものである。馬鈴薯を買ふ勞働者も、綴條布を買ふ婦人も、無論皆彼等の意見に循ふものであるが、しかしその意見の差異は皆彼等の社會に於ける位置から說明せられ得ることであり、而してその社會上の位置そのものは畢竟社會組織の結果なのである」（「哲學の貧困」獨譯一四頁）と說いて、生産者にも消費者にも自由といふものは決してない、所詮は皆その當時の社會組織が必然に銘々の社會的位置を決定し、その社會的位置は、又必然に銘々の行動を規定してゐるもので、銘々が自由意思を有つて行動するといふが如きは、一つの迷妄に外ならぬと論じて、人間行動の必然論を說いてゐる。（マルクスが明に人間に自由を否定してゐるのは、右の個處ばかりでない。右同書の他の場所にも、又「經濟學批判」「資本論」等の他の書にもある）。

## 三

斯くマルクスは、人間と人間の行動とを機械的に觀た結果として、人間の集團たる社會と、其社會に於ける變動とをも、すべて機械的に觀ることゝなつたのである。

唯物論的に人間を觀れば、人間的活動の原本的のものは、その物質的生命を維持存續する所の活動であつて、その以外の活動は、皆それから派生された餘り物か、又はそれを助けるものに過ぎぬものとなることは、前に述べた通りである。斯うした性質の人間が相集つて一つの社會を形成すれば、自然人間そのものゝ性質が、社會そのものゝ上にも現はれて來なければならぬ道理である。卽ちさうした人間の集團たる社會の中に現はれ來る諸の事象の中で、最も原本的で、それ自身で存在してゐる事象は、物質的生命を維持存續せしむる活動、卽ち經濟的事象であつて、その他の事象、例へば法律でも、政治でも、乃至は宗教でも、道德でも、學藝でも、皆それから派生せられた第二次的の事象とならねばならぬ。從つてその社會の形式を決定し、その變動を惹起する所の原本動力は、經濟的活動そのものであらねばならぬ。「經濟的範疇は、社會的生產關係を理論的に言ひ表はしたものなるに過ぎぬ。換言すれば、社會的生產關係の抽象に外ならぬ。然るに眞正な哲學者たるプルードン氏は、事物を逆倒する。右の如き實際の關係の內に(之も亦哲學者プルードン氏の言であるが)只『人間性の非人格的理性』の懷中で微睡してゐたその原理、その範疇



の肉化のみを見るのである。又プルードン氏は經濟學者として、人間は一定の生產關係の下に、綿布や、麻布や、絹布やを製り出した事を理解してゐる。併し、氏の理解してゐない事は、その一定の社會的關係なるものも、實はその綿布や、麻布等々のやうに、人間の生產物たることである。社會的關係は、生產力と密接に結合せられてゐるもので、新しい生產力が獲得せられると共に人間はその生產方法(プロドウクチオーンスワイゼ)を變へる。生產方法、換言すれば生活資料を得んとする方法が變はると共に、人間はその社會的關係を變へるのである。手臼は封建の社會を生み、汽臼は工業的資本家の社會を出した。しかし、彼等の物質的生產方法に循つて、社會的關係を形成した所のその同一の人間は、又、その社會的關係に循つて原理、觀念、範疇を形成したのである。されば、これ等の觀念も、範疇も、それ等を表現してゐる社會關係と同樣に決して永久のものではない。それ等は皆歷史的、暫有的、無常的產物である。吾等は生產力の不斷の增進、社會的關係の不斷の壞滅、觀念の不斷の構成の運動中に生活してゐる。唯變動せざるものは、その運動といふことからの抽象ばかりである」(「哲學の貧困」一〇〇—一〇一頁)。

斯やうにマルクスは、社會の一切の事象と、その變動とを、物質的生産關係から因果的に說明してゐるのであるから、それ等の原動力として、精神的な理想や、觀念や、原理や、範疇やを認めないのは勿論である。マルクス曰く、「試にプルードン氏と共に、時代の順序を追ふてゐる眞の歷史とは、觀念や、範疇や、原理やが現はれた史的繼續なりと解して見よう。各原理は、皆それの現はれた世紀を有つてゐた。例へば權威の原理は第十一世紀を、個人主義の原理は第十八世紀を、各自分の世紀とした。從つて世紀が原理に屬してゐたので、原理が世紀に屬してゐたのではない。換言すれば原理が歷史を造るのであつて、歷史が原理を造るのではない。そこで最後に、原理と歷史とを助けんが爲に、何故にその原理は、恰度十一世紀又は十八世紀にのみ現はれて、その他の世紀には現はれなかつたかと問へば、吾人は必然に十一世紀・十八世紀の人間は如何であつたか、その當時の彼等の要求、彼等の生産力、彼等の生産方法、彼等の生産の素材は如何なるものであつたか、最後に一切此等の生活條件から現はれた人間と人間との關係は如何であつたかを、仔細に檢索せざるを得ない。此等のすべての問題を探究することは、やがて、その各世紀の人間の眞



實の、而して通俗の歷史を研究することであり、又、それ等の人間は如何にして彼等自身の戲曲の作家であると同時に亦俳優でもあつたかを示すと同じ意味のものではないか。然るに我々は人間を彼等自身の歷史の俳優であると同時に、作家であるとするその瞬間から、廻り路を辿つて辛じて眞の出發點に立ち歸つたものである。何となれば、我々は我々が出發した永久の原理を破毀してしまつたからである」(「哲學の貧困」一〇七—一〇八頁)。

又曰く、「人間はその生活の社會的生産に於いて、必然的で、その意思から全然獨立した一定の關係に這入り込む。卽ちその物質的生産力の發達段階に相應した生産關係に這入り込む。この生産關係の總體は、やがてその社會の經濟的組織を形成するものであつて、而してその經濟的組織は、法律・政治等の上層建築の實際の基礎を作すものであり、又、社會の一定の意識形式は、皆それに適應するものである。物質的生活の生産方法は、社會的・政治的乃至精神的生活過程一般を制約するものである。人間の存在を決定するものはその意識でなく、却つてその反對に、人間の意識を規律するものはその社會的存在である。社會の物質的生産力は、その或る

發達段階に於いては、現在の生産關係と矛盾する。之を法律上の語でいへば、その生産力がそれまで活動してゐた範圍である所の財産關係と矛盾する。生産力の發展形式から生産關係はその桎梏に激變する。斯くて社會的革命は起きる」(「經濟學批判」序文一一頁)。斯やうにマルクスは、社會事象中で、原本的・自依的のものは經濟的事象であつて、その他は皆それから派生せられたものである、而してそれ等の事象の進動は、皆、自然的・必然的のものであると說くのである。

## 四

さて社會と社會の進動とを機械的・因果的に觀るといふことは、結局それ等を自然科學的認識の對象として觀るといふことである。自然科學的認識の對象として社會を觀るといふことは、一定の條件が與へられれば、その進動の結果は如何になるであらうかを豫定することが出來るといふ意味である。マルクスは、既に機械的・因果的に社會及びその進動を觀じた以上、必ず將來の社會を豫定することの出來る處にまで進まざるを得ない。マルクスはその「共產黨宣言」に於いて次の



やうに說いてゐる。卽ち人類の歷史は畢竟する所、階級鬪爭の歷史である。自由民と奴隸、貴族と平民、大名と郎黨、親方と徒弟、約言すれば、壓伏するものと壓伏せられるものとの鬪爭の歷史である。然らばそれ等の階級は如何にして生じたかといへば、それは言ふまでもなく、その當時の經濟事情から必然に現はれ出でたものである。「大工業は、亞米利加の發見によつて準備せられてゐた世界市場を開展した。世界市場は商業・航海・交通に無限の發展を與へた。此等は又轉つて工業の擴大を促し、工業・商業・航海・鐵道が益擴大し、ブルジョアジーが益發展するにつれて、彼等はその資本を增加し、中世紀以來傳來せるすべての階級を壓迫してしまつた」(「宣言」一八九九年版一〇頁)。吾等の時代はブルジョアジーの時代である。吾等の時代の對抗階級は、むしろ甚だ簡單なものである。壓迫する市民の階級と、壓迫せられたる貧民の階級とのみである。ブルジョアジーは、中世紀以來の一切の制度を破壞した。神聖らしい樣子をしてゐた宗敎や政治から其の後光を奪ひ去つた。家族生活から輯睦的感情を剝ぎ取つて、單に之を金錢關係のものにしてしまつた。「ブルジョアジーは生產用具(プロドゥクチオーンスインストゥルメンテ)、從つて生產關係、又從つて一切の社會的關係を斷えず

革新せずしては存在することが出來ぬ。然るに昔ながらの生産方法をば毫も變ぜずして保持することは、從來からの一切の産業的階級の第一の存在條件であつた。生産の不斷の革新、一切社會的狀態の常住的動搖、而して永久の不安及び運動は、此のブルジョア時代をして、一切の從前のものと異らしむる所以である」(「宣言」一一——一二頁)。ブルジョアジーの社會は農村を衰頽せしめて、急激に都市を膨脹せしめた。從つて一國人口の分布を甚しく不平均にして、政治でも法律でもその他一切の文化を都市に集中せしめるやうになり、又、生産用品を少數者の手に歸せしめるやうになつた。しかしかうしたブルジョア社會は、決して永く持續するものではない、社會進動の自然の大法に循つて、それ自らで破滅すべき運命を有つてゐるのである。「最近數十年の商工業の歴史は、近世的生産力の近世的生産關係に對し、即ちブルジョアジー及びその權力の存在條件たる財産關係に對した敵對の歴史に外ならぬ。爰には唯、週期的に反復して、現在の全ブルジョア社會の存在をば次第にはげしく威嚇しゆく所の、商業上の恐慌をいへば十分である。これ等の商業上の恐慌の爲に、啻に既製の産物の大部分のみならず、又既に生ぜられたる生産力の大部分が逐次破壞せられた。此等の恐慌の中に一種の社會的傳染病が流行した。その傳染病は、從前の時代には不合理と見られたもの、即ち過剰生産の傳染病である。社會は之が爲に自ら急に一時野蠻の狀態に陷つてしまつたやうに思はれた。恰も饑饉や、あらゆるものを打ち毀してしまう戰爭が、生活資料を奪ひ去るやうに見えた。而して工業も、商業もそれ自ら破滅するやうに見えた。それは何故であるか。それは社會があまり多くの文明と、あまり多くの生活資料と、あまり多くの工業と、あまり多くの商業とを有つたからである。是迄社會の規律に服してゐた生産力は、最早市民的財産關係を促進せざるばかりでなく、却つて此等の關係に對して餘りに力强くなり過ぎて、彼等は最早その桎梏によつて制せられない。而して彼等がその桎梏を擺脱するや否や、彼等は全ブルジョア社會を無秩序のものとなし、ブルジョア的財産の存在を危險ならしめる。斯くて市民的事情は餘りに狹小となり、彼等生産力の造り出した富を把持することは出來ない。ブルジョアジーは如何にして此の危難を脱するであらうか。一方に於いては、生産力の一群を高壓的に滅却してしまうことによつて、他方に於いては、新市場を征服すると同時に、益、舊市

場の實益を獲得することによつて。然しかくすることは、ブルジョアジーが、一層廣汎な、一層猛勢な危機を呼び起し、愈その危機を防遏する方便を少くすることによつて達せられる。曾てブルジョアジーが封建制を打ち滅した武器は、今や却つてブルジョアジーそのものゝ頭上に加へられた」(「宣言」一三——一四頁)。ブルジョアジーは、吾と吾を殺すべき刄を研いだばかりでなく、その刄を振り廻すべき人間を造り出した。即ち貧民を造り出した。かくて如何にしても此のブルジョアジーの社會、即ち資本主義の社會組織は、それ自らで破滅して行くべき自然の理勢を具へて居る。即ち私有財産制度は自然に破滅して、共産主義の社會が現出しなければならぬ。「資本の專有は、その資本を成長せしめた生産方法に對して、最早一條の鐵鎖となつた。生産用品の集中と、勞働者の同盟とは、彼等が彼等の資本主義的外殼と一致することの出來ぬ點にまで進んだ。今や資本主義の私有財産の最後を告げる梵鐘は鳴り渡つた。財産の掠奪者は今や自ら掠奪せられるのである」(「資本論」第一卷七二八頁)。社會及びその進動を因果的機械的に觀たマルクスは、現代の資本主義の社會も、自然の大鐵則に從つて、自づと滅び行くものと觀たのである。

## 五

以上はマルクスの唯物史觀の要訣である。

以上の要訣を觀ずれば、マルクスの唯物史觀は、歴史法の存在と唯物論の可能との二大豫想の上に成立してゐることが明瞭である。それで從來現はれた唯物史觀に關する文献も多く此の點に向つて評論を試みてゐる。余も亦先哲研鑽の後を追うて、專ら以上の點について聊か考察する所を述べて見よう。

法則とは如何なる概念であるか。法則は通例或る規範を示す所の規範的法則と、事實の生滅聯絡を表はす所の生起的(ゲシエーニス ゲゼツツ)法則とに區別せられてゐる。今は先づ取り敢へず後者の概念について述べる。生起的法則といふは、自然科學などに於いて自然の法則などいはれる時の法則であつて、その命題は次の如くである。一群の經驗的事實が、或る一定の條件の下に置かれた時には、常に同樣の現象を呈せざるべからずといふのである。例へば墜落するすべての物は皆gの加速度で墜落すれば、それは墜落の法則なりといひ、或は二個の物體相對する時に常に$\frac{MM'}{R^2}$の力

で相牽引するといふ經驗的事實のある場合には、之を物質牽引の法則卽ち引力の法則といふが如くである。さて斯うした自然の法則は、通例、如實に客觀の物そのものに卽して存在してゐるもので、それ等の物を自分の法則といふ鐵鎖で嚴重に縛り付けて置くものゝやうに考へられてゐるのであるが、それは唯便宜と習慣とに依る謬想であつて、之を認識批判的に觀れば、法則は吾等の經驗統一の一方式に過ぎない。此の眞理を闡明したのは、カント認識論の大功績であつて、今日に於いては、哲學者は無論、科學者でもこの眞理を認めないものはないやうになつた。「つい近頃まで、通例、物的法則は自然の定則であつて、それ自らで宇宙を支配するに十分であると思はれてゐた。今や吾人は、法則とは、吾人が觀察したと信ずる所の多くの同樣(シミラリティース)の事の單なる記述、而も時としては誤れる記述に過ぎぬものなることを告白せざるを得ない」(ポインティング)といひ、「引力の法則は、宇宙に於ける物質の各部分は、他の各部分に關係して如何にその運動を變ずるかの簡明なる記述であつて、何故に各部分は、斯く運動するかを語るものでもなく、又、何故に地球は太陽の周圍に一定の曲線を描くかを語るものでもない。そは唯簡明な數語を以て、廣大



なる現象の間に觀察せられたる關係を簡單に總括するのみで、思想の經濟に外ならぬ」(カール・ピーアソン)(タムソン「科學概論」五〇—五一頁に依る)。

然らば斯かる經驗統一は如何にして可能であるか。此の問題はカント認識論以來の大問題で、余もそれについて多少考察してゐる所があるけれども、今はその方面へ深く這入り込まねばならぬ必要を認めない。唯その法則によつての經驗統一を「法則認識(ゲゼツフェルケントニツス)」(ホリッチャーの用語に依る)と名づけて、その可能及び成立を豫想して置くに止めよう。さて此の法則認識は、自然現象に對しては容易可能なりとするも、人間現象に對しては如何であらうか。それに就いては、自然現象の法則認識を容易に認容する人でも、人間現象の法則認識を信ずるのは稀である。それ等の人々は斯う考へてゐる。法則認識は一群の經驗的事實が、同一條件の下に置かれて、同一の現象を呈するといふことが、幾度でも反覆して生起することを豫想してゐる。然るに自然現象は此の豫想に適合するけれども人間現象は適合しない。それゆゑに自然については法則認識が可能でありとするも、人間に關しては甚だ疑はしい。換言すれば、自然法は可能なりとするも歷史法(歷史的法則(ゲシヒトリフ・エスゲゼツフ))のそれは

疑はしいと論ずるのである。然らばかうした說の當否は如何んなものであらうか。

歷史法の法則認識の可能が疑はしいと考へる理由は、少くとも二つ考へられる。一つは人間現象に於いては、自然現象に於けるやうに、一群の經驗的事實が、曾てと全く同一の條件の下に置かれるといふことはない。從つて同一の現象を呈するといふことはない。換言すれば、人間現象は反復しない。一度起つた事は一度限りであつて、決して二度以上現はれることはない。さうした反復をなすのに、人間現象は餘りに複雜してゐるといふのであつて、他の一つは、人間は自由意思を具へた人格者である。さうした人間の集團たる社會上の事象に、何で同一現象の反復があり得ようといふのである。かうした理由があるので、歷史法の法則認識は凡そ法則認識といふものゝ豫想に適合しない。故に歷史法の法則認識は疑はしいといふのである。

然らば右の理由は、果して歷史法の法則認識をして、凡そ法則認識の豫想に矛盾せしむるものであらうか。先づ自由意思の方面より考察しよう。抑自由とは如



何なる意味であるか。自由には物的自由、政治的自由、心理的自由、倫理的自由、純理哲學的自由等種々の自由があつて、種々の意味を有つてゐる。しかし今は、此等のすべてに亘つて仔細に論ずる必要はない。唯心理的自由、卽ち選擇の自由について論ずれば十分である。選擇の自由とは、吾が甲・乙・丙・丁の欲求の目的觀念について思慮し、選擇する場合に當つては、吾はその孰れでも、吾の好む所のものを選擇することが出來るといふ自由である。歷史法の法則認識を否認する人々は、この選擇の自由は、人間を自然から區別する所以の一つであつて、之が爲に、歷史法の法則認識は、一般に法則認識といはるゝものゝ豫想に矛盾するのである。自然にはかうした自由がない。甲・乙・丙・丁の間に選ぶなどといふことはない。必然にその中の孰れかに歸さねばならぬといふのが自然である。それ故自然法の法則認識は可能であり得るが、人間にその選擇の自由がある爲に、歷史法の法則認識の可能が疑はしくなると論ずるのである。しかし是は甚だ謬つてゐる見解である。選擇の自由の右の解釋からすれば、A なる人が甲・乙・丙・丁中、任意に選ぶことが出來るといふことは、A なる人と、その選ばれたる甲又は乙、又は丙、又は丁と何等一定した必

然の關係がないといふことの意味を含蓄してゐるのである。然らばそれが吾人の經濟的事實と適合するかといふにさうでない。グリーンやヂュキー等が夙に論じたやうに、選ばれた欲求の目的觀念は、その人の品性に最も適合したもので、兩者間には必然の關係が顯然として存在してゐる(グリーン「倫理學序論」、ヂュキー「倫理學」「心理學」)。孔子も君子は義に喩り、小人は利に喩るとか、或は君子は刑を懷ひ、小人は惠を懷ふといふたのも、皆選ばれたる欲求の目的觀念と、選んだその人の品性との間に、或る必然的關係のあることを示すものである。是が吾等の經驗的事實であつて、若しその事がなかつたならば、選んだ人は、全く何等の原因もなく動機もなく選んだといふことになる。是は吾人の意思作用の說明として、甚だ不都合なものである(ヒスロップ「倫理學綱要」第四章參照)。且つ吾等が選擇する際には、リップスがいつたやうに、明にその欲求を意識してゐる。決して目を閉ぢて籤を抽くやうなものではない(リップス「倫理の根本問題」)。されば吾等の意思作用は、所謂選擇の自由を主張する人々の說くやうなものでないことが明かである。

斯くいはば或はいはん、若し選ばれた欲求の目的物の觀念と、その人との間に一



定必然の關係があるならば、爰にAなる人があつて、甲・乙・丙・丁の中に選ばんとする際に、Aの未だ選ばざるに先つて、Aは孰れを選ぶであらうかを豫告することが出來る筈である。然るに事實それは出來ない。出來ない處から見れば、人と目的物との間に、一定必然の關係があるとはいへぬ。豫告(プレディクション)は自然法の法則認識の重要な一特質であると。然り豫告は出來ぬ。しかしそは、人間といふ非常に複雜で、而も非常に微妙な作用にも感應する因子であるので、その因子の一切の素成分を知り盡くすことは困難であり、またその感應作用のすべてを知り盡くすことも出來ないが爲に豫告は出來ぬのである。是は必ずしも人間に限つたことでなく、自然に於いても複雜して而も微妙な因子を有するものは、豫告が殆ど出來ない、出來ても甚だ不確實なものである。天氣豫報の如きものである。天氣豫報が不確實だからといつて、氣象といふ一群の事實に自然法は流れて居らぬとは誰も斷言しない。否、氣象學の進歩した曉には、その自然法も次第に明になり、天氣豫報も精確なものになるであらうと信じて居る。それ故、その人間といふ因子も出來るだけ之を簡單にし、又その周圍の事情も出來るだけ簡單にすれば、幾分の豫告をなすことが出

來る。卽ち敎育の有無、精神作用の相異により、又その人の品性を知る事の精粗深淺により、豫告の確否も異つて來るのは事實である。それ故選ぶ人と、選ばれた物との間には、一定必然の關係ありと觀るのが、經驗的事實に能く吻合するのである。

そこで問題は、それならその人の品性は、如何にして生じたかといふことになる。それは遺傳からも、敎育からも、境遇からも來る。遺傳については、セリグマンのいつたやうに、ワイスマン派の見解に依るも、新ラマルク派の所說に循ふも、結論に差異は生じて來ぬ。何となれば、その孰れに依るにしても、過去の環界の或る形式が、吾等の品性に作用するといふことだけは動かないからである。セリグマンはその際唯物史觀を、環界（エンヴァイロンメント）說の一つと見てゐるので、從つて、縱令所謂選擇の自由を許しても、環界說としての唯物史觀は謬見といへない。否、それを否定することこそ、統計學、法律學、經濟學、政治學、社會學、又倫理學でさへもの存在を不可能ならしめる如き甚しい不合理に陷るのであると論じてゐる（セリグマン「歷史の經濟的解釋」九三——九五頁）。

又假りに個々の人には選擇の自由を許しても、吾人は大數現象（マヲセンエルシヤイスンゲン）を認識の對象とすることが出來る。今日の統計學の進步は如何なる邊にまで及び、如何なる認識批判的確實性を有つてゐるものであるか、余は深く此の事を了知してゐないが、しかし大數現象の觀察は、自然科學等にも用ひられてその效驗性を現はしてゐるもので、決してむげに黜くべきものでないと思ふ。此の大數現象の觀察からして、種々の社會現象が、大なる因果の波に搖られ搖られてゐるものであることが是迄多く明にせられた。

以上論じたことによつて、選擇の自由といふことは、必ずしも歷史法の法則認識が一般の法則認識の豫想に背反するものなりといふことを論斷するものではない。

## 六

次に人間現象は決して一度以上起らない、これが一般的法則認識の豫想といふことに背反する、故に歷史法の法則認識の可能が疑はしいといふ點について考察しよう。

人間現象は、一たび生起すれば、それが一つであり、而してすべてであつて、同一事象が永久に二度來ることはないのである。アレキサンダーも、シャーレマンも、ナポレオンも、世界に唯獨りの人であり、且つ永久に唯獨りの人である。羅馬帝國は再び起らない。佛蘭西革命は二度來ることはない。人間現象は流れて已まぬ時の潮と共に、斷えず新しい路を辿り、新しい姿を現じつゝ進んで行く。人間現象には反復がない。然らば自然現象には反復があるであらうか。否、自然現象にも決して反復はない。物體の墜落を見よ、彈丸も落下する、羽毛も落下する。落下するといふことからいへば、右は同一事象の反復のやうであるが、しかし決してさうではない。彈丸は彈丸で落下するので、羽毛として落下するのではない。羽毛は羽毛として落下するので、彈丸として落下するのではない。だから空氣中に於いて兩者を竝べて同時に落下せしめても、決して同一の現象を呈しない。梅も成長する、櫻も成長する。成長するといふ側からいへば、反復のやうであるが、實はさうではない。梅は梅として成長し、櫻は櫻として成長するのである。又同じ彈丸を幾度も同じ高さから落下せしめたとしても、決して同一事象の反復ではない。かやう



に自然現象にも、全く同一事象の反復といふことのないのは、人間現象と同じことである。

然らば自然現象の同一の反復といふことは如何なる事であるかといへば、例へば物體の墜落に關する多くの經驗を統一せんとする場合に、それに必要な事象のみを抽出して觀、それに關係なしと觀た所の部分をば排除(エリミネート)していふことである。即ち自然現象の同一事象の反復とは、現象そのものが、如實にさうであるといふのでなく、吾等の經驗統一作用、即ち認識作用が抽象していふことである。若しさういふやうに、或る一群の經驗を統一せんが爲に、それに必要な部分を抽出して反復といふならば、それは人間現象にもないといふことは出來ぬ。例へば共有財産制度より私有財産制度へ進んで行つたことは、印度民族の間にも、羅馬民族の間にも、日耳曼民族の間にも、スラヴ民族の間にも見える所の社會事象である。而して若し之を如實に觀れば、皆それ〴〵特殊點を有つてゐて、個々別々のものである。しかしその共有財産制度から、私有財産制度へ進んでゆくことに關する經驗を統一せんが爲に、それに必要と觀ゆる點のみを抽出していへば同一事象の反復といふ

ことが出來る。その他族制についても、道德觀念についても、政治についても、皆同様のことがいへるのである。されば認識統一の必要上抽象していへば、人間現象も亦反復するものなりといふことが出來る。果して然らばこの點に於いても歴史法の法則認識は、一般的法則認識の豫想に背反するものではない。以上二點――而してそれはすべてであると思ふが――共に法則認識の豫想に背反してゐないとすれば、歴史法の法則認識は可能な譯である。

## 七

しかし、爰に此の歴史法の法則認識に對して非難がある。それは凡そ法則認識は歴史の認識ではない。歴史の認識は法則によつて一般化された認識ではなく、個々の事象の眞相を闡明した特殊化された認識である。歴史も自然科學と共に一つの經驗科學ではあるけれども、認識の性質上、自然科學とは異つてゐるものであるといふのである。是はギンデルバントやリッカートなどの説く所である。ギンデルバントは經驗科學を分けて、自然法の形に於いて、一般的のものを研究する



科學と、歴史的に規定せられたる形に於いて、個々的のものを研究する科學との二つにした。前者は現實生起する事柄の、常に同一である所の形を考究し、後者はその唯一度それ自らで規定せられた内容を探索する。前者は之を法則科學（ゲゼツヴィフセンシャフト）といふべく、後者は之を事象科學（エルアイグニスヴィッセンシャフト）と名づくべきである。前者の科學的思惟は、ノモテーティシュで、後者のそれはイディオグラーフィシュであると説いてゐる（ギンデルバント「プレルーディエン」第三版、歴史と自然科學、三六四頁）。リッカートも、「實在は、之を普遍的のものの見地より考察すれば自然となり、之を特殊的のものの見地から考察すれば歴史となり」（リッカート「グレンツェン」一九〇二年版二五五頁）といふてゐる。以上二氏は、自然科學も歴史も、共に經驗科學であつて、その根本的に岐れる所は、科學的研究の對象そのものによるのでなく、唯その考察方法の如何によるものであると見てゐるのである。是は思考は實在の形成原理（コンスティチュエスプリンチープ）であるといふカント認識論の成果を徹底させたものであらうが、それが爲に、ギンデルバントはノモテーティシュと、イディオグラーフィシュとを嚴格に區別し、リッカートは所謂「究極自然科學」といふ論理上の理想を立て、時間空間の中に於ける一切の現象を「分量の總體」（リッカ

ート、「グレン・ツェン」一〇七頁)にしてしまうのが、自然科學の理想であるとする。勿論物理學の今日の狀態は、この理想から見れば甚だ不完全なものであるが、又恐らく永久にさうであらねばならぬものかも知れぬが、しかし科學の畢竟期する所は、その不完全を出來るだけ制限するにあらねばならぬ。而して吾等が所謂「究極自然科學」を建設すべく努力する所にあらねばならぬ(「グレンツェン」一〇八頁)。それは自然科學であるが、之に反して歴史學は、個性の眞相を闡明するを以てその目的としてゐるものである。こんな風に、研究の對象といふ内容を全く除外して、專ら考察方法の差異といふ形式の方面から科學の分類を試みてゐる處にカント學風が發揮されてゐる。しかし、直觀及び思考の先天形式が、如何にして後天的の内容と交渉し得るかといふことが形式と内容とを峻別して考察したカントの第一批判書の難點であり、實踐理性の定言命令が、如何にして可感界の經驗的意思に效驗あらしめることを得るかといふことの説明はその第二批判書の暗所である。自然科學も新しく發見せられたる經驗的内容に逢著して、それに打ち勝つべく新しい方法を考察して進んで來たのである。現在ラヂウムの新發見は、科學の趨勢に



甚大の影響を與へてゐるではないか。若し又全然内容から離れた形式のみで科學の區別が出來るものならば、人間に關する諸の自然科學も可能な譯にならざるを得ない。この人間の自然科學の可能は勿論認容し得るが、それと同時に、無機物の歴史乃至生物の歴史といふ科學も可能になつて來なければならぬ。それも、歴史といふ概念の如何によつては、認容されないことではない。英語の natural history といふ時のヒストリーは、蓋、拉丁語の historia、希臘語の ἱστορία から派生せられたもので、而して辭書によれば、此等の語は「學」「誌」といふ義なれば、漢字の史は誌なりといふ程の意味であらう。この意味からすれば、單に記述の知識ばかりとしても鑛物の歴史、動・植物の歴史があつて可然譯であらう。併しながら、その意味の歴史は、無論リッカートなどの考へてゐる歴史といふものではない。それは純然たる自然科學である。されば、内容を離れて全然形式ばかりから自然科學と歴史とを區別しようとするヰンデルバント、リッカート等の思想には、まだ考へ殘された或るものがあるやうに思ふ。

又彼等は、法則認識は、因果的統一の認識であり、事象認識(エルアイグニッスエルケントニッス)は價値的、從つて、規

範的統一の認識であり、全然その性質を異にしてゐるものであると說いてゐる。是は如何にも認容され得る思想なのであるが、しかし價値的規範的統一の認識のみが唯一の歷史科學であると局限してしまうのは聊か偏見ではあるまいか。規範的價値的事象を因果的に統一する認識も可能であり、又それが少くとも歷史學といふ概念の一部を形成してゐるものではあるまいか。(此點今少し詳しく論じなければならぬのであるが、起稿の際急いだ爲に脫してしまつた。斷つておく。)

## 八

そこで余は法則認識も、歷史學の概念に對して必ずしも不可能なものでないと考へたいのであるが、しかし同じく法則認識であつても、自然科學の法則認識と、歷史のそれとは少しく性質を異にしてゐる。人間は有意的生類である。意思の活動は必ず目的の存在を豫想し、目的の存在は價値の存在を豫想してゐる。されば社會乃至民族の事象も、目的と價値とを有つてゐる。歷史はそれを無視することは出來ない。その目的に歸向するやうに、歷史的事實を目的＝手段的に、(Zweck＝



mittel)(假に之を目的論的(テレオロギッシュ)といへば)目的論的に排列するのが歷史ではあるまいか。而して目的手段的に排列するといふのは、一方からいへば因果的に排列することである。即ちそこに目的、又は價値の存在を豫想した法則認識が成立するのである。然るにその目的は、自分のものならば直接之を意識してゐるものであるから、自分に知れてゐるのは勿論であるが、他人のそれは、直接にそれを知ることは出來ない。唯彼の態度・容姿・擧動言語等を通じて、間接にそれを知るのみである。而してその他人の態度・容姿・擧動・言語等を精確に知覺すればする程、その目的を愈〻精確に察知することが出來る。而して次に、逆にその察知せる目的からして、彼の態度・容姿・擧動・言語等を說明することが出來る。それと同じやうに、民族、又は人類の諸變動、諸事象の中にも、目的・價値は存在してゐるが、直接に之を知ることは出來ない。そこで歷史家は先づその諸變動・諸事象を覺知しなければならぬ。而も出來る限り精確に覺知しなければならぬ。史料の廣索、嚴檢の肝要な點は、こゝに存するのである。それによつて民族又は人類の目的を察知し、その目的に歸向するやうに、目的手段的に史料を排列するのである。そこに所謂目的的法則認識は成立する。

是自然科學の法則認識と、歴史のそれとの異る所ではあるまいか。

通例、科學は說明するといはれてゐる。(タムソンは、科學は說明するものにあらずといふてゐる。しかしそは單に、說明といふ語の上の爭ひに過ぎない。「科學概論」四一——四二頁參照)。科學で說明といふのは、個々の經驗的事實を法則に還元するといふことである。而して法則といふのは、殊に生起的法則といふのは、唯或る一群の事象の後に、常に或る一群の事象が現はれるといふただけでは、生起的法則にならない。ジンメルがいつたやうに、一萬人の一ケ年の死亡者中に、幾人かの自殺者があるといふただけでは法則にならぬ(ジンメル「歴史哲學の問題」第二版一〇四頁)。法則といふからには、先現の一群の事象は原因で、後現の一群の事象は結果であるといふ關係が、兩者の間になければならぬ。それ故に、說明といふは個々の經驗的事實を法則に還元することなりといふのは、その經驗的事實を一つの結果としてその原因を持ち來すといふことである。然らば歴史的法則認識に於いて說明するとは如何なることであるか。所謂個々の歴史的事實を、ある目的を實現するのに必要な手段であるとして示すことである。勿論その目的には、凡そ人類



一般に通じた究竟の目的といふこともあらう、一國民の究竟目的といふこともあらう、又一般人類及び一國民の一時的の目的といふこともあらう。いづれにしても、その目的は、その史料を覺知したものには、如何にもと點頭かれる目的であらねばならぬ。故に宜く書かれたる歴史とは、讀んで行く中に、或る何物かが次第に明白になつて行くやうに史實を排列されたものをいふと思ふ。此の際には、勿論目的設立(クセプフウング)は、意思そのものの本質であることを豫想してゐるものである。

## 九

歴史的法則認識は右の如きものであるが、次にマルクスの唯物史觀の歴史法について考察するに、マルクスの豫想せる歴史法なるものは、その性質を全然自然法と同じくしてゐるものであることは、前編の叙述に明かである。けれども、歴史法の法則認識は、自然法のそれとは認識の性質上異らねばならぬのは、前節に論じた通りである。そこでマルクスも、研究を進めて行くうちに、自然前後矛盾したことを說くやうになつたのである。「吾人は爰に、眞に人間にのみ屬する形に於いての

勞働を考察する。例へば、蜘蛛は織工のそれに似た仕事をなし、蜂は蜜房の建設をやつて、多くの人間の大工を恥ぢ入らしめる。しかも、最も拙劣な大工でも、最も巧妙な蜂と異う點がある。それは大工は、その蜜房を建てるならば、實際それを建てる先に、豫め彼の頭の中にそれを建てゝしまうことである。即ち勞働過程(アルバイツプロツセス)の終に現はれ來る結果は、その始に既に勞働者の表象中にあつたものである。即ち觀念的にあつたものである。勞働者は、啻に自然物の形を變ずるやうに作用するばかりでなく、同時にその自然物の中に、彼の豫め意識してゐた目的を實現するのである。その目的が、彼の作業の種類と方法とを決定し、彼の意思を服せしめる所のものである」(「資本論」第一卷一四〇頁)。又曰く「勞働過程は簡單に抽象的に要點をいへば使用價値を產出せんとする合目的的活動である。人間の需用に適うやうに、自然的のものを我が物とすることである。人間と自然との間に於ける物質交換の一般的條件である。人間的生活の永久の自然的條件である。從つてその生活の如何なる形からも獨立に、むしろ一切の社會的形式に共通なる自然的條件である」(「資本論」第一卷一四六頁)。かくマルクスは、他の方面に於いては、歷史法を自然



法と全然同樣のものゝやうに說きながら、爰では人間的といふ概念の緊要素として、目的の概念を取り入れて、自然法と異るやうに論じてゐるのである。是は確にマルクスの自家撞著であるが、マルクスが此の自家撞著をやつても目的をいつた處に、どうしても歷史の考察には、目的の概念を逸することの出來ぬことが表はれてゐる。

爰に再び轉つて、說明といふ事について論ぜざるを得ない。前に說明とは、個々の經驗的事實を法則に還元すること、換言すれば、因果の關係に置くことであると說いて置いた。しかし猶それについて考へねばならぬ。たとひそれを因果の關係に置いたとしても、それで決して徹底的の說明といふことは出來ぬ。まだそこに殘された大なるものがある。例へば彈丸が墜落するといふ事實を引力の法則に還元すれば、一先づ墜落の說明はつくが、更にその物體は互に $\frac{MM'}{R^2}$ の力で牽引するといふ場合、それは如何にして相牽引するかといふ大問題が殘されてゐる。又 $H_2$ と O とが相化合して水を生ずるといふのは、化合の法則であるが、しかしそれは如何にして化合するかといふ大問題が殘されてゐる。電子論者は、之を電子の作

用で說明しようと企てゝゐるが、然し、その電子論者の努力が成功した曉に於いても猶問題は殘るのである。卽ち如何にして或る狀態にある電子は、互に相抱合するかといふ問題が殘るのである。斯樣に、何處までも推し究めて行くと、そこに、生起的法則の認識とは異つた別種の認識が必要になつて來るやうに思ふ。卽ち物體をして互に相牽引させたり、元素をして互に相化合させたりする原本的のもの、或は之を原本力といへば、その原本力の認識が必要になつて來る。それは生起の認識ではない、生起させるものの認識である。生起的法則の認識は、その原本力の何であるに拘らず、或る事件と、他の事件とが因果的關係を爲してゐるといふ認識である。その場合には原本力の認識のない因果的關係は、實は眞の因果的關係でなく、單に豫備的(プレリミナリー)のものに過ぎぬ。原本力の認識が十分であつて、始めて眞の因果的關係をいふことが出來る。その原本力の認識を、ホリッチャーに循つて、力認識と名づければ(ホリッチャー「歷史的法則」一頁)、その力認識が十分であつて、始めて個々の經驗的事實が十分に說明せられるやうになるのである。

現在の如何なる科學も、此の點に於いて未だ甚だ不完全なるものである。ヘーゲルの哲學に於いては、此の二者が完備されてゐる。正・反・合の三剖法は生起法則で、理(ロゴス)はその力である。(ロゴスを力と觀るのは不都合のやうであるが、ヘーゲルの哲學體系に於いては、さう觀るのがむしろコンシステントではあるまいか。つまりロゴスを、ショーペンハワーの意思の樣に力と解するのである。しかし此の點は余自らも不安心に思はれる。)從つてヘーゲルは、人間の歷史をも宇宙進化の一階段と觀て、右の二法則を當て嵌めたのである。故にヘーゲルの歷史哲學は、ギンデルバントの謂ふ所の經驗科學ではない。然るにマルクスの唯物史觀は、ヘーゲル哲學の型をそのまゝに當て嵌めたものである。唯心的辯證的哲學を、唯物的辯證的哲學としたまでである。マルクスに於いては、生起法則はヘーゲルに於けるやうに三剖法である。唯、原本力が、ヘーゲルに於いては理であつて、マルクスに於いては物質である。それゆゑマルクスの唯物史觀は、ヘーゲルの歷史哲學の受けた難點の大部分を引き受けねばならぬのである。加之、之を唯物的にした爲に、それ自らで大なる自家撞著をすることになつたのである。ヘーゲルの正・反・合の辯證法は、此の哲學が唯心的であればこそいへるのである。物質そのものに、如何にし

て正・反・合の論理上の方式があり得よう。マルクスが唯物論を取りながら、三割法を取り入れたのは、自家撞著の甚しいもので、甚だ不用意で又甚だ沒批判的であるといはねばならぬ。斯かる破綻は、氏の著述の諸所に著はれてゐる。即ち氏は唯物論を取るといひながら、生產方法の變化は技術の進歩の爲に起り、技術の進歩は學問の發達に基くといふことを諸所に說いてゐる。即ち物質の外に精神の存在を認め、それが社會進化に大影響を與へてゐることを許してゐる。彼はサン・シモンの二元論を非難しながら、彼自らその陷穽に落ちてゐるのである。

## 一〇

吾等の感官知覺を超越した、即ち經驗を超越した、最終の世界の實在は、精神か物質か、將た非心非物か、認識の對象としては何とも斷言することは出來ぬのである。故に單に認識の方面からいへば、唯物論も、唯心論と同樣の權利を以て、その成立を主張し得るものであつて何等不都合なことはない。唯物論の成立が不都合ならば、唯心論のそれも不都合である。たゞ何となく大らかに、唯物論よりも唯心論の



方が尤もらしく思はれるのは、認識論上の根據が比較的確實であるといふ爲でなく、他の動機、殊に感情などを多分に含んだ道德的要求などに基く所が多いと見るのが穩當ではなからうか。（ヴントは、觀念論は世界觀で實踐上の要求を含み、唯物論は世界說明なりといつてゐる。ヴント「哲學概論」參照）。しかし專ら認識の側からいへば、唯物論も、唯心論と同じやうに、その成立を主張することが出來る。それゆゑマルクスが唯物論を基礎として彼の體系を立てたといふことは、認識論上からは、ヘーゲルの唯心論と同樣に、必ずしも不可なりといへぬのであるが、しかしそれを以てヘーゲルの型に倣つて歷史を說いた所の唯物史觀は、前に述べたやうな非難を受けねばならぬこととなつたのである。若しギンデルバント等のいふやうに、歷史學を經驗科學と觀れば、その所謂歷史の經濟的解釋も必ずしも之を純理哲學上の唯物論まで持つて行かねばならぬ必要はなく、それだけで存在し得るのである。而もそは歷史科學の進歩に何等かの貢獻をすることになるのである。前に述べたやうに、只認識は自然科學に於いても今日の處甚だ不完全、不十分なものである。獨り歷史科學に於いてのみ急いで徹底させるに及ばぬ。かうした考

は、既に新マルクス派の人々の思想中に表はれてゐる。ベルンシュタインの「社會主義の豫想」中にもヴルフガング・ハイネの論文の中にも、カール・カウツキーの論文中にもそれが見えてゐる。又セリグマンは、唯物史觀をバックルの說などのやうに單に環界說の一種、詳しくいへば社會的環界說の如きものと見てゐる。かやうに經驗的事實の基礎の上に局限されて始めて唯物史觀は、一つの歷史法の法則認識として成立し得るものとなるであらう。

（猶、シュタムラーの方法論又その他の倫理論等よりして唯物史觀を論じて見たいと思ふが、今はその遑がない。依つて之を省略することにした。）

（大正四・五・一四稿畢）

――「日本社會學院年報」第二年第五册所載――



# 三　唯物史觀と歷史法

## 一

唯物史觀とは、歷史の基本的原動力は人間の經濟活動なりと觀る所の一種の歷史觀である。此の歷史觀は可なり夙くから學者の間に抱懷されてゐた見解なので、溯れば第十八世紀のヘルダー(一)モンテスキュー(二)などに至り、更に溯ればヴィコ(三)などにも達する事が出來る。斯やうに此の見解そのものが發達の長い歷史を有つてゐるのであるが、しかし此の見解を、よし系統的若しくは體系的とはいへぬにしても、最も根本的に且つ徹底的に論述したものは、カール・マルクスであることは否み難い。從つて今日では唯物史觀といへばマルクスの歷史觀で、マルクスの歷史觀といへば唯物史觀であるといふ樣に、兩者は殆んど同一視せられてゐる狀況である。然し斯程までに言ふのは言ひ過ぎであつて、唯物史觀とマルクスの歷

史觀とは全然同一のものであるとはいへぬ。しかしながら縱令同一ではないにしても、マルクスの歴史觀は唯物史觀の恰好な代表的見解の一つであることはどうしても否み難い事實である。さて私が爰に「唯物史觀と歴史法」なる題目を掲げて研究せんとするのは、そのマルクスの歴史觀の全部を叙述し、且つ之を批判せんとするのではない。それ等の仕事は幾多の先哲が既にそれをやつてゐるし、又私自身もやつたことがあるので(一)、今それを再びしようとは思はない。爰では私の前論の補遺として、前論に書き漏した點だけを論述しようと思ふのである。

一　Johan Gottfried Herder (1744—1803), Abhandlungen über den Ursprung der Sprache, 1772; Ideen zu einer Philosophie der Geschichte der Menschheit, 1774.

二　Montesquieu (1689—1775), Esprit des Lois, 1748.

三　Giovanni Battista Vico (1688—1744), Principii di una scienza nuova d'intorno alla commune natura delle nazioni, 1744 (deutsch. Uebersetz. von Weber, 1822.)

四　これについて書いたものが澤山ある。その中で Paul Barth, Philosophie der Geschichte als Soziologie, 1897. Ludwig Woltmann, Der historische Materialismus, 1900. などは簡單なもので見通しをつけるには良い書である。拙著は

「日本社會學院年報」第一卷第三分冊所載「唯物史觀の解剖と其素成分」
同上第二年第五分冊所載「唯物史觀の要訣及びそれについての考察」の二編である。
今回の論文は此の二編（本書前掲二論文）の補遺である。

## 二

唯物史觀に關する問題は、種々なる形式で之を提供することが出來るが、私が今本論において考察せんとする眼目に從ひ、私は次の形式で提供する。(一)唯物史觀は歴史的法則（歴史法）を肯定する歴史の定理（テオリー）なりや。(二)その歴史法は如何なる性質の法則なるか。(三)歴史法は可能なりや。此の三問題である。

以上三問のうち、第二問、第三問は、粗末ながら私は前に之を論じたことがあるから(一)、本論に於いては之に關する論究は比較的省略して簡單にし、第一問は未だ十分論じて見ない點であるから、比較的詳密に研究して見たいと思ふ。

唯物史觀は歴史法を肯定する所の歴史の定理なりや。此の問題に對してマルクスは然否兩樣の答を與へてゐる。それで氏の眞意は果して那邊にあつたか、いづれとも確實には斷定が出來ぬ。先づその然りといふ方から見よう。

凡そ法則には規範を立てる所の規範的法則(ノルマティーヴェスゲゼツツ)と、事實の生滅・變化・關係等を立言する生起的法則(ゲネエーエンスゲゼツツ)との二種類のあることは、認識論に於いて一般に認めらるゝ所である。規範的法則といふのは倫理法・美理法・論理法の如きものを指し、生起的法則とは、引力法・化合法・聯想法の如きを言ふのであつて廣義の自然法(ナツウーアゲゼツツ)のことである。生起的法則はその對象の如何によつて、精神法と狹義の自然法とに分けられる。すべて精神作用に關した生起的法則は精神法であつて、物質作用に關したそれは狹義の自然法である。而して生起的法則の論理的性質は、すべての生滅・變化・關係を原因と結果との二つの觀念の結合に包括する所に存する。それ故生起的法則は之を因果的法則と異語同義なりと觀ることが出來る。

次に唯物論といふのは、實在するものは物質(マテリエ)と力とのみであつて、物質界の現象は勿論、所謂精神界のそれも、すべてその變容(モデイフイカチオーネン)であつて、物質以外に別に精神と稱するものなく、精神は實在にあらずと觀る所の世界觀を指すのである。此の世界觀からすれば、法則はすべて生起的法則卽ち因果的法則であつて、此の法則以外に規範的法則なるものは存在しないのである。從つて唯物論的世界觀は、同時に因果的世界觀、又は機械的世界觀となるのである。だからすべての因果的又は機械的世界觀は唯物論的世界觀ではないけれども、すべての唯物論的世界觀は因果的世界觀である。

マルクスはヘーゲル哲學の影響を受くること多く、正しくその學徒の一人と見ることの出來る人で、而もその左黨の一人に數ふべき人である。卽ち唯物論的世界觀を取つた一人である。彼の唯物論は彼の著述中隨所に散見してゐるが、殊に屢引用せられる「神聖家族」(一八四五年)の序文にある「獨逸に於ける眞の人本主義は唯心論若しくは思辨的觀念論ほど恐しい敵を有たぬ。唯心論若しくは思辨的觀念論は現實存在する個人の代りに『自意識』又は『靈魂』なるものを以て現實存在なりとなし、而して福音書の著者と共に生命の原をなすものは靈であつて、肉は則ち之に與らずなどゝ說く所の說である」(二) といふ處や、又「經濟學批判」(一八五九年)の序文中にある「人間の在(ザイン)を決定するものはその意識でなく、却つてその反對に人間の意識を決定するものはその社會に於ける在である」(三) といふ處から、最も直接に容易に窺ふことが出來るのである。

斯くの如くマルクスは唯物論の立場に立つて、物質と力との外には何等の實在を認めぬのであるから、人間社會の出來事も、やはりその物質と力との變容に外ならぬと觀るのである。而してマルクスからいへば人間社會に於ける物質と力との變容は、それがやがて經濟現象である。だから人間社會の一切の現象は皆經濟現象であつて、經濟現象ならぬ樣に見ゆる所の現象、例へば政治・法律・學術・宗教等の現象はすべて經濟現象の變容に過ぎぬ。換言すれば經濟活動は實在する唯一の活動であつて、その活動が現はれて政治・法律・學術・宗教等の現象となるのである。

既に人間社會に於ける物質と力との變容を經濟現象と觀た以上は、その物質や力を、たゞ單に物質或は力といはず、之を經濟學上の術語で言ひ表はすのは至當の處置である。そこでマルクスは物質をば「生産用具」(Produktionsmittel)(四) 又は「勞働の對象」(Arbeitsgegenstand) と名づけ、力をば「生産力」(Produktionskraft) 又は「勞働力」(Arbeitskraft) と名づけた。即ち社會上に表はれた一切の現象は、皆その生産用具と生産力との變容であると認めたのである。「生産關係の全體は、やがて社會の經濟的組織を構成するもので、それが法律や政治の上層建築の眞の基礎となり、社會の精神的狀態の如きは、それに相應して起るものである。

物質的生活の生産方法は、社會的・政治的・精神的生活過程を規定する。それで人間の在を決定するものは人間の意識でなく、却つてその反對に人間の意識を決定するものはその社會的存在である」(五)。

唯物論に於ける物質と力とは、自然必然的 (Naturnotwendig) に又は因果必然的 (Kausalnotwendig) にその變容をなすものであるが、マルクスの生産用具と生産力も亦同樣である。物質界に於いては、物質の位置及び狀態の變化、若しくは化學的作用等によつて、因果必然的に或は潛勢が顯勢になつたり、或は顯勢が潛勢になつたりして、物質現象が現ぜられる。マルクスの社會觀に於いては、生産力がその當時の生産方法 (Produktionsweise) に對する關係から、因果必然的に經濟活動が起り、それが基礎となつて他の一切の文化的生活が現はれるといふのである。だからマルクスからいへば、社會生活の進動はすべて自然必然的若しくは因果必然的のものであつて、人間の自由意思からは全然獨立したものである。故にマルクスはいふ、「人間は、彼等の生活の社會的生産は、彼等の意思から獨立した所の、一定の必然的關係、換言すれば彼等の生産力の一定の發達段階に相應する所の生産關係であることを認める(中略)。ある一定の發達段階に至ると、社

會の物質的生産力は現存してゐる生産關係、之を法律上の言ひ表はし方でいへば財産關係――從來その生産力がその下に運動してゐた所の財産關係と矛盾するやうになる。生産力の發展形態から生産關係はその桎梏に轉化する。そこに社會的革命なるものが起るのである。此の經濟的基礎の變化と共に、社會の他の一切の上層建築は徐々にか、或は急に顚覆してしまう」(六)。そこで新たに發達した生産力と平衡を得た新たな生産關係、卽ち財産關係が現はれ、從つて又新たな法律・政治・宗教・藝術等の文化が出來て、そこで一旦平靜な社會が再建せられる。然しその中に、生産力は又更に發達して、再建された財産關係と又々矛盾するやうになる。そこで又革命が起きる。かくて社會生活の進動は、一切の生産力が發達しきるまで、自然必然的に發現して已むものではない。だから「たとひある一つの社會がその進行の自然法を追求し得ても、とてもその自然に遵つてゐる發達段階を飛び越すことも出來ず、又取り去ることも出來ぬ」(七)。

自然的必然は、以上に述べたやうに之を物理學的に言ひ表はす事も出來るが、その外に亦生理學的にも言ひ表はすことも出來る。卽ち生物はその簡單なものから複雜なものに進化するが、その進化の過程はすべて自然必然的であるといへる。所謂生物進化論とはその自然的必然の過程の定理を指していふのである。ダーキンの生物進化論によつて啓發されたマルクスは、その「資本論」に於いても、多く生物の進化と並行論的に社會進化の自然必然的過程を說いてゐる處が甚だ多い(八)。是は一八五九年以前の著述には殆んど見えない所の說明で、その以後の「資本論」に顯著である。

斯くの如く社會は自然必然的若しくは因果必然的に進動するものなるが故に、社會の現狀が如何であるかを悉知すれば、將に來なければならぬ社會は如何なるものであるかを豫斷する事が出來る。マルクスに從へば現代は第三級國卽ちブルジョアの社會で、それは資本主義的生産方法の經濟的關係に基いてゐる社會である。然るに此の生産方法は今日の程度に發達した所の勞働力又は生産力に相應しない。だからその生産力又は勞働力は、自然必然的に今日の生産關係卽ち財産關係――詳しくいへば私有財産關係を破つて、自分に相當する新たな生産關係を顯現せずには置かぬ。その新たな生産關係とは、マルクスは之を共産制の關係で

あると觀てゐる。之がゾンバルトが「マルクス主義の破滅論(Zusammenbruchstheorie)」といつた點である(九)。

斯やうにマルクスは唯物論の哲學に立脚して、その見地から社會を觀、社會の進動を生產用具と生產力との因果必然的活動の必然的結果と觀、而もそれは社會の進動を促す所のすべてで、且つ唯一つの原因であつて、その外には社會を進動せしめる原因なしといふやうに見てゐるのであるから、此の點からいへば、マルクスの唯物史觀は歷史法を肯定する歷史の定理であると斷ずることが出來る。

一 「日本社會學院年報」第二年第五冊所載拙稿「唯物史觀の要訣及びそれについての考察」。

二 Mehring, Geschichte der deutschen Sozialdemokratie, Bd. I, S. 193 拔萃より。

三 Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie, Stuttgart, 1879, S. XI. この思想は此等の外に猶マルクスの諸書中に散見してゐる。

四 この譯語については第一項引用拙稿(本書三二頁)を參照せられよ。

五 Zur K. d. p. O. S. XI.

六 同上。

七 Marx, Das Kapital, Hamburg, 1890, Bd. I. S. VIII.

八 「日本社會學院年報」第一年第三冊所載拙稿「唯物史觀の解剖と其素成分參照」

九 Sombart, Sozialismus und soziale Bewegung, 5. Aufl. S. 89.

## 三

前第二節は、マルクスは唯物史觀を以て自然必然的若しくは因果必然的の歷史法を肯定する所の歷史の定理であると觀てゐるものであることを、氏の著述中から立證したのであるが、しかし同じ著述中からそれと反對のことをも證據立てることも出來る。本第三節は專らそのことを明にするものである。

唯物論哲學からいへば、實在するものはすべて物質であつて、その外に實在するものはない筈である。而してその物質と力とから生ずる現象は、皆機械的に生起するもので、目的の豫想を許さない盲目的現象である筈である。然るにマルクスは一方には以上の推論を是定してゐながら他方にはそれを否定する反對のことをもいつてゐる。例へば、蜘蛛は織工のそれに似た仕事をなし、蜂は蜜房の建設をやつて、多くの人間の大工を恥ぢ入らしめる。しかし最も拙劣な大工でも、最も巧妙な蜂と異ふ點がある。それは大工は蜜房を造らうとするならば、實際それを造

る先に、豫め彼の頭の中にそれを造つてしまうことである。即ち勞働過程の終に現はれて來る結果は、その始に既に勞働者の表象中にあつたものである。換言すれば觀念的にあつたものである。勞働者は啻に自然物の形を變ずるやうに作用するばかりでなく、同時にその自然物中に彼の豫め意識してゐた目的を實現するのである。その目的が彼の作業の種類と方法とを決定し、彼の意思を服せしむる所のものである」(一)といへるが如き、「勞働過程は使用價値を產出せんとする合目的活動である。人間の需用に適ふやうに自然的のものを我がものにせんとの過程である。人間と自然との間の物質交換に對する一般的條件である」(二)といへるが如きそれである。

唯物論的社會觀からいへば、盲目的であるべき筈の經濟活動が有目的になり、機械的であるべき筈のものが合目的となつたのである。然るに「目的」といふ概念は、意思の存在を豫想してのみ意義のあるもので、意思なしには存在することの出來ぬ概念である。それ故にその人間の目的又は需用に適ふやうに自然物に作用するのが勞働過程であるならば、そしてその勞働過程がやがて經濟活動であるならば、經濟活動は始めから人間意思の存在を豫想してゐたもので、その意思が始めから存在してゐなかつたならば、決して人間社會に經濟活動なるものが起つて來るべき筈がないのである。だからマルクスは一面に於いて唯物論的社會觀を否定してゐると斷ずることが出來る。

又自然的必然、若しくは因果的必然は、一定の原因があれば必ず一定の結果あり、一定の結果があれば必ず一定の原因があつて、兩者の關係は全く必然的のもので、その間の連續は切らうとしても、どうしても切る事の出來ぬものである。人間の意思の如きは勿論、神の意思といへども此の關係を變ずることの出來ぬ金剛法である。それ故に若し自然的必然、若しくは因果的必然と稱するものにして、少したりとも人間の意思で之を變ずることが出來たとしたならば、それは眞の自然的必然、因果的必然ではない。然らばマルクスの唯物史觀はどういふものであるか。氏は一方に於いては資本の集積、資本主義の生產方法及びその生產方法の破滅は、因果の金剛法に循つて自然必然的に消長するもので、人間の意思で如何ともすることの出來ぬものなりと說いて居ることは前節に述べた通りであるが、他方に於

いてはその自然必然的の必至の勢も、人間の意思で變ずることの出來るやうに說いてゐる。それはマルクスが露西亞の一雜誌記者に寄せた書簡の中に明である(三)。「もし露西亞が一八六一年までやつて來た徑路をそのまゝ進めて行くならば、歷史が資本主義的秩序のあらゆる艱難を免れしめんがために、ある國民に與へた最も光榮ある機會も、全く空しくなつてしまうであらう云々」と。自然的必然の金剛法はすべて必至のものであつて、「もしならば」といふことは許されない。「もしならば」は人間の意思を豫想して、人間の意思でその過程の變化進止の出來ることを豫想してゐるものである。しかし所謂自然法の方にも、「もしならば」の入り得る餘地があるやうに見えることもある。例へばもし眞空中で墜したならば、羽毛と鐵片とは同時に墜つるであらうといふが如きはその一つである。しかし此の場合の「もしならば」は、自然法そのものに加へられたのでなく、實驗をする人間の意思に加へられたものである。自然法そのものは羽毛と鐵片と同時に眞空中で墜されたとすると同じ速度で落下するといふことで、その間に何等「もしならば」を入れ得る餘地はないのである。

而もマルクスはその書簡中に於いて彼の「資本論」は必ずしも一般の自然必然的歷史法を述べたものでないことを明に說いて、さやうに「資本論」を解するものは、未だ自分の眞の意味を理解してゐないもので、著者に取つてはむしろ迷惑であるとの意をほのめかしてゐる(四)。

以上マルクスが經濟活動に合目的性のあること、資本の發達及びその破滅は自然必然的のものにあらざることの二ケ條を認容したといふ點から、彼は自然必然的若しくは因果必然的の歷史法を是認してゐるものでないと推斷することが出來る。

一　Das Kapital, Bd. I, S. 149.

二　Das Kapital, Bd. I, S. 146.

三　露西亞の „Otetscheswennija Sapiski" と稱する雜誌の記者に宛て、マルクスの「資本論」を批評したMichailowskiに關して書いた書簡(一八七七)で、始めProf. Kablukow, "Ueber die Bedingungen der Entwicklung der russischen Landwirtschaft", 1899 中に收められたものである。私はS. A. Altschul, Die logische Struktur des historischen Materialismus, in Archiv f. Sozialw. u. Sozialp. Bd. XXXVII, Heft, I.1913, Juli に拔萃されたものから引用したのである。

„Wenn Russland denselben Weg fortsetzen wird, den es bis 1861 gegangen ist, so wird es die glänzendste Gelegenheit, die jemals die Geschichte einem Volke bot, um alle Qualen der kapitalistischen Ordnung zu entgehen, vereiteln".

„Wenn Russland bestrebt ist, eine kapitalistische Nation nach dem Vorbilde westeuropäischer Nationen zu werden, ……so wird es dies nicht erreichen, ohne zunächst einen guten Teil ihrer Bauern in Proletarier zu verwandeln. Hat es aber einmal den Weg der kapitalistischen Entwicklung beschritten, so gerät es unter die Herrschaft ihrer eherner Gesetz……

Das ist alles! Dies genügt aber nicht meinen Kritiker. Er will unbedingt meine Skizze über die Entstehung des Kapitalismus in Westeuropa in eine geschichtsphilosophische Theorie des allgemeinen Entwicklungsganges verwandeln, in eine Theorie, der sich in fataler Weise alle Völker unterordnen müssen, wie verschieden die historischen Verhältnisse auch sein mögen, unter welchen sie leben, um letzten Endes zu einer Wirtschaftsordnung zu gelangen, welche die grösste Freiheit in der Entfaltung der Produktivität der gesellschaftlichen Arbeit und allseitige Entwicklung des Menschen sichert. Ich bitte um Entschuldigung! Dies hiesse mir viel Ehre und zugleich aber auch viel Unehre machen."

## 四

マルクスの唯物史觀の思想中に含まれてゐる此の矛盾は如何に之を解釋すべきであるか。次に此の問題に移つて考察して見たい。

さてその考察になると是は種々に解釋される。第一には前掲の書簡中にも見えてゐる如く、マルクスは始めから歴史哲學の考察をやつたものではなく、又猶更經濟を以て歴史の進動の唯一の原動力と觀る歴史法を立てようとしたのでもない。歴史の大部分は經濟活動の自然的過程を以て説明することも出來るが、しかしその外にも歴史の過程を進めるものがあることを承認してゐて、時が經ち研究が進むに從つてその思想が益强くなつて、經濟活動の歴史を動かす力が愈制約されるやうになつたのである。かういふ風にも解釋出來る。ベルンシュタインなどの觀方はこんな風である(1)。かやうに解釋する結果はマルクスやエンゲルスは自らでも確定的の眞理であると信じてゐなかつたものを、ある目的の爲にさも眞理であるやうに述べたといふことになる。殊に「共産黨宣言」や、「家族・私有財産・國家の起源」(Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staates, F.Engels)の如きは彼等の一時の迷想を理論の形で言ひ表はしたに過ぎぬもので、學術上の價値は甚だ少いものにならざるを得ない。要するに此の觀方からすればマルクスやエンゲルスは所謂社會煽動家であつて、その目的の爲に多少の理論を研究したけれ

ども、その學術的良心は甚だ疑はしいものであるといふことになるのである。

第二の解釋は彼等の學術的良心は確かであつて純粹に眞理の探究をやつたのであるが、しかし經濟活動そのものゝ本質が、彼等の考へたやうに自然必然的に解釋され得るものではない、それには本來的に合目的性が含蓄されてゐるものである。それだから彼等が學術的良心を以て自然必然的に歴史法を解釋しようと努めつゝある間に、この合目的性のことが論じられたものだらうといふ解釋である。シュタムラーなどの解釋はこれに近く又シュトルツマンなどのもこれと觀ることが出來る(二)。

第三には「歴史の哲學」(Philosophy of History)と「歴史についてのある哲學的考察」(Philosophizing about History)とを區別して解釋する觀方である。歴史の哲學といふのは、歴史そのものゝ本質を究明する學問で、是は分れて歴史知識學と歴史本體學との二つとなるのである。歴史學といふ知識の性質・可能・成立を論究するのは前者の職分で認識論の一科であり、歴史の實體を闡明するのは後者の職分で本體論の一部である。ギンデルバントやリッカートなどの研究(三)は前者の研究に屬するものであり、ヘーゲルのは(四)後者に屬するものである。之に反して「歴史についてのある哲學的考察」といふのは、歴史といふものが既に成立したものとして與へられ、その全部又は或る時代について、試に哲學的考察をなすといふのである。故にその哲學的考察は、事實の上にては歴史に加へられ得る唯一の哲學的考察であるかも知れぬが、しかしその考察をなす人は必ずしもそれを唯一の哲學的考察なりと考へもしない又從つて宣言もしない。その外にも猶他の哲學的考察のあり得ることを認容するのである。ロージャースやセリグマン(五)などの書名としてつかつてゐる「歴史の經濟的解釋」(Economic Interpretation of History)といふ語は最も適切にPhilosophizing about Historyの意義を表はしてゐる。即ち人間社會の出來事を經濟といふ方面から解釋して、その進動の合則性(ゲゼツメーシツヒカイト)を表はすといふのである。だからその解釋される部面は必ずしも人間社會の出來事の全部でなくとも宜い、例へばエロイテロプロスが、哲學の發達を經濟方面から解釋したやうに(六)一部面でもよければ、又サン・シモンが佛國革命時代を經濟方面から解釋したやうに、一時代でも宜い。又その經濟的解釋は一面の解釋であるが故に、それと並んで他の解釋

のあることを妨げぬ。例へば歴史は神が人類を教育する過程である(七)と觀る見方も、歴史は人類が道德的理想を實現する過程である(八)と觀る見方があつても、是等は必ずしも經濟的解釋と兩立することの出來ぬものではない。かういふのが「歴史についてのある哲學的考察」といふのである。

かやうに歴史に關する理論を「歴史の哲學」と「歴史についてのある哲學的考察」とに區別して、マルクス等の唯物史觀は「歴史の哲學」ではなく、「歴史についての或る哲學的考察」であると解釋してゐるのはクローチェである。(九)

以上述べた理由によつて、「歴史の哲學」は歴史の全體に亘つた全面觀であり、「歴史についての或る哲學的考察」は歴史の全體又は一部に亘つた半面觀である。從つて兩者の妥當となり得る又權威を有し得る範圍は全く異るのである。唯物史觀はPhilosophizing about Historyに過ぎぬものならば、その妥當であり權威である範圍は局限されてゐるものである。クローチェはかく局限されたりとて、それが爲に唯物史觀の價値は減ずるものでないと論じてゐる。「歴史の哲學」であれ、「歴史についてのある哲學的考察」であれ、彼等が共同に守らねばならぬ一つの約束がある。

それは歴史の理論は必ず目的論的であらねばならぬといふことである。唯物史觀が經濟活動を自然必然的若しくは因果必然的に觀たのは、彼等の大なる失敗である。たとひ經濟的に歴史を解釋するにしても、必ず目的論的であらねばならなかつたのである。故に「歴史法」といふ概念は、自然必然的に見たならば、それ自身成立することの出來ぬ自家撞着性を有つてゐる概念であるが、目的論的必然的に見れば成立し得る概念である。而して凡そ歴史といふものはその概念で編み成された人間社會の出來事の記錄ではあるまいか(一〇)。

一　Bernstein, Die Voraussetzungen des Sozialismus. Elftes Tausend, S. 4 ff.
二　Stammler, Wirtschaft und Recht; Stoizmann, Der Zweck in der Volkswirtschaft.
三　Windelbund, Geschichte und Naturwissenschaft in Preludien, 3. Aufl. 364 ff.; Rickert, Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung, 1902.
四　Hegel, Philosophie der Geschichte.
五　Thorold Rogers, Economic Interpretation of History, 1888; Seligmann, Economic Interpretation of History, 1903.
六　Eleutheropulos, Wirtschaft und Philosophie, 1900, 1901.
七　Lessing, Erziehung des Menschengeschlechts, 1781.
八　Green, Prolegomena to Ethics; Meyer, History as past Ethics.

九　Croce, Historical Materialism and Economics of Karl Marx, Engl. Transl.

10　猶、歴史學の認識論上の性質については、桑木教授著「歴史哲學の問題」、西田教授著「自然科學と歴史科學」(「思索と體驗」)、拙稿唯物史觀の要訣及びそれについての考察」(「日本社會學院年報」第二年第五册所載)及び拙稿「目的論の可能について」「哲學雜誌」所載)等を參照せられよ。

(大正五・三・五稿畢)

——「史林」第一卷第二號(大正五年四月所載——

# 四　マルクス主義國家觀の倫理的批判

## 一　國家と社會

國家を目的論的に考へて、國家は存在する方が宜いか、或は國家は存在しない方が宜いかと云ふ觀方から國家に關する觀方を分ければ、「國家肯定論」(Etatismus)「國家否認論」(Anarchismus)の此二つに分けることが出來るかと思ふ。ウキーンのケルゼン(H. Kelsen)は其の國家學(Allgemeine Staatslehre)の中でかやうに二つに分けて居るが私も之が適當の考へ方であると思ふ。其中で國家否認論は普通の無政府主義と社會主義との二つに分れるかと思ふが、本來のアナーキズムの方は嘗てはバクーニンの唱へた說の如き、又近頃に於いてはクロポトキンなどが主張して居る所の說がそれであり、是に對して社會主義の方は社會主義其ものに色々の種類があるから、それが總て國家否認論であると言はれないことは勿論であるけれども、中

に國家の存在を否認するものもあるのである。偖て斯くの如く二つに分けて、然らばマルクス主義は果してどう云ふものであるか、マルクス社會主義は果して國家の存在を肯定する說であるか否定する考であるかどうかといへば、之に就いては學者の觀る所必ずしも一つではないやうであるが、私はマルクス社會主義は國家の存在を否認する所の思想、卽ち廣義のアナーキズムに屬して居るものであると斷ずる者である。マルクス及びマルクス主義者も常に國家と云ふことを言ふ。斯くの如く國家と云ふことを言ふ時彼等も國家の存在を肯定して居るやうに見えるのである。併しながら彼等の言ふ所の國家と云ふのはそれは、常に階級國家、卽ちクラッセン・シュタートであつて、我々が觀念して居る尋常一樣の國家とは其意味を異にして居るものである。「我々プロレタリアは先づ以て政治的支配權を掌握しなければならない、其政治的支配權を利用して、以て次第にブルジョア階級から一切の資本を奪ひ取り、一切の生產用具を國家の手に收めて仕舞はなければならない、謂ふ所の國家とは支配階級として組織されたプロレタリアを言ふのである」といふマニフェストの文句でも解るやうに、彼等が國家と言ふ場合には常に階



級國家を指して居るのである。謂ふ所の階級國家とは如何なるものであるかと云ふことに就いては、第二節に於いて其意味を明かにしたいと思ふ。

偖て國家と云ふものを認めたとして、其國家と社會との關係に就き、どう云ふ觀方があり得るかと言へば、國家と社會とは全く同じものであると觀る所の同一觀と、國家と社會とは全く相異れるものであると觀る異別觀と此二つがある。さうして此二つのみが存在し得る譯である。國家と社會とは全く同一なものである、從つて國家がありさへすれば社會は必要でない、國家は我々人間が共同生存をする總ての、さうして唯一の形である、と云ふことを主張するのが同一觀であり、此同一觀の近時の代表者は英吉利のボザンケ(Bosanquet, Philosophical Theory of State)などの如き人であらうと思ふ。國家と社會とは相異るものであると云ふ異別觀は二種に小別され得る。その第一種類は排他的の異別を唱へる所の考へ方であつて、國家と社會とは全く別々なものであつて國家があればそこに社會はない、社會があればそこに國家はない、互々に排他的のものであると觀る觀方である。第二の異別觀は國家と社會とは異れるものではあるけれども、併し兩者相竝んで存在する

ことが出來るものであると觀る所の相容的異別觀である。マルクス社會主義は以上同一觀と異別觀との兩者の中のどちらの見解を取つて居るものであるかと言へば、異別觀を取つて居るものであり、其異別觀の中でも第一種類の排他的異別觀を取つて居るものであると私は考へる。其然る所以も亦第二節に於いて明かにしようと思ふ。

次にウキインのマックス・アドラー(Max Adler)は、その著「マルクス主義の國家觀」の中で(三十三頁)國家は社會の歴史的現象の形に外ならないものである。社會と國家とはマルクス主義者に取つては何等異れる二つのものではない、況んや彼等が互々に對照(ゲーゲンザツツ)になつて居ると云ふやうなことはマルクス黨に取つてはとても考へられないと云ふことを說いて居る。併しながら是は正當にマルクス及びマルクス主義の思想を理解したものであるとは觀ることが出來ないと私は思ふ。何故なれば彼等は國家を以て常に階級國家と觀て居る。階級國家と云ふことは强き階級が弱き階級を壓迫する道具としての國家と云ふ意味である。夫故に國家と云ふものがある限りは、彼等の立場からはそこに常に權力的支配及び支配され



ると云ふ關係がなければならない筈である。又彼等が階級國家を呪ふ所以は實に其處に存して居るのである。然るに彼等の言ふ所の社會と云ふものには何等さうした支配する、支配されると云ふ關係が存在して居るものではない。其點から見て、國家と社會とは全く異別のものであると見て居ると、斯うマルクス主義を理解するのはマルクス主義の正當なる理解であると私は信ずる。今一つは國家は時あつて死滅して仕舞はなければならないものである、所謂 Absterben して仕舞はなければならないものであると云ふことを說くのである。此死滅(アブシユテルベン)も第二節に於いて明にする。若し國家が時あつて死滅(アブシユテルベン)して仕舞はなければならないものであるとすれば、さうして國家と社會とが全く同一であるとすれば、國家が死滅(アブシユテルベン)すると同時に社會も死滅(アブシユテルベン)して仕舞はなければならない筈である。然るに彼等マルクス主義者は如何に考へて居るかといへば、國家が死滅(アブシユテルベン)してから後に始めて眞の社會が生れて來ると云ふことを考へて居るのである。左樣に考へて見ればマルクス及びマルクス主義者は國家と社會とを全く別樣に觀て居ると理解するのが正當であると信ずる。アドラーの「マルクス主義の國家觀」

を批評したハンス・ケルゼンは、その「社會主義と國家」(Hans Kelsen, Sozialismus und Staat)に於いて異つた見解を示して居る。更にレンツ(F. Lenz)は「國家とマルクス主義」(Staat und Marxismus)の中で、ケルゼンと共にアドラーの說に反對して、マルクス社會主義は國家と社會とを別樣に觀て居るものであると云ふことを說いて居る。私は以上述べた理由に依つてケルゼンやレンツの說いて居る所のものを以て正しいものと考へて居る一人である。

## 二　マルクス主義の國家觀

マルキシストの考に依れば、今日の經濟は非常に發達して來て國家と云ふものの限界を超越する有樣になつて居る。卽ち今日の經濟は所謂國家若しくは國民經濟の範圍を脫却して、今や超國家的、社會的の經濟になつて居るのである。夫は資本の側から見ても勞働の側から見ても同じことである。資本も勞働も何れも皆國家の領域に極限されて居ると云ふやうなことは少しもない。彼等は用ゐる所があれば世界のどこにでも夫を利用しようとして居るのである。夫故に今日は經濟狀態の方から云へば、寧ろ祖國や民族性と云ふものを破壞しようとして居り、又破壞することの方が寧ろ利益であると考へるやうになつて居るのである。併し資本と勞働との間には——兩者共に國家の領域を超越して居るものではあるけれども——相違する點がある。といふのは、其國家は所謂階級國家で今日では現在の優强階級である所の資本家の國家である。卽ち今日の國家は資本家の利益と云ふものを能く保護して居るものであるから、假令經濟は國境を超越して居るとは言へ、國家が存在すると云ふことは何等資本家の不利益でないばかりではなく、寧ろ資本家に取つて非常に利益があるからして、資本家は寧ろ國家を維持存續しようと努めるのであるが、劣弱階級たる勞働者の側から見ると、其國家と云ふものは却つて彼等の爲に非常に不利益をなすやうになつて居るのである。彼等はそれ故に國家と云ふものゝ寧ろなからむことを希うて居る者である。のみならず一國の中に於いて劣弱階級たる勞働者が、一國內の優强階級たる資本家に對抗して彼等を打ち倒すやうなことがあつても、尙他の國の資本家が自分達勞働者を壓迫して來るのであるからして、勞働者は世界的に一致團結して其共同の敵であ

る所の世界のブルジョア階級を倒して仕舞はなければならぬ。國家の中に搾取り搾取られると云ふやうな關係が存續して居る限りは、國家と國家との間にも其關係は絶えるものでない。卽ち强國は常に弱國を凌ぎ壓迫する。それ故に我等勞働者は政治的革命に成功するまで世界的に一致團結して共同の敵、世界のブルジョア階級を倒して仕舞はなければならぬ。政治的革命に成功すると云ふことは他ではない。今日の有產者階級の國家を打倒して、自分達プロレタリア無產者階級の世界を實現すると云ふことである。夫迄は我等無產者は有產者に對する攻擊の手を緩めてはならない。マルキシストはかう說いて、全く國家を無視し、世界的に勞働者の團結を圖らうと考へてゐるのである。以上は「マニフェスト」「哲學の貧困」等に現はれて居る考へ方であるが、是等所々に散見して居る考を一つに纏めて、マルクス主義の國家の起源及び其本質に關する考を說いたのが、エンゲルス(F. Engels)の Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staates (1886)の中にある考へ方である。而してエンゲルスがこの著書の中にどう云ふ風に說いて居るかを述べることに依つて、階級國家の意味が最も明白になるやうに思はれる。以下こ



の著書の中にある意味を幾らか敷衍して述べようと思ふ。

原始時代には國家と云ふものがなくして唯社會と云ふものがあつた。それが幾らか進んで來た所で國家と云ふものが生れた。更に其國家と云ふものは或る時になると死滅して仕舞つて、其死んで仕舞つた後で理想社會が現はれて來る。エンゲルスは斯う云ふ風に大體から說明して居る。此原始的社會と云ふのはまだ分業も何も起つて居らないやうな、所謂狩獵(ハンティング)、漁撈(フィッシング)の時代である。其時代に於いては部族とか種族とか云ふものゝ中に屬して居る所の人々は皆同じやうなことをやつて居つて、そこには何等分業と云ふことも私有財產と云ふこともなく、總て共產主義的生活をやつて何等分化(ディフェレンシエーション)と云ふものがない。分化がないと云ふことは、社會的階級がないと云ふことである。さう云ふ何等社會的の階級と云ふものゝない時に當つては階級鬪爭と云ふものがない。階級鬪爭のない所には唯社會と云ふものがあつて國家と云ふものがないのである。然るに段々人類が進步して或は牧畜の時代になり或は農業の時代になると、そこに段々分化が生ずる。牧畜と云ふことは或る個人が或る一定の家畜を飼育すると云ふことであり、或る家

畜を飼畜すると云ふことになれば其家畜を所有して居る者、所有して居ない者と云ふやうな所謂有產者無產者と言つたやうな差別が生じて來る。又牧畜と云ふやうなことになれば自然將來と云ふ考が這入つて來る。狩獵(ハンティング)や漁撈(フイツシング)の時代に於いては唯人々は現在に生きて居るのである。腹が空いた時に直ぐに獵に行くと云ふやうな譯である。然るに牧畜になると、今飼育して居る所の家畜は現在に利用されるのでなくして、將來に利用されるので、將來肉を食ふとか皮を着るとか云ふ必要の爲に今日飼育して居るのである。この將來と云ふ考が這入つて來る所からして段々私有財產と云ふやうな形が現はれて來る。それから所謂農業時代に進んで來れば荒蕪の地を開墾した場合、其開墾した所のものをむざむざ他人の手に之を分けてやると云ふことも嫌である。又一度自分が耕作した所の土地を他の人の手に渡してやると云ふことも好まないことである。それから常に一定所に居なければならぬ。一定所に居れば耕作に利用し得る地域の範圍と云ふものが殆ど極つて來なければならぬと云ふことになる。さうして人口は段々殖えて來る。かくの如く農業に於いては牧畜などより更に將來といふ考が多く這入つて來る。さう云ふやうな事情からして愈私有財產と云ふものが現はれて來る。私有財產制度が現はれるやうになつて、そこに有產者、無產者と云ふやうな社會的階級が存在して來る。のみならず勞働そのものは好ましきものではない、出來るならば勞働をせずに唯收穫だけを得たいと云ふのが人情であるからして、そこで所謂戰に勝つた所の自由民は地主になつて、負けた種族の者共は奴隸になつて力役に從事せしめられるやうになり、所謂地主とか農業勞働者とか云ふやうな社會的階級が現はれて來る。さう云ふやうな事情に依つて段々社會が進歩するに從つて社會的階級が分裂して來るのである。社會的階級が分裂して來ればそこに所謂階級鬪爭が現はれて來なければならぬ。而して人は國家は其階級鬪爭を調停せむが爲の調停の役として、或は調停機關として生れたものであると云ふやうに說くのであるけれども、それは全く間違である。斯くの如く階級鬪爭が起るやうになると、强い所の階級は有らゆる手段を用ひて自分達の强い權力を永遠に維持し、弱者をいつ迄も弱者たらしむるやうな方法を講ずるものである。國家は强者が自分達の特權を維持する所の道具として之を作り出したものである。と云

ふのは國家に絶對至上の權力を與へて、其國家の名に於いて法律を制定し、法律の力を以て自分達の特權を維推し、弱者の自由を壓迫して行くと云ふやうにして置けば、強者は事のある毎に出でて弱者と戰つて行く必要がない、常に國家の名に於いて國家の力に依つて總括的に彼等の特權を維持し弱者を壓迫して行くことが出來る。さう云ふ意味に於いて國家は強者の爪牙として強者の道具として現はれた所のものである。と云ふのがエンゲルスの説明である。

この強者の爪牙として道具として現はれたものであると云ふ意味に於いて國家は所謂階級國家である。即ち彼等マルキシストの考へ方に依れば國家と云ふものがある以上は、其本質上それは階級國家でなければならない筈であると云ふことは、實にエンゲルスのこの理論に基いて居るものである。斯くの如くにして或は奴隷と自由民、或は大名と家來及び大名の中に屬して居つた所の農民と言ふやうに時代に依つて色々な階級が現はれて來る。何れも國家は強い自由民或は大名或は組合（ワンフト）の親方の機關として現はれて來る。今日は商工時代で、所謂資本家と云ふものが強者の地位に立ち、勞働者と云ふものが弱者の地位に立つて居るか



らして、近代の國家と云ふものは優强階級たる資本家階級の國家であつて、其資本家階級の國家として勞働者階級たる劣弱者階級を抑へ付けて居る國家である。今日の資本主義、今日の經濟的秩序と云ふものは、彼等マルクス主義の所謂唯物史觀の考へ方に依つて必然的に倒壞して自ら滅びて仕舞はなければならぬものである。今日の生産は彼等の言葉に從へば全く無秩序な無政府主義的な生産である。無政府主義的な生産は矢張り彼等自ら今日の經濟組織を打壞して仕舞ふ所の仕方である。即ち今日の資本家は彼等自ら墓穴を掘りつゝあるものである。今日の資本主義經濟組織と云ふものは次第々々に倒れて仕舞ふ。倒れて仕舞つた其後に於いてはどうであるかと云ふと、そこで始めて誰でも働かない限りは食ふ權利がない、働きさへすれば必ず食ふことは保證されると云ふ時が現はれて來るのである。さうなると階級分裂がなくなつて仕舞ふからして階級鬪爭もなくなる。階級鬪爭がなくなれば優强階級の道具として存在して居つた所の國家其ものは死滅して仕舞はなければならないものである。これがエンゲルスの所謂死滅（アップシュテルベンデオリイ）説の根據である。併し今日の資本主義が壞れて、直ちに理想社會に行く

のではなくして、矢張りそこに幾らかの期間は今日のプロレタリアが、今日のブルジョア階級に代つて國家の權力を用ひる時代がある、それが所謂過渡的國家と言はれて居るものである。其過渡的國家を經て始めて理想の社會が現はれて來ると云ふのがエンゲルスの考へ方である。之に依つて第一に國家と社會と云ふものは全く別なものであると云ふやうに考へて居ると云ふことが明である。さうして社會がある時國家はない、國家がある時社會はない、國家がなくなつて本當の社會が現はれて來ると云ふ考へ方であるからして、國家と社會とは全く異別なものであり、而もそれは互に排他的のものであると云ふこともこれから分り、國家がある限りは、其國家と云ふものは是非とも階級國家でなければならぬ筈であると云ふエンゲルスの説明も分るのである。



## 三　「階級國家」論の誤謬

然らばこの階級國家論は果して正しき考へ方であるかどうかと云ふことを是から研究して見ようと思ふ。先づ第一に階級國家論の骨子として居る所は、國家は一つの階級が他の階級を壓迫せむが爲の道具として存在して居るものであると云ふのがそれである。私は歴史に就いては極めて淺薄な智識しかないのであるが、其淺薄な智識を以てしても總ての國民史が此階級國家を以て説明され得るとは考へられないのである。或る國民の或る時代の歴史は之を階級闘爭に依つて説明することが出來るでもあらうけれども、總ての歴史を階級闘爭の歴史として見ると云ふ事は事實に悖つてをりはしないかと思ふ。他の國民史は姑く惜いて、我日本の國民史を見る時、我國の國民史の果して總ての頁が皆一つの階級が他の階級を壓迫することに依つて綴られて居るであらうか。恐らく誰もがさうだと斷言する勇氣は有たないであらうと思ふ。否さうでないばかりでなく、我日本の國民史の如きにては、一つの階級が他の階級と爭つた場合には弱い階級を助け、憐れなる階級を救つて來た所の歴史であると觀るのが寧ろそれを理解するのに妥當な觀方ではなからうかと思ふのである。所謂天下の窮民、天下の鰥寡孤獨の者、天下の無援（ヘルプレス）な階級が其救ひを求め、其窮狀を訴へた時、彼等は何に對して救ひを求め窮狀を訴へたのであるかと言へば、それは國家である。而して國家は其聲を

決して聞流しにはしない、常に彼等の味方になつて出來るだけ、彼等を救ひ、彼等を賑はして來たのである。若しそれが我日本の國民史であるとすれば、假りに外の國民史は總て一つの階級が他の階級を壓迫せむが爲の道具として生れて居るものであると云ふことが許されるとしても、所謂全稱肯定命題は特稱否定命題に依つて直ちに打破られる如く、エンゲルス或はマルクスの考へて居る所の全稱肯定命題、卽ち國家は一つの階級を壓迫せむが爲に出來たのであると云ふ其命題も、我日本國家は然らずと云ふ特稱否定命題に依つて之を破るに十分の力を持つて居ると言はなければならぬ。近頃のマルキシストの中、殊に文明批評家として名を出して居るオツト・バウエル(Otto Bauer)は其の著書 Die österreichische Revolution (Wien, 1923)の中に於いて前に述べたエンゲルスの說を冷笑して居る。バウエルは先に述べた所の、國家は階級鬪爭の起つた場合に其鬪爭を調停する調停役として現はれたものであるかの如く見えるのであるが、併しそれは見えるだけであつて、實は强者の爪牙となり道具として現はれたものであると言つて居るエンゲルスの言葉を捕へて、成程エンゲルスは國家は調停役であるかの如く見えると言つて居るけれども、今日西歐羅巴の近代國家(モダン・ステーツ)が起つてから少くとも三世紀程經過して居り、而して其三世紀間の各西歐羅巴の國家の進展を見ると矢張り國家は階級鬪爭の調停役であるやうに見えて居るのである、其見えて居る期間は三世紀にも亘つて今日猶持續して居るのであると皮肉を浴せ掛けて居る。このバウエルの說に徵して見ても、一つの階級が他の階級を壓迫せむが爲に國家は出來て居るものであると云ふやうに觀る觀方は妥當を缺いて居るのではないかと思はれる。

次に第二點は彼等階級國家論を主張する所の人は、今日の優强階級は有產者であり資本家である、今日の國家は有產者資本家の爪牙であり道具である、故に今日の國家內に於ける富の分配とは常に全部か無かであつて、有產者資本家が總てを取るか、無產者或は勞働者は無を取るかである、であるから今日の國家の存續する限りは公平なる富の分配があり得ると云ふことはないから、今日の國家は之を潰して仕舞はなければならぬと云ふのである。其論も果して正しき論であるかどうか。今日近代國家(モダン・ステーツ)に於いては所謂社會政策、それに立脚せる社會立法を行つて居ない國家は一つとしてない。或は工場法の制定、工場官の設置、或は小作官の設

置、少年・婦人勞働者の保護乃至諸々の職業紹介所などの設備、或は諸々の勞働保險法(日本では簡易保險である)とか、さう云ふやうな所謂社會政策を實行して居ない國はないのであるが、然らば斯の如き社會政策とは果してどう云ふことを意味して居るものであるかと言へば、出來るだけ無產者、勞働者、貧民の利益を保護し、彼等の生活を保證し、彼等をして向上發展せしむるが爲のものに外ならないのである。と同時に或は銀行法であるとか或は會社法であるとか云ふやうなものに依つて、又それぞれの官吏を設置して――彼等の營業經營の狀態を審査、監査せしめて居るのである。それは一方無產者の利益を保護すると同時に他方所謂有產者、資本家の間に不義不正のことなからしめむが爲に國家が施設して居る事柄である。又今日では相續稅の如き稅目を設置して居ない國は一つもないのである。而もそれ等の稅目に關しては可なり强い累進稅率を課して居るのである。それ等も所謂社會政策的の施設と言ふことが出來るであらうが、それ等も國家と云ふものゝ作用に依つて出來るだけ各人の間の富の分配を公平ならしめむが爲に出來て居る所の施設と見なければならないのである。若し果してさうであるならば今日



の國家の下に於ける富の分配とは、或は多いか少いかと云ふことはあるかも知れないが、全部(オール)か皆無(ナッシング)かでないことは明かである。それ故に今日の國家のある限りは富の分配は全部か無かと云ふやうな極めて不公平な不正義なものだから、今日の國家を潰して仕舞はなければならぬと云ふ彼等の論も、事實を無視した考へ方であると言はなければならないのである。

第三には彼等階級國家論を主張する所の人達は、國家と云ふものは階級國家であつて、今日の優强者はブルジョアであり、資本家であるからして、今日の國家と云ふものは私有財產制度を保護することに於いては至れり盡せりである。併しながら他の一方に於いて勞働と云ふものに對してはそれ程十分に保護して呉れない。それ故に今日の國家は其點に於いて誠に片手落の國家と言はなければならぬ。單にそればかりではない。今日の社會上の缺陷は私有財產制度卽ち所有權と今日の經濟事情との矛盾から生じて來て居る所のものである。謂ふ所の矛盾とは今日の生產は總て社會的になつて居るのに、私有財產制度があるが爲に分配は個人的になつて居る事である。生產が社會的になつて居つて、分配が個人的になつ

て居る所からして、所謂搾取る、搾取られると云ふ今日の社會上の缺陷が生れて來て居るのである。それ故にこの缺陷を矯す爲には私有財産制度を打破つて、所謂共産主義にして仕舞はなければならぬ。共産主義にする爲には其私有財産制度の有力なる保護者である所の國家を倒して仕舞はなければならぬと云ふのである。然らばさう云ふ論は果して正しき論であるかどうかと云ふ事を考へて見よう。彼等階級國家論者は所有權と云ふものは不定不動のものであるかの如く說いて居るのであるけれども、所有權の實質と云ふものは決して一定不動のものでないことは、之まで私有財産制度の發達を研究した所の多くの人々の認めて居る所である。卽ち所有權の實質は始終變動して來るものである。例へば我國に於いて氏族制度の行はれて居つた時には、土地は其氏族の私有物であつたらしく見えるのである。曾に其土地が氏族の私有物であつたばかりでなく、其土地に土着して其土地を耕して居つた所の民も矢張り其氏族の私の民であつたかの如く見える。併し其後になつて口分田の法、班田の法が布かれ、而して其口分田、班田法の行はれて居つた當時に於いては、土地は寧ろ國有であつたと觀ることが出來るの



である。斯の如く唯一例だけを見ても所有權の實質は其時々の事情に依つて變つて來たので、決して一定不動のものであるとは言はれない。尤も所謂個人主義の非常に盛であつた時代に於いては、其個人自由主義の最も有力なる一つの現れとして、所有權は絕對に動かすことが出來ないものであると言ふやうな考も嘗てはあつたのである。さう云ふ考から見れば前の第二點に說いた所の所得稅であるとか或は相續稅であるとか云ふやうなもの乃至累進稅と云ふが如きも、皆個人の所得權を侵害するものとして考へられて居つたのである。併し斯くの如き考は最早八九十年前の過去のことに屬し、今日では所得稅なり相續稅なり累進稅率なりは寧ろ當然のものであると承認されて居るのであるし、加之、今日は獨占的の性質を有つて居る事業は國家若しくは公共團體が之を企圖經營する方が宜いと云ふ樣な考になつて來て、例へば郵便、電信、鐵道、市內電車、電話、水道、瓦斯等は大抵國家若しくは公共團體が之を經營して居るのである。若し個人の所有權の絕對不可侵と云ふ見地から見たならば、斯くの如き國家の獨占と云ふものは個人經營上の自由の權利である企業經營を妨げる事であつて、從つて其意味に於いて國家が

個人の所有權を侵害して居るとも考へられるのである。國に依つては今日に於いても未だ鐵道は國有になつて居らない。亞米利加の如きそれである。或は電信の如きも國有になつて居ない所がある。けれどもさう云ふ風に國の事情の如何に依つて未だ國家の經營になつて居らない所もあることは事實であるけれども、さう云ふ獨占的の性質を有する事業は國家若しくは公共團體が之を企業經營すると云ふことは、個人の所有權を侵害するから理論上間違つて居ると考へる者はなくなりつゝあるのである。是等の事に微して見ても、所有權の實質と云ふものは決して一定不動のものでない事は明である。シカゴ大學のタフツ(Tufts)はその倫理學の中に於いて、所有權は富の管理の一つの方法であると說いて居るが、誠に妥當の言であるやうに思はれる。即ち一切の富は天が我々人類の一切に對して與へて呉れたものに相違ないが、併しそれを如何に管理すれば最も能く人生の充實、人生の貢獻、人生の自由、換言すれば人生の理想に適ふであらうかと云ふことを目安として、其當時の道德・社會其他諸々の狀態(コンディション)に應じて、規定せられたる所の富の規定に應じて共富を管理して行かなければならぬ。斯くの如くにして私有



財產は生れて來て居るのであるからして、實質は一定不動のものではないけれども、人生の充實・貢獻・自由等を目安として歷史的・道德的・社會的の事情によつて規定されたものに應じて之を管理して行かなければならないものであつて、彼等所謂有產者富豪達が若し此財產は自分のものである、從つて自分が勝手にこれを處分し消費することが出來ると云ふやうに考へたならば間違である。と同時に彼等マルキシストが此一切の私有財產制度を一躍撤廢せんとし、其爲に私有財產制度の保護者たる國家をも討滅して仕舞はなければならぬとすることは、全く以上の理論を無視した考であると言はなければならぬ。其意味に於いて私は彼等の第三の論據も亦甚しく誤つた考であると思ふ。

更に第四に、彼等は階級鬪爭、階級鬪爭と言つて、唯國家內の或る國民が必ず甲と乙とに分れて仕舞ふものであると云ふ分裂の方面のみを考へて、其分裂の中にそれを結束する所の强い〳〵民族意識のあることを忘れて居ることである。我々には或場合に於いて所謂分裂意識と云ふものゝないこともないが、併し分裂意識のみかと云ふと決してさうではない。自分達が同一の血統に屬して居ると云ふ

意識、同一の風俗、習慣、歴史を有つて居ると云ふ意識、同一の言語を使用して居ると云ふ意識、是等は暗默の中に非常に力强き結合の作用をなして居るのである。それ故に平素分裂意識のみが働いて居るやうなことがあつても、一朝何事かゞあると民族意識が猛然として現れて今迄の分裂意識が消えて仕舞ふことがある。卽ち兄弟牆に鬩いでも外侮りを防ぐと言ふやうな作用が矢張り國民民族の間にも强く行はれて居るものである。而して此民族意識が非常な强い强い統一作用を持つて居つて、夫が國家の脊柱を成して居ると云ふことは是亦各國の國民史に於いて證明することが出來るのである。であるから各國の國民史は分裂の歴史であるよりは寧ろ統一の歴史であると云ふ風に見るのが妥當であるやうに思ふ。

最後に斯の如きマルクス主義の階級國家論には幾多の誤謬が含まれて居るので、所謂マルクス主義者の中にも國家の存在を否認するのは宜しくない、否よく考へて見るとマルクス其人の考も決して國家の存在を否認する考ではないやうであるなどと理窟を付けて國家の存在を肯定する所の者が續々と現はれて來たことである。前述のマルクスの正統派(オルソドックス)の方からして機會主義(オツポチユニスト)者と言はれて居る所の修正派に屬して居る人は言ふ迄もなく國家を是認しようと云ふのであるが、其外の所謂正統派(オルソドックス)のマルキシストと見られて居る所の人達で國家の存在を肯定しようとする人達が續々と現はれて來たのである。既述のオットー・バウエルの如きも其の一人であるが、同じく墺太利のカール・レンナア (Karl Renner) は Marxismus, Krieg und Internationale (1917) の中に於いて、今日の所謂資本主義的の國家を觀ると、どの國家でも其中に多分に社會主義の種を含んで居るやうになつて居る。今日では唯經濟の方面のみが資本家に奉仕して居るやうであるが、國家は寧ろ今日の所槓杆(レーベル)になつて居るのである。エンゲルスが國家は死滅しなければならないと言つたのは、それは資本家的國家であつて、國家其ものがなくなつて仕舞はなければならぬと云ふのではない、などと言つて、國家は存續させなければならぬと言ふやうなことを述べて居る。カウツキーは一九二二年に出版の著書 Die proletarische Revolution und der Programm の中に於いてレンナアのこの言と同じやうなことを述べて居るが、今日社會主義者が呪つて居る所のものは今日の國家の形態なのである。卽ち今日の官僚的な、軍國的な、國家を呪つて居るのであつて、國家其ものを呪

つて居るのではない。さう云ふミリタリズムの國家は死滅(アウフヘーベン)しなければならぬものであるが、眞のデモクラシーの國家は必ず永遠に存續して行かなければならぬものであるなどと云つて居る。更に最も興味あるのはルドルフ・ヒルファーディング(Rudolf Hilferding)である。獨逸の社會民主黨の機關雜誌として一八八二年に「新時代」(Die neue Zeit)と云ふ雜誌が月刊で發行されて居たのであるが、之が一九二六年に至つて廢刊した。其廢刊した事情はマルキシストの間に於ける內訌に依るのであるが、其の代りとして現はれた雜誌が「社會」(Gesellschaft)である。此「新時代」を改題して「社會」として第一卷を出した時の卷頭の論文は「現時の問題」と云ふのであつたが、其中にも矢張り前に述べたカール・レンナアなどの說いたやうに、所謂あらゆる國家をなくして仕舞ふと云ふのではない、一つの官僚的な軍國的な國家を否定するのであつて、理想の國家を否定するのではない、否其國家と云ふものがなければ我々は我々の理想、社會主義的理想を實現することが出來ない、と言ふやうなことを述べて居るのである。それから伯林大學のクノー(Cunow)は一九二〇年に Die Marxsche Geschichts- Gesellschafts- und Staatslehre と云ふ著書を出版して居る。此書は出來るだけマルクスを辯護しようと努めて居るのであるが、併し國家論に就いては矢張り國家はどこ迄も存續して行かなければならぬもので、以前は國民は一向國家とは沒交涉のやうな有樣であつたのであるが、近頃は段々變つて來て國家は我々の國家であると云ふ考——意識が段々明かになつて來たのである、此我々の國家と云ふ意識が明かになるやうになればそれが本當の國家である、さう云ふ國家はどこ迄も存續して行かなければならぬ、マルクスの本當の考も其處にあるのだと言ふやうなことを說いて居る。斯くの如く正統派(オルソドックス)のマルキシストと言はれて居る人、マルクスをどこ迄も辯護しようと云ふやうな人々の間にも、國家論に於いては、國家は是非とも存續して行かなければならぬものであると云ふことを考へるやうになつて來たと云ふことを見ても、如何にマルクスの國家論と言ふものが誰が考へても十分のものでないと云ふことが分ることゝ思ふ。

## 四　レーニン主義とマルクス主義

レーニンの書いたもの若しくは演說の筆記等は可なり澤山出版されて居り、其

中に目ぼしいものも隨分澤山あるが、玆には特に「國家と革命」(Staat und Revolution)に基いて述べようと思ふ。是は自分の考を積極的に述べたと云ふよりは、カウツキーとの議論に於いて書いたものである。それ故に可なり色々の點に於いてマルクス主義が力强く言ひ現はされて居る所もあるのであつて、旁レーニンの思想を窺ふに便利であるやうに思はれる。此書に依ると、レーニンは、今日マルクス主義者と自ら標榜して居る人はなか〳〵數多くあるけれども、私を以て之を見れば彼等の多くはマルクスを誤解せる者か曲解せる者か、若しくはマルクスを極く淺薄に觀て居る所の者であつて、マルクスの思想を正しく且深く觀て居る者は甚だ乏しいやうである。少くとも自分は自分の思想を以てマルクス主義の正當なる繼承者であると思つて居る者であると言つて居る。而してレーニンは所謂第三インターナショナルを首唱し主宰し指導した所の人である。それ故にレーニンの思想を側面から特徴付ける意味に於いて、第三インターナショナルは如何にして生れたものであるかを一應述べることは必ずしも無益なことでないと思ふ。この點に就いてはブハーリン(Bucharin)とプレオブラッシエンスキー(Preobraschensky)との合著になつて居るDas A B C des Kommunismus とカール・ディール(K.Diehl)のUeber Sozialismus, Kommunismus und Anarchismus 等の書物に依つて述べることにする。ブハーリンの書物は寧ろ自分達の露國の革命を謳歌する方の立場に立つて居るものであるから是は餘程割引をして讀まなければならぬ。カール・ディールの方はプロフェッサーとしての態度を取つて、別に辯護するとかどうとか云ふことでなく、極く公平な立場に立つて書いて居る、それ故ブハーリンの書物を補ふにディールの書物を以てすれば先づ大體の眞相を得ることが出來ようと思ふ。第三インターナショナルは第一インターナショナル、第二インターナショナルに對する第三インターナショナルであつて、第一インターナショナルは一八六四年にマルクスが主唱し、マルクスが主宰者となり指導者となつて始めて起されたものであるが、一八七六年にマルクス派とバクーニン派との間に爭が出來て、其内訌の爲に、繼續すること十餘年にして滅びて仕舞つた。其後一八八九年になつて第二インターナショナルが生れ、現今に至つて居る。それに對して第三インターナショナルは一九一九年、丁度世界戰爭の濟んだ翌年レーニンの指導の下に莫斯科に於いて始めて第一回のコングレスを開い

て組織され、之が現今に至つて居るのである。第三インターナショナルは第二インターナショナルから或る一派が分離して現はれたものである。其分離に至る事情が軈てレーニンの思想を特徴付けることになるのであるから、其分離に至る經過の大要を述べようと思ふ。

第二インターナショナルの起つた一八八九年の當時は世界が總て帝國主義を實行して居た時代である。H. Friedjung の「帝國主義時代」(Das Zeitalter des Imperialismus)と云ふ二卷よりなれる大冊の中にも、一八八四年から一九一四年までの間をば世界の帝國主義時代としてある。帝國主義時代と云ふのは言葉を換へて言へば、各國家の國家權が非常に發達し、隆昌になつたことを意味するのである。其國家權が發達し隆昌になつたと云ふことは、同時に各國が殖民政策を採つて來た、さうして殖民地が段々と發展するやうになつて來たと云ふことを意味して居る。其帝國主義時代に於いての産業(インダストリー)の有樣はどうであつたかと言へば、國家權の隆昌に連れて産業も亦非常に發達した譯である。同時に殖民地との取引乃至世界の商業が非常に活潑になつて來たのであつて、所謂好景氣の時代であつた。好景氣の爲に自然勞働者の收入歩合も甚だ良好な狀態に置かれてゐた。從つて一八八九年に第二インターナショナルは出來たけれども、さう云ふやうに勞働者の收入狀態が甚だ佳良の狀況にあつたので、表面は國家を呪ひ國家の惡口を言うて居りながら、陰では寧ろ國家權の隆昌を謳歌すると云ふやうな態度が尠からずあつた。その爲に第二インターナショナルは活潑な花々しき活躍を試みることが出來ないやうな狀況に置かれてあつたのである。そこへ現はれたのが一九一四年の世界戰爭である。其世界戰爭の結果第二インターナショナルの聯盟に屬して居る各國の勞働組合及び社會主義者の團體に對して非常な擾亂、動搖が惹起されることになつた。其結果は大體之を三派に分けることが出來る。即ち第一派は極めて尋常一樣の國民と同じやうな考を有つて居るのであつて、即ちもう戰爭が始つた以上には仕方がないから、獨逸は獨逸、佛蘭西は佛蘭西と銘々自分の國が勝利を得て終結して行くやうにするより仕方がない、それ故我々は戰爭に出て行くのは勿論のこと、軍費の募集があればそれにも應じなければならぬと云ふやうな、極めて溫和な考を有つて居るものであつて、彼等は「社會主義的愛國者」と云ふやうな名を付けられ

て居つたのである。第二派は、どうも戰爭が始つた以上は是は仕方がないけれども、出來るだけ早く此戰爭を終結させるやうにしなければならぬ、それには自分達は戰線に立つと云ふことは止さうではないか、と言ふやうな稍々過激な思想を抱いて居つたのであつて、之は「中央派」と名付けられて居た。それから第三派はどうも過激な方で、我々の主義は本來基礎的に非戰論者である、亦非戰論者であらねばならぬ筈である、戰爭が始つたからどうも仕方がないでは自分達の主義を裏切る譯であるからして、我々社會主義者としては今度始まつた所の戰爭を即時撤廢すると云ふ事をやつて行かなければならぬ、大體戰爭を起したのは現在國家の政を預つて居る國家當局であるから、此戰爭を即時終結させる爲には其戰爭をやり出した今日の政府を打倒顚覆する所謂革命手段に依らなければならない筈である、と云ふ考へで、戰線に出て行かないことは言ふ迄もなく、軍費の募集にも應じない、さうして銘々國内に於いて革命を惹起すことに依つて、世界戰爭を終結させて仕舞はなければならぬと云ふのが第三派の最も過激な一派であつたのである。此第三派の者は一九一四年、戰爭が始まつてから暫くの間は第一派第二派の者と



一緒になつて居たけれども、段々時間が經過して來ると、到底自分達は他の第一派第二派の者達と一緒に事をやつて行くことは出來ない、彼等は社會主義の本來の考へを裏切つて居る叛逆者である、その叛逆者と、我々とは到底一緒に仕事をして行くことは出來ない、と考へる樣になつた。而して露西亞は既に革命を斷行して、所謂戰爭即時撤廢を決行して仕舞つたのである。そこで遂に一九一九年に、レーニン自身が露西亞革命で斷行したこの主義を旗印として、即ち社會主義の本來の考を旗印として、第一派第二派と分れて第三派だけを以て、莫斯科にインターナショナルを拵へた。これが所謂第三インターナショナルと言はれるものなのである。

此經過の概略から見ても、第三インターナショナルと云ふものは非常に過激な思想を抱いて居るものであると云ふ事が解かる譯であるし、其第三インターナショナルを指導した所のレーニンの思想も亦さう云ふ過激なものであると云ふ事を、側面から特徴付けることが出來る譯である。然らば第三インターナショナルが第二インターナショナルから分離するやうになつた表面の主義主張はどこにあるか。即ち第二インターナショナルと第三インターナショナルとを區別する最も顯著なる

點はどこにあるかと言ふと、それは第五節で述べようと思ふ所の革命と無產者の獨裁と云ふ點にあるのである。卽ち第二インターナショナルに於いては革命主義でなく進化主義で行かう、革命（レヴォルチオン）の方法に依らずして進化（エヴォルチオン）の方法に依つて行かうと云ふのである。之に反して第三インターナショナルは進化ではいかぬ、矢張り革命で行かなければならぬと云ふことを主張して居るのである。それが第一の違ひであつて、更に第二インターナショナルは飽くまでもデモクラシーで行かうと云ふのに對して第三インターナショナルは無產者の獨裁で行かうと主張するのである。この兩者の行き方の違つて居る所が第二と第三との分れて來た所である。それ故にレニニズムの思想の焦點として、マルクス主義の正當なる繼承者としてのレニニズムの焦點として考ふべきは、以上の革命と云ふことと無產者の獨裁と云ふことであらねばならぬのである。

## 五　革命と無產者の獨裁

カウツキーはマウエルブレッヒェル（Mauerbrecher）と「新時代」の紙上に於いて論爭したが、その論文を集めて一九〇九年に「權力への道」（Der Weg zur Macht）といふ著書を出版した。一九二〇年には第三版を出して餘程變へて居る。權力へと云ふ此權力は言ふまでもなく政治的權力を指して言ふのであるが、此政治的權力を獲得するのに急進主義で行くべきか、將た漸進主義で行くべきか、卽ち革命の方法で行くべきか、進化の方法で行くべきかと云ふことに就いては、餘程前からマルキシストの間に議論があつたのである。先づ第一にマルクス自身の說は一體どうであるかを窺つて見ると、マルクス自身の說いて居る所は極めて曖昧で、はつきりした考が出て居らないのである。マルクスは或る所では革命主義で行かなければならぬと云つて居るし、又或る所では漸進主義で行かなければならないと云ふやうに論じて居るのであつて、どつちがマルクスの趣意であるかゞ少し分り兼ねるやうになつて居る。例へば「共產黨宣言」中には無產者が一致團結して政治的權力を獲得しなければならぬ、政治的權力を獲得することに依つて nach und nach 云々と云ふ言葉を使つて居るが、段々資本家の資本を奪ひ取つて仕舞はなければならぬと云うて居る所から見ると、マルクスは漸進主義を取つたものであると云ふやうに

解釋出來る譯である。それは初めマルクスは佛蘭西語で書いたのであるが、其獨逸譯の一六三頁の所には矢張り、政治的權力を獲得する爲には段々とエヴォルチオンの方法で行かなければならないものであると云ふことを說いて居るのである。又一八七二年に國際的の勞働團體の會議が和蘭に開かれた時に、其會議が濟んだ後でアムステルダムで一派の大講演會が開催された。其席上に於けるマルクスの演說の中には、我々無產者が政治的權力を獲得するのには其國々の事情に依つて行かなければならないもので、總て革命手段でやらなければならぬとか、總て漸進主義でやらなければならないとか言ふものではない。例へば米國、英國、和蘭と云ふ國の如きは之まで既に平和的な適法的の手段に依つて、段々と勞働者が政治的權力を獲得するやうになつて來たのである、と云ふ意味のことを述べて居る。それから見ると矢張りマルクスは其時々の事情、其國々の具合に依つて漸進主義で行つて宜いものもあるし、又急進主義で行かなければならぬ場合もあると言ふて、矢張りどつちでなければならぬと云ふはつきりした考を出して居らないやうである。斯くの如く一方から觀るとどつちでも宜い、否寧ろ漸進主義で行かなけ



ればならないと云ふやうに說いて居るかの如く見ゆるのであるが、併しながら他面に於いては一八四八年十一月七日、「新ライン新聞」に革命的恐怖主義（テロリズム）を謳歌した熱烈なる文章があるのである。それに依ると、古い社會の死んで行く惱み、新しい社會の血腥い出生と云ふことを出來るだけ短縮せむが爲に革命を用ひて行かなければならない、そしてそれは我々が用ひる所の唯一の手段であると言ふやうなことを述べて居るのである。それから見るとマルクスは全然革命主義の謳歌者であると云ふやうにも觀られるのである。斯くの如くマルクス自身の文獻に依つては、マルクスは果して革命を是認したかどうか、漸進主義を謳歌して居つたかどうかと云ふことに就いては甚だ不明瞭なのである。

このマルクスの見解の不明瞭なためにマルクス主義者の間にも色々說が分れて來たのである。例へばカウツキーの如きはマルクスの眞意は進化で漸進主義であると考へて居るし、レーニンの如きは革命主義がマルクスの本來の考へ方であると云ふ樣な風に說いて居る。併しさう云ふやうに異論はあるが、前に述べた彼等の所謂階級國家（クラッセン・シュタート）と云ふ本來的の考へ方から推して考へて見た場合には、マル

クス主義は寧ろ革命主義を謳歌して居るのである、否、革命主義でなければ到底今日の勞働者は今日の國家の政治權力を獲得することは出來るものでないと思つて居るのではないかと推察出來るのである。何故かと言ふと、前述の如く彼等の國家は階級國家である、謂ふ所の階級國家とは優强階級が自己の權利を維持し劣弱階級を壓迫せむが爲の道具としての國家である。それ故に國家内に於いて所謂國會主義の手段卽ち適法的の手段に依つて現代の國家を打壞さうとしても是は全く不可能なことである。丁度船の中に這入つて居つて、さうして少しも外部からの關係なく船を動かさうとするやうに。それ故に今日のブルジョア階級國家を打倒して、自分達プロレタリアの國家を建設しようと云ふことであるならば、國家の外に出て國家の力を借らずして自分達自力で行かなければならない筈である。斯う考へるのは階級國家論から出て來る所の結果でなければならぬ筈である。若しこの階級國家と云ふ考へ方がマルクス主義の本來の立場で、その立場から叙上の解釋をすることが出來るならば、彼等は寧ろ革命主義を彼等の手段であると云ふやうに考へて居つたものであらうと察せられるのである。彼の革命的サンヂカリズムを唱へた所の佛蘭西のソレルは、之までの所謂漸進主義、温和主義の人々を非常に罵倒して、何處までも革命主義で行かなければならないと云ふことを說いて居る。ソレルの言ふ所に依ると之までの所謂漸進主義者の運動に依つて各國家は所謂社會政策と云ふものを實行するやうになつて來た。社會政策を實行することに依つて勞働者、無產者の狀態が改善されて來た、それは確かに事實に相違ない。けれども此社會政策に依つて無產者、勞働者の狀態が幾らか改善されて來たなどと言ふのは言はゞ所謂對症療法の仕方であつて、お腹が痛いから痛くないやうにモルヒネで止めて仕舞ふと云ふだけの事であつて、何等根本的治療にはなつて居らないのである。それだから一時治まつたにしても病根にして除かれない限り又再び此病氣は現はれて來るに違ひない。謂ふ所の病根とは何であるか。それは今日の私有財產制度である。それを除かなければ幾ら一時的の對症療法をやつて見た所で、決して病氣を根本的に治療する事は出來るものでない。然るに之までの所謂社會政策であるとか或は漸進主義の人達の言つて居る所に依れば、果して病根である私有財產制度の撤廢と云ふことを彼等は說い

て居るかどうか。否今日の國家は所謂ブルジョア國家である、私有財産制度と云ふものを保護する爲に出來て居る所の國家である。だから根本のことになると今日の國家は一歩も讓らないのである。一歩も讓らないからして所謂漸進主義が幾ら運動して見た所で、從つて幾ら政策的の設備が實行された所で、決して今日の國家及び社會と云ふものゝ病根を絶つて仕舞ふことの出來るものでないからして、病根を絶つて行く爲にはどうしても革命主義で行かなければならぬ、と言つて漸進主義の人達を罵倒し、自分達の革命主義の正當であることを力説して居るのである。さうしてソレルも矢張りレーニンと同じ樣に我こそマルクス主義の正當なる繼承者であると云ふ事を說いて居るのである。レーニンも亦同樣であつて、後でカウツキーとパンネコック(Pannekoek)との論爭に對するレーニンの批評を更に述べるが、決して尋常一樣の漸進主義では到底今日の社會上の病根を除き去る事は出來るものでないからして、どこまでも革命主義で行かなければならぬと言つて、自分が露西亞に斷行した事を辯明して居るのである。卽ちレーニンは、マルクスは革命と云ふことを是認して居つたのである、從つて革命を實行した所の自分はマルクス主義の正當なる繼承者であり實行者であると言はなければならぬ譯である、と云ふやうに自分自身を辯明して居るのである。偖て然らば此革命主義と云ふことゝマルクス及びマルキシズムの體系(システム)の全體とどう云ふ風な關係になつて居るか、卽ち革命主義と云ふものは果してマルクスの體系の中に何等の矛盾なしに這入つて居ることが出來るものであるかどうかと云ふことを考へて見なければならぬ。マルクスは彼の著述の中に於いて折々、自分達の社會主義運動は助產婦の仕事をやつて居るものである、と云ふことを說いて居るのである。其顯著なる一ケ所を指摘して見れば「資本論」第四版(一八八四年)の第一卷七一六頁に、古き社會、卽ち現代の資本主義の社會からプロレタリアの新しき社會が生れて來るのであるが、其新しき社會の生れて來るのを助ける爲に、我々は社會運動をやつて居る者であると云ふことを說いて居るのである。偖て此助產婦と云ふ考を文字的に眞面目に考へて見るならば、古き社會が自分の胎內に新しき社會を懷胎する、懷胎すると云ふことは是は人工で出來ることではない、又懷胎された新しき社會が古き社會の母胎を離れて將來自身が獨立の社會として現はれるやうに

なるのも、是も人工で行く譯のものでなく、矢張り一定の自然の經過を待たなければならない譯である。それであるから若し助産婦と云ふ考を文字通りに正確に考へて行つたならば矢張り自然の經過を待たなければならぬ、自然の經過で來るものを唯人間が多少それを助けてやると云ふまでに過ぎないことであるからして、是は革命にあらずして矢張り漸進でなければならない筈である。それ故に、ラッサールは「科學と勞働者」(Wissenschaft und Arbeiter)の中に於いて、佛蘭西の革命三〇年の革命、四八年の革命等を歴史的に論じて來て、最後の結論として、我々は革命に對して何もさう怖がることも、心配することもない、革命は自然にして起り自然に生じて行くものである、と論じて、改命(レヴォルム)と革命(レヴォルチオン)と云ふことをはつきり區別し、唯新しきものが古きものに代つて行く、代つて行つてもそこに何等の原理(プリンシプル)の變化と云ふものがないのが之が改命であり、之に反して矢張り新しきものが古きものに代つて行くことであるけれども、其新しきものと古きものとの兩方の共同生活の原理が變つて仕舞ふのが革命であるとして、其意味の革命は決して恐るゝことも何もない、たゞ革命は自然に生じ自然に現はれるもので、革命を拵へるとか、革命を起すとか云ふことは全く馬鹿氣たことである、と云ふことを述べて居る。といふのは矢張り助産婦的の考で、時の自然の經過を待たねば新しき原理が形成されて來ないものである、新しき原理が形成されて來ない時に無理に革命を起さうとか現はさうとか云ふやうなことをするのは馬鹿氣たことである、といふ意味に於いてラッサールは唯自然の經過と云ふことを以て革命を說いて居るのである。而してマルクスの助産婦の考がどこ迄か徹底されゝば矢張りラッサールのやうな考にならざるを得ない譯である。從つてマルクス及びレーニンが革命を謳歌して革命でなければ彼等の主義を實現する事が出來ないと云ふやうに言ふのは、彼等の全體の體系から考へて自家撞着の考であると觀なければならないやうに思はれるのである。

扨、又現代のブルジョア國家と云ふものは自然に破れて、理想の社會に變つて行く譯であるが、其理想の社會へ至る間に矢張り暫くは無產者が政治的權力を掌握して、之まで權力を握つて居つたブルジョア階級を抑へ付けて行かなければならぬとレーニンは說いて居る。この抑へ付けて行く間がレーニンの所謂過渡的國家で

ある。過渡的國家の間もそれが國家である限りは矢張り壓制とか壓迫とか云ふ事はなくてはならない譯のものである。其場合には壓迫する者は誰であるか、壓迫される者は誰であるかといへば、壓迫する者は言ふ迄もなく其中で政治的權力を握つて居るプロレタリアの連中であり、壓迫される者は今迄國家の權力を握つて居つたブルジョア階級である。併し斯くの如くにして壓迫と云ふことがあるのだけれども、プロレタリアの數は之をブルジョアの數に比べて見れば遙かに〳〵多數である。それ故にプロレタリアがブルジョアを抑へ付けて行くと云ふのは、是は多數が少數に對する壓迫であつて、少數者が多數に加へる所の壓迫ではない。之を現代のブルジョア國家と比較して見ると、現代のブルジョア國家に於いては少數なるブルジョアが多數のプロレタリアを壓迫して居る、即ち少數を以て多數を壓迫して居るのである。それ故レーニン等は所謂デモクラシー派を許して、彼等はデモクラシー〳〵と言ふけれども、實は今日のデモクラシーは眞のデモクラシーでないと云ふことに氣が付かないで居るのだ。即ち今日は少數ブルジョアが多數プロレタリアを壓迫して居るのであるからして、此社會に於ける所謂デモクラシーと



云ふのは實はブルジョア・デモクラシー或は少數者のオルガニチイ・デモクラシーであつて眞のデモクラシーではない。我々の過渡國家に於けるプロレタリア獨裁（ディクテーターシップ）と云ふ社會に於いては、多數の少數に對する壓迫であるが故に、名は獨裁であるけれども、實はデモクラシーである。我々の獨裁と云ふものとデモクラシーと云ふものとは、言葉は違ふけれども其內容に於いては實は同じものである、と云ふやうに極論して居るのである。之に對してカウツキーは、それは間違つて居る、レーニンの樣な思想であるならばそれは國家を粉碎（フエルブレツヘン）するものであつて、決して國家を克服（エルオーベルン）するものではない。成る程マルクスは折々破壞（ツエルブレツヘン）しなくてはならぬと云ふことを言ふけれども、併しながらそのマルクスの破壞と云ふ言葉は文字通りに解釋すべきものでないと論じてゐる。即ち、前に述べた如くに所謂マルキシストの間にも國家は是非とも立てゝ行かなければならぬものであると云ふ考が段々出て來て居るのであつて、カウツキーなども其一人であるからして、國家は破壞してどうなる、矢張り我々はどこ迄も國家を存續させて行かなければならないもので、我々は唯今日の官僚的な軍國的な國家を克服して、さうして我等の國家を本當の

デモクラシーの國家にしさへすれば宜いのである、だからレーニンの如き考へ方は全くマルクスの考を履違へて居る所のものである、と言つてレーニンの考を駁して居るのである。

所がレーニンはカウツキーを彼とパンネコックとの論爭に關して非難して居る。カウツキーとパンネコックとの間の論爭は、マルクス主義は國家を否認する廣義(ワイダーセンス)のアナーキズムであるかどうかと云ふ事に就いての論爭であつて、カウツキーは自分の立場から、マルキシズムは決して廣義のアナーキズム卽ち國家の存在を否認する樣な說ではない、所謂アナーキズムと云ふものとマルキシズムとは斯くの如く異つて居るものであると言つて、それ等の差違を三點擧げ、マルキシズムはアナーキズムでないと云ふことでパンネコックに對して居る。先づカウツキーが指摘したマルクス主義とアナーキズムとの違ひを云ふと、マルキシズムの方は勿論國家を全然排除して仕舞ふことを目的として居るのは言ふ迄もない、併しながら、社會主義革命を起して、其結果として國家(シュタート)を克服して、階級を排除(ベザイチイグン)して仕舞はなければならぬと云ふことを論じて居るものである、然るにアナーキズムは之



に對して、さう云ふ社會革新を起して、段々と國家を排除して行かうと云ふのではなく、今直ちに何等の條件なしに國家を全然拔取つて仕舞ふと云ふことを主張して居るものである、それが一點。それから第二點は、プロレタリアが國家の權力を得た後に於いては、今日の國家の機關を全然壞して仕舞はなければならぬが、併しながら其代りに嘗て彼の巴里で試みられた所の手本に從つて勞働者を武裝させ、全然新しい國家機關を入れて仕舞はなければならないものであると云ふことを唱へるのがマルキシズムの考へ方なのであるが、アナーキズムはそれに對して國家機關を壞して仕舞つた後に、勞働者をどうすれば宜いかと云ふ考を少しも有つてゐないことである。卽ち彼等は如何に彼等が獲得せる政治的權力を利用すれば宜いかと云ふことに就いては何等の考もないのである。更に、マルキシズムは、現在の國家を出來るだけ利用してプロレタリアをして將來の革命に對する準備をなさしめなければならないと云ふことを說いて居るものであるけれども、アナーキズムの方はそれを拒絕して仕舞つて居ることがその第三點である。卽ちカウツキーは此三點を擧げて、マルキシズムは決してアナーキズムではない、と說い

てパンネコックに對して居るのである。所がレーニンは之に對して、それはカウツキーの誤解であつて、パンネコックが言ふが如くにどこ迄も革命で、又無產者の獨裁で行かなければならないものであると主張し、パンコネックの說の方を正しいとして居る。さう云ふ點から見てもレーニンは革命を謳歌し、無產者の獨裁と云ふ考を取つて而も自分がマルキシズムの正當なる繼承者であると云ふ事の考を有つて居つた、と云ふことを觀ることが出來るのである。

## 六　將來の社會

以上述べた如くレーニンは過渡的國家と云ふ事を說いて居る。而して苟くも國家がある限りは、それがどんな國家であるにしても、そこに必ず壓制とか壓迫とか云ふものがなければならないものであつて、國家が全然なくなつて仕舞つた時、そこに始めて眞の自由を語ることが出來ると云ふことを繰返し〳〵述べて居るのである。而もレーニンがそれを說く時には屢々エンゲルスの議論を引證(レフアー)して居るのである。卽ちエンゲルスも矢張り同じやうに國家の存在する限りは眞の



自由は語ることは出來ない、國家と云ふものを全然排除することに依つて始めて眞の自由を語る事が出來ると云ふ意味の言葉を述べて居るのである。卽ちレーニンにしてもエンゲルスにしても國家は過渡的國家に至つてやゝ理想的の國家になつた、しかしそれはまだ所謂眞に自由なる社會國家ではない、眞に自由なる社會は次に現はれて來る理想的社會である、と考へてゐるのである。然らばマルクスはそれに就いてどう考へて居るかと言ふと、マルクスも矢張り理想の社會と云ふものは何等の干涉とか壓迫とか抑制とか云ふことのない自由の社會であると云ふやうに言つて、其理想社會を Verein der freien Menschen と云ふ言葉を以て現はして居る。卽ち自由なる人間の結合(フエライン)、之が我々の將にあるべき共同生存の形であると云ふやうに說いて居るのである。Verein der freien Menschen と云ふ言葉だけ聽くと新カント派の Gemeinschaft der freien Menschen が人間の理想であると云ふのと甚だ似て居るが、併しながら是はマルクスの意味とは甚だしく違つて居るのである。自由と言ひ結合と云ふことを非常に喧しく言ふことはマルクスに於いても同樣である。しかしながらマルクス及びマルクス主義は唯物論哲學の上に立つて居る

ものであり、物質(マテリー)が唯一の實在であると云ふことを主張する世界觀を有つて居るものである。而して其物質と云ふものは言ふまでもなく常に因果の理法に依つて動かされて居るもので、そこに何等此因果の理法と云ふことに違つた意味に於いての自由と云ふことがあり得ることは出來ないものである。從つて彼等が自由と言ふ時には、それは其因果の理法と矛盾しない意味に於いての自由なのである。エンゲルスは彼の「アンチ・デューリング」(Anti-Dühring)(一九二四年版)の中に於いて自由の意味を說き(一一一頁、一一二頁)、必然性(ノートウエンディグケイト)と觀るのが自由であると云ふ說明を與へて居る。總て物は必然であると言ふのである。而してもう一つの意味は意志の自由で、其必然の智識を澤山有つて居つて、其必然の智識に依つて事を誤らないやうに判斷して行くと云ふことが意志の自由と云ふことであると定義して居る。それであるから此エンゲルスの說を他の言葉で飜譯して考へて見れば、自由とは必然が必然の通りに行はれて行くことであると言ふのである。例へば物體を眞空の中に於いて落した場合には、其物體は自由に落下すると言はれる、或は庭園の中に生えてゐる樹木と原野に生えて居る樹木とを比べて見ると、庭園の中にある所の樹木は植木屋の手に依つて或は枝を切られたり、或は矯められたり、色々の事をされるのである。從つてそれは自由に成長したものではない。之に反して原野に生えて居る所のものは其樹木の本質のある通り、又其周圍の事情に適應する通りに其儘に成長發達して行つて居るのであるから、それは自由に成長發達して居るものである。さう云ふやうに眞空に於いて物の落下するのは是は言ふ迄もなく必然である。其必然が必然の通りに何等外物に妨げられないで必然の通りに落下した場合にそれは自由である。また原野に生えて居る樹木は其樹木の必然の通りに成長發達して行くからしてそれは自由であると云ふ意味になるのである。更に他の方面から解釋すれば自由は積極的(ポジティヴ)と消極的(ネガティヴ)との二つの解釋が出來るのである。消極的の方面から之を解釋すれば或る物が何等外のものに依つて其活動が妨げられない時之が自由である。之を積極的に言へば其物が其物のある通りに活躍した時それは自由である。斯う云ふ意味になるとエンゲルスの說を解釋することが出來る譯である。

アドラー(M. Adler)は「因果關係と目的論」(Kausalität und Teleologie)に於いて、マルクス

主義の因果關係と目的論と云ふものは何等矛盾するものでないと云ふ風に西南學派の立場からして之を巧く結付けて居るのであるが、それは詰り今のエンゲルスの說いて居るやうな自由をカントの自由へ結付けて行かうとする爲に言つたのであつて、エンゲルスの說明は今述べたやうなものである。偖て彼等唯物論の立場に立つて居る自由の意味は今述べたやうなものであるとして、更に唯物論の哲學に立つて居るのであるから、言ふ迄もなく、人間も亦物質より成立つて居る所のものである、否人間の本質は物質である、と言はなければならない譯である。それ故にマルクスは五九年の「經濟學批判」(Zur Kritik der politischen Oekonomie)の序文の中に於いて存在(ザイン)を決定するものは意識(ベウストザイン)ではない、寧ろ意識を決定するものは存在であると云ふことを述べて居る。唯物論の立場に立つて居る者としては當然の議論であると言はなければならない譯である。從つて人間の本質(エッセンス)を形作るものは精神とか意志とか云ふものではなくして全く身體(ケルパー)であると言はなければならない譯である。若し身體が人間の本質であるとしたならば、人間の本質に從ふ根本動欲と云ふものは何であるかと言へば感覺に基けるものであると言はなけれ



ばならぬ。卽ち感覺に基ける諸々の衝動であるとか言ふやうなものが本質に從へる根本動欲であると言はなければならない。それが人間の根本動欲で、其ものの本質のある通りに活躍することが自由である。さうしてそれが外のものに依つて妨げられないことが自由であるとしたならば、其感覺的の根本動欲の起るまに〳〵滿足させると云ふことが積極的の自由である。さうして其根本動欲が起つた場合に何等外のものから妨げられないと云ふことが消極的の自由であると言はなければならない譯である。是は彼等の論から當然生じて來る所の論理的歸結であるが、偖てさう云ふ意味の自由と云ふものは我々が考へて居る所の人間の自由と云ふものであるかどうかと云ふことを研究して見たいと思ふ。

私は玆にカントの自由を引證して見たいと思ふのである。カントの自由は私の觀た限りに於いては三つの意味がある。第一は超越的の自由であつて、第二は自律としての自由、第三は選擇の自由である。第三はどうも今では人が說いて居らぬので、從つて多少誤解があり、私の說を人が誤解して居るやうであるが、兎に角斯う云ふやうな三つの意味があると思ふ。第一の超越的自由と言ふのは、唯カン

ト以前の哲學に現はれて居つたやうな第一原因と云ふやうな意味のものと理解されるのであつて、或は出來事を惹起す所のものと云ふやうにも理解されるのである。單にそれだけに解釋すれば何等道德の方に關係のない樣に見えるのであるが、併しながら此超越的自由を第二批判の中に出て來る人格（パルソーン）と結付けて考へて見ると、人格が所謂第一原因として自己自身を開展して行くものであつて、人格が自己自身を開展して行く所に第一批判の超越的自由が成立つことになる。人格が自己自身を開展して行くのであると云ふやうに見ると、それは所謂福德一致を目的として永遠に活動して行つて居るものである。それが超越的自由とすると福德一致を目的として永遠に活動して行くと云ふことは、矢張り惡を亡して段々善に變へて行くと云ふやうになるのである。それから第二の自律としての自由と云ふのは、若し形式的に言へば自己の打立てる法則に依つて自己を律する、卽ち自律である。併しながら之を內容的に考へて見ると、自己を律する所の立法である。法則は常に善き法則でなければならない筈である、從つて善を以て惡を克服して行くと云ふことが之が自己立法の自由の意味であると見なければならぬ。

選擇の自由も善惡を選ぶ、善を選んで惡を棄てると云ふことが選擇の自由であると云ふことに觀たのである。私は斯くの如くカントの自由と云ふものを理解することに依つて、カントの自由と言ふ時は、之を道德の方から考へた場合、善の惡に對する自由と云ふことであると解釋したいのである。卽ち善其ものが惡に依つて妨げられない、惡に依つて其活動を停止されないと云ふことが、之が軈てカントの言ふ意味の自由である、斯う云ふやうに觀たいのである。善が惡の爲に妨げられないと言ふ所の自由は、玆に言ふ所謂倫理的の自由である。之に反して曩に擧げた眞空の中に於いて物を落した場合には自由に落下するとか、或は原野に生えて居る所の樹木は自然に成長するとかいふ場合の自由は、カントに於いては石を投げた時石が外物に依つて妨げられなかつたならば、投げられた石は理想的の拋物線を描いて地上に落下すると云ふ例と、掛時計の彈條（ゼンマイ）を卷いて置けば外の物が妨げなかつたならば彈條が振子に利いて居る限り時計の針は動いて居るものであると云ふ二つの例を擧げてあつて、さう云ふ自由は之を自由と云ふけれども、心理學的若しくは機械學的自由であると言はれて居る。此心理學的機械學的自由

と云ふのは是はカントが名付けた名である。そこで前の感覺的の衝動、本能と云ふものを起るまに〳〵滿足させる、さうして何等他のものに妨げられないと云ふが如きことは、是は唯今述べたカントの所謂心理學的機械學的の自由である、眞の倫理學的自由ではないと言はなければならぬのである。而して彼等の消極的の意味に言はせると、外の物に依つて妨げられないと云ふ場合には自由であると言ふのであるが、其外の物と云ふものは彼等の意味からすれば物質が人間の本質を形作つて居るものであるから、人で言へば空間に依つて隔つたる他の個人が、我ならぬ他の人である。卽ち彼等の他のものに依つて妨げられないと云ふことは、それ故空間に依つて隔つて居る他人に依つて自分の感覺的根本衝動の活動が妨げられないと云ふことが自由である、といふ意味になるのである。斯くの如きことは國家や社會其ものゝ獨自の存在を認めて居ないのであつて、彼等の立場からすればそれ等の國家や社會と云ふものは、全く空間的に隔たれる所の個人の集りと云ふことになつて居る譯である。卽ち彼等の社會觀と云ふものは原子論的の觀方であらねばならぬ。原子論は既に十八世紀の終りに於いて倒れて仕舞つた所



のものであつて、若し今日彼等が原子論（アトミズム）を主張するならば、それは時代錯誤的（アナクロニスチック）な考へ方であると言はなければならぬのである。

然るに今カントの自由に依據（レツアー）して、カントのやうな自由は之を倫理的の自由と云ふといふことを述べたのであるが、其倫理的自由の善が惡に勝つたと云ふ時の善、卽ちカントから言へば實踐理性或は純粹意志と云ふものであるが、此の實踐理性或は純粹意志と云ふやうなものは是は感覺的に隔つてゐる又空間に依つて區別されたる所の個人個人に依つて異るものではなくして、空間に依つて隔つてゐる意味の個人を超越して居る所のものであつて、卽ち普遍的なものである。それ故にカントの自由の意味は惡が善に從ふと云ふこと、感覺的の個人的のものが實踐理性とか或は純粹理性とか言はれる所の超個人的のものに服從して行くと云ふことでなければならぬ。而して其超個人的の純粹意志とか或は實踐理性とか云ふものが具體化されたものが國家であると云ふやうに考へて見た場合には、其個人の感覺的の慾望、根本衝動を國家の權威或は國家の權威の發動である所の規律と云ふものに服從させる所の倫理的の自由、卽ち道德的の自由があると言はな

ければならぬのである。從つて彼等は消極的意味に於いて我ならぬ外のものに依つて妨げられない時之が自由であると云ふのであるけれども、其我ならぬ外のものと云ふのは彼等の唯物論の立場から述べた通り隔つてゐる他の個人である が、理想的に考へた場合には我ならぬ外のものと云ふものは自分の心の中にも澤山ある譯である。卽ち疑惑の考へ、邪念・妄想と言ふやうなものが我々の心の中に澤山あるのである。我と非我との差別と云ふものは彼等が考へたやうに空間に依つて妨げられるものではなくして、自分の心の中にも我と非我とが存在して居る。心の中の此我は純粹意志とか實踐理性とか言はれるもので、非我と云ふのは所謂感覺的の根本衝動と言はれるものであるからして、外部のものに依つて妨げられないと云ふことも是等の意味の自由では理解の出來ないことであるやうに思ふのである。

――昭和三年八月十日――十四日文部省思想問題講習會講演――

# 五　マルクス主義價値論の倫理的批判

## 一　餘剩價値論の要旨

エンゲルスの著書「空想的社會主義より科學的社會主義へ」はアンティ・デューリングの中から或る部分を拔いて、一つのパンフレットとしたものである。是は最初佛蘭西語で書かれたものであるが後に獨譯が出來た。此書でエンゲルスは、唯物史觀と餘剩價値論とはマルクスの二大發見である、而して唯物史觀はマルクス社會主義の方法論を規定して居るものであり、餘剩價値論はマルクス社會主義の根本內容を形成して居るものであるといひ、更に議論を進めて、マルクスは餘剩價値論に依つて搾取・被搾取と云ふ關係を明かにし、資本が如何にして起つて來たものか、從つて如何なる性質を有つて居るものであるかと云ふことを明かにし、それによつて現在の資本主義的經濟組織の秘密を曝露することが出來たと言つて、極力

マルクスの唯物史觀と餘剰價値論の二つをば稱讃し切つて居るのである。更にエンゲルスはアンティ・デューリングの中に於いて、或は此餘剰價値論は實にマルクスの仕事の中で劃期的のものであると言つて稱讃し、或は餘剰價値論に依つて現在の社會のクリスタール・ケルンの如何なるものなるやを現はすことが出來たと言つて到る處に餘剰價値論を讃美して居る。而して彼自身も「資本論」第四版第一卷一三八頁に於いて此餘剰價値に依つて始めて餘剰生産が生ずるやうになつて來る、餘剰生産が生ずることに依つて次第に資本が出來て行くことの秘密が全く明かにされたのであると言つて居る。之を以て見ても此餘剰價値論はマルクス社會主義に於いて主要な地位を占めて居るものであると觀ることが出來るのである。

然らば其餘剰價値論とは如何なることであるか。餘剰價値論だけはマルクスの書物の中に極めて明白に徹底的に論ぜられて居る。卽ち彼は資本論の第一卷に可なり大部分を費して餘剰價値のことを說いて居るのである。其中にある所の思想を搔摘んで要領だけを述べて見ると、彼は先づ商品とは個人の或る物的欲



求を充すことの出來る性質を有つて居る物といふやうに之を定義し、更に進んで總ての商品は皆一定の使用價値と交換價値の二つを有つて居るものであると言ふ。謂ふ所の使用價値とは商品の性質に依つて人間の或る需要を充す所のものを言ふのである。水には水の性質があり、鹽には鹽の性質がある。水の性質は我々人間の要求のあるものを充す、又鹽の性質は我々人間の要求のあるものを充すことが出來るのである。それ故に其意味に於いて、水なり鹽なりは總て使用價値を有つて居ると云ふ風に說明されてあるのである。交換價値とは一つの商品に依つて計られたる他の商品の値打である。牛と米と換へるに際して、牛一頭に依つて米何石が計られた場合、米何石は牛一頭の交換價値を有つて居る、牛一頭は米何石の交換價値を有つて居ると云ふやうに稱へて居るのである。以上使用價値、交換價値の兩者の中で餘剰價値論に取つて大切なのは交換價値である。偖て一つの商品と他の一つの商品とが交換され得る爲には其處に何等か共通なものがなければならない譯である。使用價値は皆商品其ものゝ特殊の性質に依るものであるが故に、使用價値の如何に依つて交換價値に置換へることは出來ない。性

質の違つたものでは彼と是とを交換させる基礎となることは出來ない。彼と是とを交換させる爲には彼と是とには何等か共通なものがあつて、其共通なものをメジュアメントとして計ることに依つて始めて交換することが出來る譯である。マルクスは其共通なものをば勞働であると考へたのである。

勞働と云つても或る鐵工場に働いて居る勞働と、紡績工場に働いて居る所の勞働とは、若し其性質を言へば必ずしも同一ではない。けれども鐵を扱ふと云ふことを抽象し、糸を紡ぐと云ふ作業を抽象して、卽ち內容を抽象して殘つたものだけを見る時には、內容を離れた所の勞働（アルバイト）が殘つて來るのである。內容を離れた所の勞働は、それ故に鐵工場の勞働も紡績工場の勞働も抽象された勞働其ものとしては全く同一なものであると見なければならぬ。卽ち各商品に共通なる所のものは勞働である、內容から抽象された勞働である。然らば內容から抽象された所の勞働を、如何にして比較するかと云へば、それは分量に依つて比較するのである。分量に依つて比較するとは、然らば如何なることであるかと云へば、働く時間に依つて其分量を計量（メジュアー）することが出來る故に、勞働の分量は勞働時間に依つて計られ



ると云ふことになるのである。從つて各商品に共通なものは其勞働時間に依つて計られ抽象された勞働其ものであると云ふことになる。併し謂ふ所の勞働時間と云ふことに就いても、同じ八時間勞働でありながら、極く充實した八時間もあり、極く懶けて居つた空虛な八時間もあるといふことも考へられ得るのであるし、又其技術に能く秀でゝ居る八時間と云ふこともあり、技術に極く不熟練であると云ふ八時間もある譯である。それ故に勞働の時間を精確にはかつて見ても、唯單に八時間と云ふだけでは勞働の分量を表はすことが出來ないやうに考へられる譯である。マルクスは勞働時間と云ふことを考へた時、矢張り其問題に逢着し其難點に思ひ及んで居るのである。彼は其問題に就いては、如何にも共通りである、併しながら社會的に必要なる平均の勞働時間と云ふものを我々は考へることが出來る、社會的に必要なる所の平均（ドゥルヒシュニット）の勞働時間と云ふものは考へられるのである、卽ち熟練と言つても熟練に程度があり、不熟練に程度がある、それから勤勉と言つても怠慢と言つても各々其程度がある、其勤勉とか怠慢とか云ふことにも、此物を作り出すのに社會的に必要なる所の平均の時間なるものが考へられるのであ

る、であるから社會的に廣く之を見た場合には、かゝる特殊の場合に於けるやうな難點を超越して、勞働時間と云ふものを定めることが出來る、卽ち社會的に必要なる平均の勞働時間なるものを定めることが出來ると言つて居るのである。斯樣にマルクスは社會的に必要な平均の勞働時間なるものを考へて、商品をそれに依つて計量(メジュアー)することが出來るとした。卽ち勞働時間の單位を一〇とか或は二〇とか云ふことに依つて計量(メジュアー)すれば、一〇のものと二〇のものとは一〇のものを二つと二〇のものと換へて、それで損もなければ得もなく、交換と云ふことが出來ると考へたのである。斯くの如くにして商品は交換に依つて流通することが出來ると言ふのである。

共商品の流通と云ふのにマルクスは二樣の型(タイプ)を提出してゐる。商品を金に換へると云ふことは賣ると云ふこと(W-G)であり、又金を商品に換へると云ふことは買ふと云ふこと(G-W)なのである。卽ち百姓が米を金に換へて、其金で着物を買ふと云ふやうなのが一つ、これを纏めてW-G-Wが一つの型(タイプ)である。それから今一つの型(タイプ)は一旦買つた米を更に金に換へると云ふG-W-Gの關係である。第一の流通の方は商品の爲の流通である。自分は實際あり餘る所の米を持つて居るけれども衣服がないからして、あり餘る米を賣つて衣服を買ふと云ふのであるからして、是は商品の爲の流通である。然るに第二の方は先づ金を持つて居る者があつて、而して米を買ふて其米を更に金に換へる、前の金がG後の金がG′であればG′=G+AG(AGは剩餘價値)で從つて同じことでなくして幾らか儲けて賣らうと云ふのであるから、是は商品の爲の流通ではなくして、寧ろ利得の爲の流通であると云ふことになつて來る。この第二のG-W-Gの流通の場合に於いては、或る特殊の商品が問題になるのである。米着物等と云ふ物は價値を形成することが出來ないが、或る特殊な商品は價値を形成することが出來るのである。それはかの勞働力である。金を持つて居る所の人は勞働力なる特殊の商品を買つて其勞働力なる特殊の商品を賣ることに依つて更に金に換へる。然るに今述べた通り勞働力なる商品は特殊の商品で價値を形成する所のものであるからして、そこで、後で得た所の金は最初出した所の金に或るものゝ加はつた金になつて來る。この加はつた或るものが謂ふ所の剩餘價値である。以上は「資本論」によつて說明したのである。

以下はエンゲルスのアンティ・デューリングから要約するが、エンゲルスはその二一七頁二一八頁に於いてマルクスの剰餘價値論を極めて簡單に說いて居る。彼に依ると、勞働者は一定の賃銀を受取つて自分の勞働力を賣つて仕舞ふ。例へば三圓の賃銀で自分の勞働力を十二時間に對して賣つて仕舞ふ。今三圓の金を得るのには六時間の勞働力で十分だとする。さうして此六時間と云ふのは此處で言ふ必要勞働時間で、六時間だけはどうしても働かなければ一人の勞働者が三圓の金を得ることは出來ないのである。卽ち三圓の金を得ることが出來なければ自分及び自分の妻子の生活を遂げて行くことが出來ないのであるから、其六時間といふものは必要勞働時間なのである。然るに實際はこの三圓を十二時間に依つて得るのであるから、六時間働いた上に尙ほ六時間働かなければならぬ。此後の六時間なるものは贏て剩餘勞働時間で、この六時間の勞働から更に三圓の金が出て來る譯であるから、此後の三圓は餘剩價値である。何故餘剩價値であるかといへば、勞働者から言へば、報酬を取らずして働いたのであるし、金を持つて居る資本家から言へば何等資本を卸さずして唯儲けたからである。卽ち之が餘剩價値



として生れて來るものである。と言ふのがエンゲルスの中に見えて居る說明である。之がマルクス及びマルクス主義の餘剩價値論の要旨であるが、尙色々の點に就いて今一度述べる機會がある。

## 二　餘剩價値論と勞働說

マルクス及びマルキシストは此餘剩勞働時間、從つて餘剩勞働價値を、働いた所の勞働者に與へずして、働かない所の資本家が取ると云ふことはそれは不當であり、不正であるからして不當不正な分配の仕方を改めて行かなければならない、と云ふのである。然らば何故働いた所の勞働者に與へないで、資本家自身が取ると云ふことは不當であり不正であるかと云へば、その根柢には、凡そ富と云ふものは天が我々人類に等しく與へて居る所のもので誰の物と云ふことはある譯ではない、唯勞働を加へることに依つてそれが人間に利用され得る價値になるのであり、從つてそれが自分の物と云ふことになるのである、人間に利用され得る價値になると云ふことは、贏て我々に取つて財貨(ゼユーター)になると云ふことである、故に財貨(ゼユーター)なるも

のは勞働を天然物に加へることに依つて、我々人間の需要に應ずることが出來るやうにした者のみが之を取るべき筈である、卽ち勞働して得たる結果は總て勞働した其人が取るべきであると云ふことが豫想されてゐるのである。勞働して得た結果は總て之を作出した人に歸すべきであると云ふ說は勞働說と言はれて居る。それ故に餘剩價値論を吟味するのには、餘剩價値論と勞働說との關係を見て行かなければならぬと思ふ。之に就いて、ツガン・バラノフスキー(M.Tugan Baranowky)が彼の Theoretische Grundlagen des Marxismus の中に於いて、餘剩價値論を論述するに勞働說を以てするのは、見當違ひの議論である、勞働說を以てマルクスの餘剩價値論を批判するのは正當なる見點に觸れて居るものでないと云ふことを論じて居る。併しながら私はバラノフスキーがさう言つて居るに拘らず、今述べた不正とか不當とか云ふことは何處に在るかと云ふことを考へる時、どうしても勞働說に歸着せざるを得ないのであるからして、矢張り餘剩價値論と勞働說との關係を考へて見なければならぬと思ふ。謂ふ所の勞働說は、決してマルクス其人の始めて說出した說ではなくして、旣にアダム・スミスもリカードも正統派(オルソドックス)の經濟學を承繼いで



英吉利の社會主義的の經濟學を立てた所のタムソン、ブレーの如きも矢張り同じやうに說いて居るのである。佛蘭西のブルードンの如きも矢張り同じやうに說いて居るのであつて、決してマルクスが始めて說いたのではないのである。併しながら私は歷史上の先取權(プリオリテート)が誰にあるかと云ふやうなことは此處では別に問題にしないで、直ちに勞働說と云ふものが果して正しい考へ方であるかどうかと云ふことの批判に這入つて行きたいと思ふ。

勞働說が正しい說であるかどうかと云ふことに就いては、Ryan の Distributive Justice に於いて相當論じて居るのであるが、こゝでは特に W. Willoghby の Social Justice と云ふ書物を紹介しようと思ふ。彼は其中に特に一章を費して勞働說を論じて居るが、其ウィルロービイの說いて居る所を大體述べて見よう。第一には富の生產には單に勞働のみが必要なものではなくして、土地も必要であり資本も必要であると云ふことは多く論を費さずして明かなことである。所謂社會主義者と雖も其明白なる事實を無視することは出來ない。必ずしも彼等も無視して居るのではない。卽ち生產には土地が必要であることは言ふ迄もないが、資本も所謂固定資本

とか流動資本とか云ふものがなければ生産が出來ないと云ふことも明である。そこで其明白なる事實をば彼等社會主義者と雖も無視することは出來ないのであるが、唯彼等社會主義者は資本と土地とは生産に必要であるけれども、所謂資本家が利子を取り、所謂地主が地代を取ると云ふことは分らないと云ふだけのことである。斯う云ふ風に彼等の論はなつて來なければならぬ譯である。かくウィルローピイは論じて、從つて勞働説の當不當を吟味するのには、先づ第一に資本家が利息を取ると云ふことは正か不正か、地主が地代を收得すると云ふことは正か不正かと云ふことを檢討して行かなければならないと論ずる。そこでウィルローピイは色々の説を擧げて、彼の有名な Röhm-Bawerk の「資本と利息」(Kapital und Zins)を引證し、「之に關しては色々の説があるがそれらは利息と地代とを眞に説明するものではない。唯時が經過すると云ふことが地主が地代を取り、資本家が利息を取ると云ふことの理由になるとする外考へられない。卽ち正月元日の百圓は十二月三十一日の百五圓と同じ價値を有つものであると云ふこと以外に考へられない」と云ふ彼の結論を取つて、利息と地代との權利付(ジヤスチフイケイション)けを試みて居るのである。



ウィルローピイは第二に、自分は自分のものであると云ふ説の誤謬を指摘して居る。自分は自分のものであると云ふのはもう既にロックなどに根差して居る所の思想である。自分の身體は總て皆自分に屬して居るものであると言はなければならぬ。若し自分の身體は自分のものであるならば、其の身體の活動に依つて生ずる勞働も矢張り自分のものであると觀なければならぬ譯である。自分の勞働が自分のものであるならば、其勞働の結果も亦自分のものであると言はなければならない譯である。さう云ふ理論からして勞働して得たる所の結果は全部勞働した者が之を取るべきであると云ふ Das Recht des vollen Arbeitsertrages 勞果全收權なる思想が導き出されるのである。それに對してウィルローピイはハックスレーの説を引いて云ふ。自分は自分のものであると云ふこと自體が既に間違つて居る。自分は親から享けた者で、親なくしては自分はない、然らば自分は自分のものであるか親のものであるかゞ分らない。家族(ファミリー)なくして自分と云ふものがあることは出來ない、又社會なくして自分があることは出來ない。然らば自分は家族のものであるか社會のものであるか自分のものであるかは分らない譯である。とすれば

自分のものは自分のものであると云ふやうなことは全く誤れる考へ方であると言はなければならぬ。從つて自分の身體で働く所の勞働は自分のものであると云ふ說も亦誤つて居る。勞働をする時にはそれ〴〵道具も必要である、機械もなくてはならないものである。謂ふ所の道具、機械は自分が之を拵へたものでなくして他人が拵へて自分に與へて呉れた所のものである。然らば他人の作つて呉れた道具、機械を以て働く其勞働は、矢張り總て自分のものであると云ふことは不當な考へ方であると言はなければならぬ。加之、勞働をする時には勞働をする期間自分の生活を支へて行くだけの資料がなければならぬ。其食料品も矢張り他人の作つて呉れたものであるし、又自分が勞働をする場合にはそれ〴〵原料が必要になつて來るのである。其原料も他人が與へて呉れた所のものである。從つて勞働が可能であると云ふことは社會の人々が自分の爲に皆努力して共同して働いて居つて呉れると云ふことを豫想して居なければならぬのである。故に個人の勞働は總て個人のものであると云ふ考へ方も誤れるものであると言はなければならぬ譯である。從つて勞働の結果は總て勞働した個人が之を所得すべき



であると云ふ所謂勞働說は誤つて居るのである。

第三にウィルロービイは國家の法制及び其作用、社會の組織に就いて言つて居る。今日生產が可能であるのは國家が其法制を立て、其法制を執行して行く作用をするからである。若し國家に一定の法制がなく、從つて其作用がなくして、唯彼等强い者が勝手なことをし、亂暴な者が勝手なことをする世の中であつたならば、そこに勞働とか生產とか云ふものがあらう筈がないからして、勞働をなし、從つて生產をすると云ふことは、總ての國家が一定の法制を立て、其作用を逞うして居ることを豫想しなければならない譯である。同樣に又諸の社會上の機構（オルガニゼーション）諸の分業があればこそ、人々は皆一定の勞働をなし、生產をすることが出來るのである。さう云ふやうな組織が十分行はれない所には十分な勞働、十分な生產があり得ることは出來ない譯である。それ故にその意味に於ける勞働說と云ふものは、國家の法制及び其作用、社會の組織と云ふものを無視した所の誤れる見解であると言はなければならぬのである。

第四に——尤も是はウィルロービイも餘り力說して居らない點であるが、私は矢張

り斯う云ふ事も考へなければならぬ事であると思ふ――勞働說は智能の作用を無視した所の見解である。其智能の作用とは如何なることであるかと云へば、此前も申した通りに今日の工場生產乃至農業生產に於いても同じであるが、其農場や工場等に働いて居る所の技手、技師の働に依ることが甚だ大きいのである。又其技手、技師等は最新の機械を應用して、出來るだけ作業を少くして結果を餘計擧げようと試みてゐるのであるが、最新の進步した機械は矢張り智能の結晶として現れたものであると見なければならぬ譯である。即ち科學の進步、技術の發達と云ふことを豫想しなければならない譯である。今一つ智能の大事なことは所謂能率と云ふことに就いてゞある。工場の組織とか或は設備とか云ふものゝ良いか惡いかに依つて、同じ千人二千人を使つて居る工場でも、能率に於いては甚しき違ひを生じて來る。若し組織、管理等が良くなかつたならば千人が八百人の働きしかしないであらう。若し其組織、管理等が良ければ千人が千五百人の働きもすると云ふやうな譯になつて、例へば彼のフォードの工場の如きは今にも一週五日間一日六時間勞働にしようと言ふやうなことを考へて居るやうに見えるが、それは



必ずしも生產を減ずるものではなくして、作業時間を短くして而も生產は增して行かうと云ふのである。即ちそれだけ能率を高くしようと云ふのであるが、其能率を高くすると云ふことは工場管理、工場經營の如何に依ることで、工場管理、工場經營の如何は總て智能の如何に依ることである。それ故に今日の科學の進步、技術の發達の世界に於いては、殊に此智能の働きと云ふ事が非常に生產上重要なことになつて來て居るのである。然るにマルクスは餘剩價値に就いて「絕對的餘剩價値」と「相對的餘剩價値」とを分けて論じて居るのである。相對的餘剩價値とは、所謂一日の勞働時間が十二時間なら十二時間と云ふものを變へないでさうして機械を使ふとか或は機械の中でも能率の良く擧る機械を使ふとか、或は其工場の管理經營を良くするとか云ふことに依つて所謂必要勞働時間が今まで、頂度六時間なければならなかつたものを、四時間に短縮し、夫によつて得る所の餘剩價値を言ふのである。此相對的餘剩價値は然らば如何なる所から生じて來るかと云ふと、マルクスは、勞働力の能率が段々高まつて行くことに依つて生じて行くものであると說いて居る。從つて相對的餘剩價値は何等勞働力を損するものでもなけ

れば、勞働者共人が損するものでもないと云つて居る。又生産力が高まつて行くのは、工場の組織（オルガニザチオン）を良く整理して、卽ち個々の勞働者の勞働力の管理を良く整へて行く事に依つて生ずるものであるとも言つてゐる。更にマルクスは資本（Kapital）を不變（Konstantes）と可變（Variables）との二つに分けて居るが、相對的餘剩價値はこの不變資本、例へば原料とか機械とか工場とか云ふやうなものゝ良い物を應用することに依つて生ずるものであつて、從つて、彼は相對的餘剩價値を論じた後「資本論」の中に次のやうなダイヤグラムを書いて居るのである。

a—cは一日の勞働時間、

bは必要勞働時間の短縮指標である。良い機械を据付けるとか或は原料を精選するとか或は工場の管理を良くするとか言ふやうなことに依つて必要勞働時間は段々短縮する事が出來る。六時間なら六時間であつたものが五時間、次に四



時間と云ふ風に、段々必要勞働時間が少くなつて餘剩勞働時間が餘計になる。餘剩勞働時間が餘計になることに依つて餘剩價値が餘計になる。卽ち相對的餘剩價値が餘計になると云ふことを說いて居るのである。マルクス自身が既に斯う云ふ事を說いて居る以上は、必要勞働時間が段々と短縮されつゝ、資本は段々に餘計になつて來ると云ふことが生じて來なければならない譯であり、マルクスがさう云ふことを許して居る以上は、矢張り此生産と云ふものには智能と云ふものが非常に必要なものである、否智能が寧ろ生産の重要部分を働くものであると云ふことを、彼マルクス自身が認めて居るものであると言はなければならぬ譯である。若しさうであるならば唯勞働して得たる結果は勞働者自身が全部獲得しなければならぬものであると云ふ議論の誤れることは、明かなることであると言はねばならぬ。

次に第五にはウイローピイは勞働の價値比例を定むることは出來ないと言つて居る。マルクスは勞働と云ふものは、先に述べたやうに、その內容を抽象して仕舞へば、殘る所のものは唯勞働したと云ふ活動性（アクチヴィチー）だけであつて、其活動性（アクチヴィチー）に於いて

は何れの勞働も全く同一の性質のものであるからして、それを單に分量の上だけで換算することが出來ると云つて居るのであるけれども、ウイロービイの言ふ所に依ると、其勞働から內容を抽象して仕舞ふやうなことは到底出來ないことである。內容なしに勞働と云ふことはあり得ないことである。然るに其勞働と云ふものには愉快な勞働もあり不愉快な勞働もある、又極く安んじてやることの出來る勞働もあり、危險な勞働もある、又極く容易な勞働もあれば困難な勞働もある。さう云ふやうな事は勞働其者からは決して抽象して見る事の出來るものではないからして、若しそれ等を勞働其者の中に入れて見たならば勞働の價値及び其比率を定めると云ふ事はどうして出來るか。其處に或る共通のものがなければそれを比較する事は出來ない。のみならず生產と云ふものには間接のものもあり、間接の間接のものもある。直接な物質の生產の勞働と云ふものと、間接な學術の研究であるとか云ふやうなものと、どう云ふ風にして其價値を比較する事が出來るであらうか。斯う云ふ點から考へても勞働說は正しい考へ方ではないとウイロービイは唱へて居るのである。以上は大體ウイロービイの勞働說に對する難點であつて、ウイロービイは尙ほ其外に實際上の難點として色々のものを擧げて居る。例へば國內或は社會內の人々が總て同じやうな勞働をやらうとする、皆が着物の製作に從事する。さう云ふやうな勞働を好んで他の米穀を作るとか、食料品を作るとか、或は家屋を建築すると云ふ方へ廻つて吳れなかつたならば、どうすると言ふやうな事、其他數點の難點を擧げて勞働說の實際的のものでないと云ふことを說いて居る。之が大體ウイロービイの考であるが、之に依つて考へて見ると勞働說と云ふものは頗る不完全な考へ方である、其勞働說を基礎として立てた所の勞果全收權、其勞果全收權に基いた所の餘剩價値論と云ふものも亦不十分不完全なものであると云ふ事は當然の結論として言はれなければならぬのである。

## 三　餘剩價値論の方法・歸結・抽象

第一に餘剩價値論の方法である。先に述べたやうに搾取被搾取といふ秘密は此餘剩價値論に依つて曝露されたと言はれて居るのである。卽ち今日の經濟上の不正不當と云ふものがどうして起つて來るかと云ふ事は、此餘剩價値論に依つ

て分つたとマルクス自身も考へエンゲルスも唱へて居るのである。其言葉を飜譯して考へて見ると、搾取することは要するに資本家が勞働者の勞働の結果を盗むと云ふことに飜譯して宜しい譯である。當時のマルクスは、プルードンの影響を烈しく受けて居つたので斯う云ふやうな考が盛んに猛烈に出たのである。そのプルードンは財産と云ふものは略奪であると云ふことを言つて居る。「財産とは何ぞや」と云ふ著書の中に於いてさう云ふことを說いて居るのであるから、その點から併せ考へて見ても、マルクスの說いて居る搾取る或は吸上げるとか云ふ言葉は、之を盗むと云ふ言葉に飜譯して一向差支ないことゝ思ふ。偖て盗むと云ふ言葉に飜譯して考へて、今日の資本主義經濟組織の不正は、資本家が勞働者の成果を盗む所に存すると言へると見なければならぬ譯であるが、然らば盗むと云ふことは何故惡いか、一體どう云ふことが盗むと云ふことであるか、と云ふことを更に考へて行かなければならぬ譯である。假りにエンゲルスの說に依つて六時間働けば宜いのを、更に十二時間働くのだから、此六時間働いた所のものを資本家が持つて行くのが不正だ、之が不當だとする。それだけの成果を盗んで行くと云ふことを何故不正と言ふかと云ふと、それは當然この六時間も勞働者に歸すべきであるのに、資本家が取つて行くから不正である。斯う云ふのであらうと思ふ。けれども盗むこと自體が惡いとしても、どう云ふことが盗むことであるかと云ふことは、隨分時代に依り社會に依つて異るものである事は、Westermarck が The Origin and Development of Moral Ideas の中に澤山の例を擧げて居るのでもわかる。例へば晝の泥棒は罪がない、夜の泥棒だけを罰する。首尾好く盗み了はせた窃盗は罪がない。まご〳〵して盗みつゝある間に捉つた者だけ罰せられる。或は人の管理に屬して居らないと見ゆるやうな處置をしてあつた物を取ると云ふことは何等罪がない。管理して居つたのが明かな物だけについて罰する、其他色々と雜多な例を古今東西に亘つて列擧してゐる。斯くの如く考へて見ると、どう云ふことが盗むと云ふことであるかと云ふことは、其時代に依つて分けて考へなければならぬ譯である。從つてどう云ふことが盗むことであるかと云ふことは、國家の法律とか社會の慣習とか云ふものを豫想しなければその概念がはつきりしない。斯う云ふものを此社會、此國家に於いては窃盗として論じ、之を罰すると云ふ法律があ

り慣習があつて、そこで盗むと云ふ概念がはつきりして來る譯である。從つて今六時間の餘剩時間を働いたものを、資本家が取つて行くと云ふことは盗みだと言ふならば、それを盗みだと云ふことを認める國家の法律、社會の慣習を豫想しなければならない。さうすればこの正不正と云ふことは唯經濟的(エコノミック)に考へられ得ることでなくして、法律とか或は慣習とか或は道德とか云ふ方面から考へて見なければならぬ譯である。從つてそれが不正である、盗みであると云ふ時には、マルクス及びマルキシストは經濟と云ふ活動の外に、更に法律とか慣習とか云ふものがあることを許して居なければならない筈である。然るに、これは後で述べる筈であるが、彼等マルキシストは所謂唯物史觀の考へ方に依つて、國家社會の基本現象、基本事實は經濟であつて、法律なり道德なり慣習なりと云ふものは其結果として生れて來たものであると云ふ考へを有つて居るのである。即ち經濟・法律・道德等には時間上の前後の關係を付けて見て居るのである。然るに前述の理由に依つて、それは時間上に前後の關係があり得るものでなくして、經濟活動と云ふものと法律・道德・慣習と云ふものとは同時に存在して居なければならないものであるから



して、其點に於いて彼等は之を不正だと言つた其時既に方法論上の誤謬をやつて居ると言はなければならぬ。其方法論上の誤謬であると云ふ事を指摘したのが R. Stammler の Wirtschaft und Recht でこの書の論點は全く其處にあるのである。

それから餘剩價値論の歸結であるが、餘剩價値とは一體どう云うことを言ふのであるか。彼等は繰返して餘剩價値論に依つて現代資本主義のからくりがすつかり分つて來た、今日の不正と云ふことが曝露されて來たと云ふことを述べて居る。そして今日の資本主義經濟組織が不正であり不義であるならば、直ちにこれを打破つて正義な公正な社會に立直して行かなければならぬ筈である。だから彼等が餘剩價値論を喧しく言ふのは、實は現代の社會を破壞して直ちに理想の社會を實現して行かうと云ふ點にあらねばならないので、餘剩價値論は直ちに社會革命と云ふ事を豫想して居たのである。而してマルクスがさう云ふ意氣に又、さう云ふ考に熱して居たのは四三年から四四年の頃であつて、四三年にはライン新聞の發行を禁止され直ちに巴里に行つて、そこで經濟學を勉强してゐる。其經濟學を研究したのは主にプルードンの影響、寧ろプルードンの指導を受けてなして

居つたのであつて、從つてその頃の考と云ふものは何處までも今日の資本主義經濟組織は不正不義の社會であるから、之を直ちに破壞して仕舞はなければならぬと云ふ思想に燃えて居つたのであつて、前述の如く四年の十一月には「新ライン新聞」の中に革命的恐怖主義と云ふやうなものを謳歌して、舊時代の死んで行く惱み、新時代の生れて來る惱みと云ふものを縮めて行くには、我々は革命的恐怖主義を斷行して行かなければならぬと云ふやうな事を言つて居つたのである。然るに其後彼の考は段々に變化して、餘剩價値論の歸結と云ふものは頗る平凡なことに終つて仕舞つた。謂ふ所の平凡な結果と云ふのは何であるか。正常勞働日(Normalarbeitstag)を法律で規定して貰はねばならぬと云ふことを信ずることが餘剩價値論の歸結であると云ふ風になつて來たのである。それはどう云ふことであるかと云ふに、一八六八年に、資本論第一卷が出たのであるが、先に述べた通り其中に餘剩價値論を詳しく論じてあるのである、その詳しく論じた終りに、餘剩價値論に、對する歸結を求め正常勞働日と云ふものを法律に依つて決めると云ふことになつて行つたのである。謂ふ所の正常勞働日とは、最少勞働日と最大勞働日との其中間に位する所のものである。謂ふ所の最小勞働日とは段々必要勞働時間が短縮されて、四時間だけ働けば十分勞働者が生活することが出來る、三圓得ることに依つて生活が出來るやうになつたとすると、此四時間が最小勞働日である。最大勞働日と云ふのは勞働者がもう之以上働けば倒れて仕舞ふと云ふ勞働者の最大の力を盡すことである、例へば十二時間働いて居つたものが、十六時間も十七時間も働く時は勞働者は倒れて仕舞ふ。最小勞働日と最大勞働日との間の極く正常な一定の八時間なら八時間と云ふ時間がある、それを法律に依つて規定して貰はなければならぬと云ふのである。然るに今日から見れば此正常勞働日と云ふものは、國際勞働會議でもう殆ど議決になつて居て、各國は其勞働會議の結果として色々と之を實地にやつて居ると云ふやうな譯であるからして、今日では殆ど怪しむことなく之を行つて居るやうな具合である。それをマルクスは餘剩價値論に依つて現代の秘密を曝露したと云ふやうな大袈裟なことを言ひながら、今日では誰も怪まずにやつて居るやうなものを歸結としたのは、前の一八四三年、四四年、四八年の革命的恐怖主義を謳歌して居つた時と、資本論の第一卷の一八六七年頃にな

つた時とでは、全く彼の考が異つて來たからなのである。卽ちもう一八六七年以後の、資本論以後のマルクスと云ふ者は謂はば極く尋常一樣の經濟學者になつて仕舞つて、以前述べて居たやうな共產主義、社會主義の寵兒として働くと云ふやうなことがなくなつて仕舞つたからではなからうかと察せられるのである。詰り正常勞働日を決定すると云ふやうなことは所謂泰山鳴動して鼠一匹と云ふやうな譯で、そのためエンゲルスの如きはマルクスの死んだ翌年の八四年に彼の Das Elend der Philosophie を改竄して第四版を出したが、その序論の中に次の樣なことを書いて居る。マルクス及び我々は一生懸命になつて此餘剩價値論を以て今日の不正不義と云ふことを論じたのである。併しながらそれは唯我々は餘剩價値と云ふことが今日の經濟組織の中に事實として存在すると云ふことを言つただけで、何等それ以上のことを言つたのではない、と。嘗て餘剩價値論から今日の不正不義を唱へ、その不正不義の爲に革命を斷行しなければならぬと言ひ、而もマルクスの死んだ翌年に至つて我々は唯共事實を言つたに過ぎない、それ以上を言つたのでないなどゝいふのは、如何に彼等の思想に變化があるかを示してゐるもの



である。

最後の抽象と云ふのは餘剩價値論が餘り抽象論であると云ふことである。搾取されると云ふことを能く言ふが、搾取する者は誰であるか。これに就いてマルクスは餘程變なことを言つて居るのである、搾取する所の者はそれは工場經營者であると云ふのである。販賣する商人は搾取者ではないと言つて居る。考へて見ると勞働者は生產者として搾取されるかも知れない。併し生產者として搾取される外に尙ほ消費者として搾取される。商店に行けば一圓のものを一圓二十錢で買つて來なければならぬのである。此二十錢だけは搾取されると云ふことになる。又例へば酒稅を課せられるやうなことがあると假定すると、彼等は納稅者として搾取されなければならぬ。又彼等が土地を借りて家を建てゝ居るとか、或は土地と家とを共に借りて居るとか云ふ場合には、地代や家賃を搾取されると云ふやうな事もある。マルクスは搾取されると云ふことを喧しく言ふが、それは唯勞働者が生產者として搾取されると言ふことだけを見て、消費者として納稅者として地代、家賃の支拂者として搾取されると云ふことを見逃して居る。のみな

らす或る工場で出來た所の生産品を商つて利潤を得て居る商人は搾取者ではなくて唯共同の享受者である、卽ち商人は唯工場經營者が搾取した所のものを共同に享受して居るに過ぎないから、彼等商人は共同の享受者(ミットゲニーセンデ)であるけれども搾取者ではないと云ふ所からして、マルクスは資本論の五二七頁に利潤(Profit)利子(Zins)利得(Handelsgewinn)と言ふやうなものは何等搾取したものではない、これは工場經營者が豫め斯う言ふやうなものを差引(デスカウント)いて自分の製品を賣捌いて居るのであるからして、商人が斯う云ふものを取つた所でそれ等は搾取ではないとを述べて居るのである。然らば一體工場經營者が何故自分の製品を値引(ディスカウント)して卸してやるかと云ふ事自體が分らない。元來取引の關係であるとか、或は各人の間の利害の關係であるとか云ふものは、實際に於いて非常に複雜になつて居るのであるが、マルクスはそれを唯單に抽象して見たために、かゝる商人は搾取するのでなくして、搾取する者は工場經營者であると言ふやうな議論になつて來たのであらうと思ふ。其處にマルクス餘剩價値論が非常に抽象的なものであると云ふ理由が存在して居るかと思ふ。

——昭和三年八月文部省思想問題講習會講演——

# 六　階級闘爭論の倫理的批判

——本論はマルクス及びマルクス主義の階級闘爭論を對象としてそれを批判するのである——

## 一　「階級」の意義

それは多くの場合でも同樣であるが、特に或る自分の思想を世間に向つて宣傳しようとするに當りては、先づ第一に、そのモットーになる言葉を擇ばなければならぬのであつて、それが巧に擇ばれたか否かに依つてその宣傳力に甚しき相違が起つて來る。同じやうな思想であつても標語の取り方の巧な者は非常に强く、且つ廣く宣傳されるのに、その標語の取り方の不味い者は、たとひその思想は立派なものであつても一向宣傳されずに終ることがあるのである。マルクスの書物を

讀んで感ずることは、彼の標語の擇び方が如何にも巧であるといふことである。マルクスの思想が多くの社會主義的思想の中で、最も廣く世界的に宣傳されてゐるやうであるが、そうなつた原因の一つは、恐らく此の標語の擇び方が、實に巧妙であるといふ點に存するかと思ふ。

階級鬪爭といふ言葉の如きも矢張りその一つであつて、階級鬪爭といふ言葉自體が何となく無產者の氣を唆つて、その結束を促し、有產者、資本家に對して敵對心を懷かしめるやうな、微妙なる力を有つてゐる言葉であつて、而してマルクスやエンゲルス等は到る所に於いてその巧なる標語を操つて巧みに讀者の氣を唆つてゐる。今その二三の例を擧げて見よう。「すべて從來の社會の歷史は階級鬪爭の歷史である」(Manifest, S. 9)(宣言書には此他に猶一七頁、二三頁にも同樣な文句がある)。或は「無產者、卽ち社會の最下層にをる所の者は、官僚社會を形成してゐる所の上層建築を吹き飛ばしてしまふに非ずんば、到底その頭を擡げることは出來ない」(Manifest, S. 17)とか、或は「文明の基礎は一階級が他階級を搾取することに存するが故に、文明の全發展は常住の矛盾の中に進動する」(Ursprung der Familie, S. 144)とか或は「被壓迫階級は階級對抗の上に建てられてゐるあらゆる社會の生活條件である。(中略)。被壓迫階級が解放されることが出來るべきであるならば、その場合は既に獲得されたる生產力と、現存してゐる社會的設備とが最早相兩立することが出來ない階段に到達された時であらねばならぬ。(中略)。革命的要素が階級として組織されるのには、一般的に舊社會の內部に於いて開展することの出來た一切の生產力が成熟してゐる事を必要とする」(Das Elend der Philosophie, S. 181)とか、或は「自然生的生產發展を持つ社會に於いては——現代も亦それに屬してゐる——生產者が生產方便を支配せずして、むしろ反對に生產方便が生產者を支配する。かゝる社會に於いては、すべての新しい生產の槓杆は必然に生產方便の下に生產者を奴隸にする所の新しい方便に急變してしまう」(Anti-Dühring, S. 314)などゝいつてをる。(此等の他にもかうした論述は猶澤山ある。)以上で分るやうにマルクス及び其一黨は寔に巧に階級鬪爭なる語をかゝげて、それによつて大衆の心を掴んで之を煽動するやうな言葉遣ひをやつてゐる。かやうに標語の取り方は實に巧妙を極めてをるが、それはそれとして、マルクスの階級鬪爭論といふのは歷史は必然に搾取

階級と被搾取階級との階級闘争の歴史であるといふのである。

そこで吾人はその階級闘争論を檢討するに當り、先づ第一に謂ふ所の階級とは如何なる者であるかを吟味しなければならぬ。エンゲルスはその著アンチ・デューリング(一九一四年、八版、三〇三頁)に於いて「社會に分業が起るに隨つて、その分業が基礎となつて、社會的階級が生じたものである。卽ち分業の法則はやがて社會階級分裂の基礎を爲すものである」といふ言葉を以て階級の意味を表はして居る。しかし若しさう云ふやうに分業から社會階級が生じたといふことであれば社會階級とは職業階級といふと同意義の者となつてしまふであらう。然るに職業階級が社會階級であるといふことになると、社會階級といふ者は實に分らない者にならねばならぬ。何となれば分業とは人々の執る所の職業若しくは作業が、何等原理の上に於いてゞなく、單にその形の上に於いて甲と乙とによつて異ることをいふものである。例へば工場に働いてゐる職工と、田圃に働いてゐる農夫とは、少くとも作業としては違つてゐる。加之同じく工場に働いて居つても、職工達の執る所の作業はその持場々々によつて種々に分れて居るのである。隨つてかうした分業によつて、社會階級が生れたものであるとしたならば、工場勞働者と農民とは別々の社會階級に屬してをる者であらねばならず、又同じ工場勞働者であつてもその職業如何に依りて別種の階級を作らなければならないわけである。是は社會闘争論の說いてゐる搾取階級と被搾取階級との對立の意味ではない。此等兩種の階級とは、さう云ふ職業別の如何に依つて分れたものを言ふのでなく、工場勞働者や小作百姓やはむしろ搾取せられる一つの階級に屬してゐる者と見られてゐるのである。それ故にエンゲルスの分業から階級が生じたと云ふ風に說くのは、マルクスの意を得たる者ではない。

此等マルクスやエンゲルス等の前に佛蘭西のジュアン・ポール・マラー(Jean Paul Marrat)も階級闘争といふことに注意して佛蘭西革命は畢竟階級闘争から起つたものであると言つて居る。

然らばその謂ふ所の階級とは何であるかと言へば、マラーは財產の有無及び其大小若しくは多寡に依つて生ずる所のものであると說明して居る。しかし是も亦社會闘争論で說いてゐる階級ではない。

然らばマルクス其人は階級を如何に說明してゐるかといへば、彼は階級鬪爭と云ふことをば彼の思想體系の一中心觀念としておきながら、而も之を明瞭に定義してゐる所は無いのである。僅かに之れ有るは浩瀚なる氏の著作の內に、私の見たる限りに於いては、僅かに資本論、第三卷、第二部の終に說いてゐるだけのやうである(Hamburg, 1894, S. 421—422)。

其處にどう說いてあるかといへば、資本主義的生產方法に基く所の近代社會は三種の階級から成立してをる。第一種は唯單に勞働力だけを有つてゐる階級であり、第二種は資本を有つてゐる階級、而して第三種は土地を有つてゐるそれである。此等三種の階級は各彼等の生產に參加する形を異にしてゐる。卽ち勞働力を有つてゐる者はその勞働力を、資本を有つてゐる者はその資本を、土地を所有してゐる者はその土地を提供する事に依つて各生產に參加してをる。隨つて彼等の所得の形も亦それ〴〵異つてゐる。勞働力を提供した所の者の所得は、勞銀、又は賃金と謂はれ、資本を提供した所の者の所得は利潤と謂はれ、土地を提供した所の者のそれは地代と謂はれる。此等の賃金・利潤・地代は、全く異つた性質のもので

あつて、此の三つの收入に依つて生活してゐる所のものは皆それ〴〵異つた性質の上に生活の基礎をおくものであつて、從つて異つた階級を形成し、それに屬してゐる所のものである。是が轉て階級と稱する所のものである。斯う云ふ風に說いてある。然るに此の資本論は未だ完了に至らずして絕筆になつてをるので、その最後の第七編第五十二章階級論は僅かに二頁弱ばかり論述されてあるだけで、從つて右に說明した以上、更に詳細なことを聽くことは出來ないのである、

それで、此の資本論の中にある所の勞銀と利潤と地代とに依つて生活する所の三階級、卽ち勞働者、資本家、地主、此の三階級は之を社會上の事實に當て嵌めて見て、果して階級と云ふ觀念を明瞭に限定することが出來るかを吟味して見ると、中々さうではない。實際上の社會には資本家でもあり地主でもある所の、その中間の樣なものもあり、勞働者でもあり、資本家でもある所のその中間の樣なものもある。卽ち社會上には勞働者、資本家、地主と判然たる輪廓を有つて階級が對立してゐるといふよりは、それ等からいへばむしろ中間階級と觀られ得る者が多く存在してをるものである。加之、勞働者、資本家、地主といふが中にも、皆それ〴〵更に小別す

ることが出來る。例へば勞働者といふが中には所謂熟練職工と、不熟練職工とが各々その利害を異にして相對立してをることがあり、又資本家、地主の中には大資本家、大地主と小資本家、小地主とが其利害を異にしてをるが如くである。かやうに勞働者、資本家、地主等が更に小別さるれば、そこに下級階級ともいふべきものが生じて來る譯である。かやうに謂ふ所の三階級の外に中間階級、下級階級が生れて來るのであるが、その他に猶第三には推移階級とも名づくべきものさへある。例へば甲の階級から乙の階級へ移る、勞働者から資本家になるといふやうな場合である。斯くの如く社會的階級は種々雜多の者が混在してをるもので、勞働者、資本家、地主と云ふ極めて單純なる三階級から構成されてをるものではない。換言すればこれで階級の意義が明瞭にされたといふことは出來ないのである。それ故マルクスは階級といふ語を用ゐるに當つては、多くの場合之を定義的に說くことを避けて、單に列擧的に述べてゐる。共產黨の宣言書の劈頭に、これまでの歷史はすべて階級鬪爭の歷史であると云ふ文句が陳べられてをりながら、然らばその謂ふ所の階級とは何であるかと云ふことに就いては、何等之を明瞭に限定することをせずに、唯その後に列擧的に自由民と奴隷、大名と家來、組合の親方と弟子、換言すれば、壓迫するものと、壓迫せられるものとの階級、是等が從來絕えず相對立して互に鬪爭をつゞけて來たものであると云ふ風に、列擧的に述べてをるに過ぎないのである。

それ故マルクス及び其一黨は階級鬪爭と云ふことを盛んに說くのであるけれども其階級とは何ぞやに就いては、何等科學的正確さを以て述べてをる所はなく、唯所謂機會主義に依つてその時、その時に都合のよいやうに意味を變更して行くだけに過ぎないやうに見えるのである。機會主義に依つて意味を變更することは所謂戰術としては寔に都合のよいことであつて、卽ち味方に取つて都合のよい者は、それを自分達の階級に屬する者として仲間扱ひをなし、自分達の階級に組入れて都合のわるいものは何とか理由をつけて、その階級の外に出してしまうのである。

これに就いてはクーノー(H. Cunow)——マルクスの辯護者である、——の Die Marxsche Geschichts-, Gesellschafts- und Staatstheorie (1923) と云ふ書物は可なりマルクスを辯護し